岩手県総合計画審議会
令和５年度第３回県民の幸福感に関する分析部会

（開催日時）令和５年６月 22 日（木）９：30～15：30
（開催場所）エスポワールいわて　小会議室

１　開　会
２　議　題
　（１）分野別実感の分析について
　（２）その他
３　閉　会

出席委員等
　吉野英岐部会長、若菜千穂副部会長、谷藤邦基委員、
　Tee Kian Heng（ティー・キャンヘーン）委員、山田佳奈委員、和川央委員
欠席委員等
　竹村祥子委員、広井良典オブザーバー

１　開　会

○八重樫政策企画課評価課長　御案内の時間になりましたので、ただいまから第３回県民の幸福感に関する分析部会を開催いたします。

私は、事務局を担当しております政策企画部政策企画課の八重樫でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

本日は、竹村委員、広井アドバイザーが欠席となっておりますが、若菜委員はリモートで御出席いただいております。運営要領第６条第２項に基づき、委員の半数以上に御出席いただいておりますので、会議が成立していることを御報告いたします。

なお、本日午前中につきましては、岩手県政策企画部小野部長、小野寺副部長、政策企画課の加藤総括課長が出席しておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、議事に入ります前に資料の確認をさせていただきます。本日の資料は、資料１―１から資料１―９、資料２のほか、子育てに関する男性、女性別の集計を追加資料として配付しております。お手元の資料、御確認お願いいたします。不足等ありましたら、事務局までお声がけをお願いいたします。

また、本日の部会につきましては、前回御了承いただいておりますとおり非公開としております。

また、本日は、ティー委員、若菜委員につきましては別用務のため、午後は退席されるということとなっております。

２　議　題

（１）分野別実感の分析について

○八重樫政策企画課評価課長　それでは、議事に入りたいと思います。運営要領第４条第

４項の規定によりまして、部会の議長は部会長が務めることとされておりますので、以降の進行につきましては吉野部会長にお願いしたいと思います。

○吉野英岐部会長　おはようございます。本日は、午前中は大勢の方に出席していただいて、県、それから委員もそろっていますので、できるだけ午前中に濃密な議論をしていきたいと思っております。特に子育てについては前回積み残しで、今回に回すということでしたので、追加資料も含めての配付となっていますので、皆さん、御専門にかかわらず御意見いただければと思っております。

それでは、資料１―９から子育ての説明をお願いしたいと思います。では、お願いします。

○松舘政策企画課特命課長　おはようございます。事務局の松舘です。よろしくお願いいたします。

それでは、資料について御説明申し上げます。まず、資料１―９を御覧ください。こちらが子育ての資料となります。それから、追加資料として、もう一つお配りしております。こちらも子育ての資料となります。

初めに、資料１―９ですけれども、訂正をお願いしたい部分がございます。２点ございます。１点目です。資料１―９の１ページ目、表の 13、中ほどにございますけれども、こちらの表の２段目、県の計というところの行ですけれども、Ｒ５の数値が「0.06」と記載しておりますが、こちら「3.06」の誤りでございます。申し訳ございませんが、御訂正をお願いいたします。

それから、同じページ一番下、表 14 です。子育ての実感において高値で推移している属性と記載しておりますが、こちらが高値ではなくて低値となります。

申し訳ございませんが、以上２点修正をよろしくお願いいたします。

それでは、改めまして、資料１―９の１ページ目となります。こちらは、例年の分析部会の年次レポートの形式で整理したものとなります。後ほど御説明いたします。

続いて、２ページを御覧ください。こちらは県民意識調査の結果です。第１回の部会の資料５―２としてお示ししたものと同じ資料となります。分野といたしましては、基準年である平成 31 年と比べまして、実感の平均値は横ばいとなっております。

男女別で見ますと、女性のほうが男性より実感が高い傾向が続いております。

年代別で見ますと、50 代、60 代、70 歳以上では 2.9 点台から 3.3 点台で推移しているのに対しまして、20 代から 40 代は 2.7 点台から 3.2 点台で推移しておりまして、50 代以上の年齢層より低い値で推移している傾向にございます。

子の数別で見ますと、１人、２人、３人、４人以上では 2.9 点台から 3.2 点台で推移しております。子どもはいないという属性ですと、2.6 点台から 2.8 点台で推移しております。子どもがいる方よりも低い値で推移している傾向にございます。

それから、追加資料ということでお配りしました資料のほうの１ページを御覧いただきたいのですけれども、こちらは男女別で、かつ年齢別に区分して集計したものとなります。先ほど男性のほうが女性のほうより低い傾向で続いているというようなこともございましたので、さらに年代別で分けてみた資料となります。後ほど御覧いただければと思います。

続いて、資料１―９に戻りまして、３ページ目を御覧いただければと思います。こちらは補足調査の平成 31 年以降の実感平均値の推移となっております。補足調査では、属性として可処分所得がありますので、参考としてお示しをしております。こちらで見た感じでは、この所得のところで一定の傾向があるのか判断は難しいのかなと思いながら見ておりました。

続きまして、４ページ目です。こちらは令和５年補足調査の属性と回答のクロス集計となっております。細かい字となっておりまして、申し訳ございません。

続いて、５ページ、こちらは補足調査の平成 31 年から令和５年の実感の変動の分布となります。こちらは、前回第２回の資料でお示ししたものと同じ資料となります。

続いて、６ページ目です。こちらは、補足調査の分野別実感の回答理由の毎年の上位３位をまとめたものになります。上段は、平成 31 年を基準とした実感の変化別、下段は単年での単純集計となります。実感の変化別で実感が上昇している方や毎年の単純集計で「感じる・やや感じる」を選択した方の理由は、子どもを預けられる人の有無、あるいは子どもを預けられる場所の有無が上位に挙がっております。

一方、実感が低下している方、あるいは単年の単純集計で「あまり感じない・感じない」を選択した方の理由は、子どもの教育にかかる費用、あるいは子育てにかかる費用が上位に挙がっております。

７ページ、８ページ、こちらは、平成 31 年から令和５年の実感の変動の理由別分析結果となります。こちらは、第１回の資料でお示ししたものと同じものになります。

続いて、９ページ以降、最後のページまでですけれども、こちらは補足調査の単年での単純集計で、属性別に年代と子どもの数別で集計したものとなります。

それから、追加資料として別に配付しました資料のほうの３ページから６ページ、こちらには同じように男性と女性の資料をおつけしております。傾向としましては、多くの属性で「感じる・やや感じる」を選択した方の理由は、先ほど申し上げましたとおり、子どもを預けられる人ですとか子どもを預けられる場所が上位になっておりますし、「あまり感じない・感じない」を選択した方の理由は子どもの教育にかかる費用、子育てにかかる費用が上位といった傾向になっております。

続いて、資料の１―９の最初の１ページ目に戻っていただきまして、こちらが年次レポートの形式で整理したものですけれども、実感が横ばいの分野につきましては、①分野別実感の概況、それから②一貫して高値または低値で推移している属性とその要因という構成にしております。今回の子育てについては、本日御審議いただいた内容を取りまとめて、①のイのところの大きな丸として追加するか、あるいは①と②の間に新たな見出しで追加するような形での記載を考えております。

事務局からの説明は以上となります。御審議よろしくお願いいたします。

○吉野英岐部会長　御説明ありがとうございました。

ここは、特に大きな変化がなかった分野ではあるのですけれども、重要な施策の一つでもあり、逆になかなか効果が出ていないのはなぜかという疑問も少しありましたので、横ばいではあるけれども、取り上げていただいた分野です。

いろいろクロス集計等々していただいて、補足調査に見られる要因も見ていただきまし

たけれども、ここの部分で御質問、御意見をいただきたいと思います。
　では、ティー委員。

○ティー・キャンヘーン委員　気づいた点としましては、補足調査でも本調査でも子どもがいないというところの子育てしやすいと感じますかというところが低いというのに１つ気づきました。
　それから、年代で 20 代から 40 代までが低いということなのですけれども、それにつきましては、第２回の資料１の３ページ目なのですけれども、（２）番。

○吉野英岐部会長　年代別。

○ティー・キャンヘーン委員　はい、年代別で子どもがいるかいないかで見てみると、確かに 50 代以降と比べて 20 代から 40 代が子どもはいないの数は多いということが見てとれます。
　20 代から 40 代で皆さんは家族構成でどうなっていたかというと、これも２回目の資料１の２ページ目なのですけれども、それを見ていたならば、これは結婚しているかしていないかちょっと見分けはつかないのですけれども、２世代世帯とか３世代世帯が結構多いです。仮にこれが結婚をしていたとしたならば、子育てがしやすいと感じていなくて、子どもを生むのをちゅうちょすると想像できるのではないかなと。では、それはどうしてかというと、収入かなと思ったら、収入のデータがなくて、補足調査ではそれは入れていないということなので、気づいた点としましては、ここまでと。では、どうしてかというのは、ちょっと皆さんの意見聞きたいなと。

○吉野英岐部会長　ありがとうございました。
　子どもがいないというところの人たちは、確かに実感が低いのですよね。ですから、子どもがいないから子育てを充実しているという実感がないのか、実感がないために逆に子どもがいないというか子どもを生む方向に進まないか、どっちもありだとは思います。だから、当事者でない人が外から見て低いと思ってしまうのか。
　はい、どうぞ。

○ティー・キャンヘーン委員　この集計というのは、「わからない」という項目はありましたか。すみません、資料の第２回のこの集計してもらった資料の、「わからない」というのは、チェックできますよね。本調査で、ここで「感じる」、「感じない」以外に「わからない」というのもありますよね。よろしいですか。

○吉野英岐部会長　県民意識調査の選択肢として。

○和川央委員　あります。「わからない」があります。

○ティー・キャンヘーン委員　あるので、それ抜いているのです。抜いているということ

は、何と言うのですかね。

○吉野英岐部会長　当事者ではないから判断できない。

○ティー・キャンヘーン委員　という人はもう抜いているのですよ。

○吉野英岐部会長　はい、そういう本当に分からない人ね。

○ティー・キャンヘーン委員　はい。もう抜いているので、やっぱり多分子育てしやすいと感じていないのです。「わからない」という人はもう抜いているので。

○吉野英岐部会長　子育てしやすいと感じていないがために子どもがいないというパターンも考えられるということですね。

○ティー・キャンヘーン委員　考えられると。分からない人はもう抜いている。

○吉野英岐部会長　それはこういう調査でも調べているし、あるいはよくあるのは実際の子どもの数と理想というか望ましい子どもの数を聞いてみると、望ましいほうが多いのに、実際は少ないと、それはなぜかと言われれば、やはり生んで育てる環境が厳しそうだからというような、よくある一般的な調査でもそういった推論もあるのだけれども、この県民意識調査からも子どもの数は聞いていませんけれども、理想の数は聞いていないけれども、子どもさんがいないというところについては、そういう解釈も当てはまるかなということですかね。
　もう一回、どうぞ。

○ティー・キャンヘーン委員　すみません、昨日のＮＨＫの朝の番組で、放課後の学童保育に落ちたという話もあるので、なかなか入れないという話も出てきているので、聞けば聞くほど何か……

○吉野英岐部会長　子どもがいたら大変と。

○ティー・キャンヘーン委員　というようなイメージになってしまうのですよね。

○吉野英岐部会長　ちょっとネガティブな感じになってしまうということですね。

○ティー・キャンヘーン委員　どんどん、どんどんと。

○吉野英岐部会長　報道は報道としてもですね。

○ティー・キャンヘーン委員　はい。

○吉野英岐部会長　子育てをする環境の厳しさがやはり実感が持てない、それがさらに子どもの生む生まないに影響している可能性もある。だから、高齢者でよく分からなくて、外から見て低いというよりは、本当に 20 代、30 代の当事者になる可能性のある人たちの中で子どもがいない人たちにやっぱり実感を持てないという傾向があれば、そこは何らかの改善といいましょうか、それは必要かなとは思っていました。

どうでしょうね、あとは。

はい、では谷藤委員お願いします。

○谷藤邦基委員　ちょっと今のティー先生の話とかぶる部分もあるのですが、かなり全般的な印象の話として申し上げると、６番のところでもろもろ理由が出てきているわけですけれども、アのほうの低下の要因、ないしはイのほう、単純集計の感じないほうに出てきている要因というのを見ると、かなりお金に関わる要因が出てくるのですが、ところが上昇なり感じるほうを見ると、お金の話というのは出てこないのです。ということは、多分お金の問題というのはかなりプリミティブな条件になっていて、まずそこクリアしないと、次の心配事に関心が行かないのですね、多分。

ただ、ではそれと収入、所得との関係があまり見られないというのは、実は収入や所得が低い人たちにはそれなりに支援策あるのです。なので、実はそこからも漏れているか、うまく活用できていないかという人たちがいるのかもしれないし、ちょっとそこは我々の調査だけでは分からないのですが、でも何かそういう可能性は示唆されているのかなという気はします。

あと、子どもはいないというのも十把一からげで子どもはいないでくくってしまうと、かなり実はまずいのだろうなと、今のティー先生の問題提起に関わるところですけれども、やっぱり年代別にもうちょっと細かく見ていかなければいけないのだろうなと。今子どもはいないけれども、潜在的に子どもを持つ可能性がある人たちと、ない人たちはやっぱり分けて見ないといけないと思うのです。

特に潜在的に子どもを持つであろう人たちがネガティブな印象を持っているとすると、そこは何か対策が必要になってくると、多分。そういったことは、多分施策にどう反映するかということを考えたときには考慮されてこなかったのではないかなと思った次第です。

実際昨日７時半からＮＨＫの「クローズアップ現代」でティー先生がお話しになった学童保育の問題やっていまして、昔は「ハッシュタグ保育園落ちた」だったのが今は「ハッシュタグ学童落ちた」になっているのだそうです。

結局保育園、保育所のほうは、かなりみんな騒いだことがあって、結構対策されてきたのだけれども、学童のほうはちょっと遅れているし、そもそも学童保育の対象になると、少なくとも小学校に上がっているので、そうすると１人で留守番もできるのではないかと。だから、仮に待機状態になっても取りあえず家に置いておくとか、そういう対応も出てきているというのが話だったのですけれども、ちょっと岩手県の実情は分からずに話ししています。主に首都圏のことが話題になっていましたので。

実際に学童保育のほうの受入れが多くなり過ぎて、過密状態でもう現場の職員が泣いて、もう私らの力ではどうにもなりませんと言っているような状況があるということだったの

で､そういったことも前広に対策しながら考えていくというのも必要かもしれないですね。印象ということでお話ししました。

○吉野英岐部会長　ありがとうございました。
　まず、一通り全体の印象を伺いましょうか。
　山田委員さん。

○山田佳奈委員　ありがとうございます。私ちょっと違う角度からなのですけれども、補足調査のほう、例えば今回追加でお配りいただいているもの、男女別の資料とか見てもそうなのですけれども、例えば男性、女性に、逆に「感じる・やや感じる」という方で見たときに、先ほど谷藤委員がおっしゃったように、預けられる場所あるいは人というのはある種、社会背景を含むといいますか、子どもさんを預けられるかどうかというところが高く出ていらっしゃるのですが、１、２とですね。
　その次に、項目の３として配偶者の家事への参加というのが出ています。追加資料の５ページ目を拝見しても、女性のほうも「感じる・やや感じる」でいくと、１から３が最も高く出ています。同率１位といいましょうか。もちろん今は低値の話しが主だったと思いますが、ごめんなさい、これレポートとしてどうするかというところに関わるのですけれども、やはりこのように「子育てがしやすい」と感じていらっしゃる方が実際どのように感じているのかということも私は重要な観点ではないかなと思って拝見しておりました。
　あわせて言いますと、例えば医療機関も、医療機関はこちらの両方といいますか、あとは勤め先の理解ですとか就業状況といったところという、例えば補足調査の項目でいきますと､7 から 10 というのは勤め先の福利厚生や理解度ということでくくれるかなと思うのですが、こういったところも特に女性のところは高く出ている、総体的にちょっと高めに出ているのではないかなという気がしますので、こうしたところもある程度言及したほうがいいのではと個人的には考えているところです。
　つまり、最終的にどういうことがこの結果から示唆されるかといったときに、実感の高さにはこういう要因が効いているのではないかということもあわせて示唆してもいいのではないかなというふうに感じたところです。
　以上でございます。

○吉野英岐部会長　ありがとうございます。
　今の補足調査の中で属性別に「感じる」､「感じない」､「どちらともいえない」の理由の棒グラフを見るとということですよね。

○山田佳奈委員　そうです。

○吉野英岐部会長　子どもを預けられる環境、周囲の環境の面と、それから就業状況、職場環境なんかで「感じる」人はやっぱり高い値が出ているとかね。でも、これ結構男女で違うのですね、見たら。男の人は、あまり感じないというか、そういうところもあるのかなと。やっぱり自分の就業状況が厳しくて、なかなか自由に子育て……自由というか、や

らなくてはいけない時期にできないというのが多いときついのだろうなということですね。ありがとうございました。
　では、和川委員いかがでしょうか。

○和川央委員　私もティー委員と同じように、子どもがいないという人が一貫して一番低いという傾向が以前から続いていたということを考えると、やはりこれが子どもを生まない原因の一つでもあるのかなと思います。
　子育てについては、分野別実感に変動がなかったので、これまで分析対象にしてこなかったのですけれども、属性ごとにもう少し切り刻んでいけば、また違ったものが見えてくるのかなと思っています。
　そういった意味では、子どもがいないという人の年齢を見てみるのもそうですし、あと子どもがいる人でも出産可能年齢で見ればどうなのかというのも見る必要があると思います。何が言いたいかというと、子育てをしていて、おじいちゃん、おばあちゃん方に「今の人たちはいいよね」、「いっぱい預けるところあるし」と言われることがあります。私としては、「あなた方の頃は共働きじゃなかったよね」と反論したいと思いながら、お年寄りたちの「いいよね」というのが本当に現在の子育ての苦労を理解していて、いいねなのか、自分たちの時代に比べて今は、いいよねと、ちょっとノスタルジーを含んだ意味なのかによって、実感が高いことの意味合いが変わってくるかなと考えると、やはりターゲットが50歳未満あるいは30代、20代ということなのであれば、それに絞って分析をするということでまた違ったものが見える可能性があるかなと感じているところです。

○吉野英岐部会長　ありがとうございました。
　部長から。

○小野政策企画部長　先ほどティー先生、和川委員がお話しになったところとちょっと同じような観点からなのですけれども、補足調査のところの今日配られた２ページの表の先ほどは子どもはいないといったところだったのですけれども、もう一つ、世帯構成のひとり暮らしも一つポイントがあるのかなと。さっきのように子育てしにくいということで子どもがいないのと同じように、さらに言うと、結婚に至っていないといった観点ももしかして見られるのかもしれないと思いますし、ひとり暮らしのところを見ると、Ｒ４、Ｒ５については３は超えているのですけれども、ほかと比べて少し低めには出ているのかなと、２台のところがずっと続いてきているというところもありますので、有配偶率の低さといったものもやはり一つ大きな課題になっておりますので、その背景としてもしかするとひとり暮らしであっても必ずしも結婚している方でもひとり暮らしの方がいるかもしれないのですけれども、こういった観点から見るということも可能ではないかなということで、ちょっと気づいた点をお話ししました。
　以上です。

○吉野英岐部会長　ありがとうございました。
　そうですね、ひとり暮らしの場合結婚していない可能性が高いということもありますし

ね。

若菜委員、まず全体の感想はいかがでしょうか。

○若菜千穂副部会長　ちょっと学童の話になったのですけれども、私は花巻で学童の会長をそのときやっていて、そのときたまたま花巻市全体の学童の会長をやったのです。花巻市は、実は学童が保護者運営になっていて、例えば会長だった私が指導員さんの給料も決めるみたいな、特にそういう状態でやっていたのですけれども、当初からですけれども、学童は足りなかったです。待機が結構いて、会長の仕事の一つとして、何人かいるわけです、入れない子が、10 人落とさなければいけないみたいな。Ａさんを落とすかＢさん落とすかという判断も実はやらされた経験があって、この人はおばあちゃんが市内にいるから落ちてもらおうみたいな、そういう仕事があったのですけれども、ただ市のほうの回答としては、実は学童の待機はないですという回答になって、多分テレビでもあったのですけれども、隠れ待機というのがどうしても学童は生まれやすい仕組みだったので、やっぱり保育園が足りない、保育園に入っていた子は基本的に学童に入りたいので、少しずつ学童というのが足りなくなってきているのですけれども、ただ花巻市もそうですけれども、結構、面積広げたりしてくれていて、私は対応してくれているという実感があります。

今回の資料、配られた７ページとかさっき５ページと書いてあった、実感の変化別の方ですね、それではなくて、上昇した人と低下した、これでさっき山田委員も言っていたのですけれども、私がこれを見たときに、実感が上昇している人はどれが多いかというと、預け先があるというところですよね。むしろ実感が低下した人は、費用の面と医療と遊び場というところで、私は、そういう意味ではむしろ預け先増えているよねというところは県なり市町村の施策として一つ成果が出ているのではないかなと読んでもいいと理解をしています。

もう一つ、最後のはさっきからずっと議論になった今回の資料１―９の私も「わからない」、子どもがいないというところの資料で「わからない」が低位に関わっていると、これだけ読むとちょっと全然意味が分からなくて、さっきのティー先生の議論も私ちょっと全然割とどういう「わからない」は抜いている、子どもがいない人の感想が効いていて低位置なのだという理解でいいのですかね。もうちょっとこの資料１―９も、これを配付するのであれば、「わからない」が入っていることのちょっと補足的な説明というのが要るのではないかなと思ったのが１つと、あと今小野さんもおっしゃったのですけれども、私の周り、私は今 50 ですけれども、40 代とか子どもがいない人もいるのですけれども、欲しくてもできなかったと、不妊治療すごくしている人が周りに多いという実感があって、さらに結婚したいのだけれども、なかなか結婚もできなくて、40 代になってしまったみたいな、だから子育て環境がよくないから子ども生めませんという人もいるとは思うのですけれども、やっぱり欲しくてもできないという人もいて、そこは今のこの状況では判断できないので、子どもに対する施策というのは待ったなしというのは政府も言っていますし、私は子どもの問題は今後、ちょっとこれだけ抜き出して、さらにトピックとしてコロナをやったように、子育て関係はもう少し調査をしてもいいのかなというのは議論を聞いていても、あとふだん暮らしていてもちょっと思いましたというところです。

以上です。

○吉野英岐部会長　ありがとうございます。
　ティー先生、補足ありますか。

○ティー・キャンヘーン委員　例えば今日配られた資料１―９の２ページ目で、県計が2,942 人ですけれども、その中で調べた数が 2,942 人いないのです。合っていますよね。そこで、つまり子育てしやすいと感じますかというので、「わからない」と回答した人はもう全部抜いて、回答してもらった皆さんで「感じる」から「感じない」という集計となっているのですね。

○吉野英岐部会長　「どちらともいえない」は入っている。

○和川央委員　入っています。

○ティー・キャンヘーン委員　入っている。あれが何点ですか。

○和川央委員　３点です。真ん中です、ニュートラルというか。

○吉野英岐部会長　点数ついているから。

○ティー・キャンヘーン委員　そうそう。３、４、５……

○松舘政策企画課特命課長　部会長、よろしいですか。

○吉野英岐部会長　はい。

○松舘政策企画課特命課長　申し訳ございません、中断させてしまいまして。第１回の資料の参考資料の３番、こちらが県民意識調査の統計表になっておりまして、この２ページ目に問３－１、④子育てがしやすいと感じますかという表がございまして、こちらに統計表があります。こちらの表を見ますと、2,942 人のうち「わからない」という回答が 600 名、それから「不明」が 124 名といった結果になっております。
　以上です。すみません、中断してしまいまして。

○吉野英岐部会長　つまり「わからない」が 600 人もいるということですよね、ここは。

○ティー・キャンヘーン委員　はい。

○吉野英岐部会長　ほかの各問いと比べても、次の子どものための教育のところも 640 だから、子どもに関するところは「わからない」と答えている人が相当数いる、それをまず抜いて集計していると。

それで、この「わからない」はどうしたらいい。

○谷藤邦基委員　話が混乱しているのですよ。

○若菜千穂副部会長　ごめんなさい、「わからない」は抜いているということでいいのですけれども、資料１―９の１ページ目の文章の中の「わからない(身近に子どもがいない)」、この表現がちょっと分かりづらいと。

○谷藤邦基委員　だから、「わからない」というのが２つあるのです。実感の評価としての「わからない」と、あなたがそう評価しているということの理由としての「わからない」。

○吉野英岐部会長　そうですね。

○谷藤邦基委員　両方あるので、だから「わからない」、子どもがいないとか子育てに関わっていないというのが入っていたのではないですか。

○若菜千穂副部会長　理由が分からないと。

○谷藤邦基委員　だから、評価の項目としての「わからない」と、それからそう評価した理由としても項目としても「わからない」と、２つあるはずです。

○吉野英岐部会長　評価はしたのだけれども、そうですね、きっとね。評価はしているから、答える権利はあるのだけれども、その答える中身で理由が浮かばない。

○若菜千穂副部会長　補足調査の……

○吉野英岐部会長　そうそう。14 番目に挙がっているやつです。

○谷藤邦基委員　第１回の参考資料の４の５ページ目を見ていただくと分かると思うのですけれども、だから要は今テクニカルな話ししています、技術的な話ね。子育てについての実感の評価という中に「わからない」のがまずあります、ここで回答した人は集計から外しているということですよね。

そして、改めて要因のほうを見ると、14 番に「わからない」があるのです。だから、「わからない」と出ているけれども、同じものではないので、だからそこちょっとちゃんと区別して議論しないと、わけが分からないことになってしまうので、取りあえずテクニカルな部分だけ。

○吉野英岐部会長　そうですね、実感を感じるかどうかのところで「わからない」（該当しない）という選択肢があるので、そこに丸をつけた人は、次のなぜそういう答えになるのかというところには、書いてあったとしても、集計の対象にしていないということです。

○ティー・キャンヘーン委員　していないのですよ。いいですか。

○松舘政策企画課特命課長　すみません。私もちょっと今混乱していたのですけれども、補足調査のほうで、質問票でまず「わからない」で選択した方はもう集計からは外されています。

○吉野英岐部会長　要因の集計ももしついているとしても、これはもう数えない。

○松舘政策企画課特命課長　そうですね。

○吉野英岐部会長　だから、分からない人にはもう答えがない、答え集計しないようにしている。

○松舘政策企画課特命課長　はい。

○吉野英岐部会長　だから、「わからない」は外れているのですね。でも、感じているか感じていないということを子どもがいたとしてもいないとしても、答える気がある人は答えているから、それでそっちの人が多分次の何でと言われて、14 番目の、いや、実は身近に子どもがいないとか、実は自分自身子どもに関わっていないので、一応評価はしたけれども、なぜそういう評価になったかは分からないというか、そういう答えです。いいですか。

○ティー・キャンヘーン委員　合っていると思います。

○若菜千穂副部会長　ごめんなさい。今日の資料の１―９の、結果から言いますね、今の質問の結果のグラフ、さっきの横棒の、そっちのほうが分かりやすいかな、今日の１―９の７ページの 14 ということですよね。

○吉野英岐部会長　14、14 番目の「わからない」。これ要因……

○若菜千穂副部会長　今の話は、結果はこれですものね。

○吉野英岐部会長　結果というか、実感の評価ができた人で、こっち答えて、これ要因にした人がここに何％と出てきます。
　はい。

○ティー・キャンヘーン委員　例えば子育てについて補足調査で「どちらともいえない」という３番をつけました。つけて、ではあなたは何でこれをつけたかというと、「わからない」、身近に子どもがいなくて、子育てもしていないという理由でしたというような感じで

つけるというイメージです。

○吉野英岐部会長　だから、そこチェックしてみれば、すぐ分かるのですよね。
　子育てについて「どちらともいえない」という人たちが要因として、「わからない」とどんと上げている可能性があるのですよね。

○ティー・キャンヘーン委員　これどこかにあるのではない。違うか。

○吉野英岐部会長　それはでも、調べればすぐ分かる。

○ティー・キャンヘーン委員　ああ、そうか、その要因ごとに。

○吉野英岐部会長　そうそう。クロスすれば、そこに集中していれば、恐らく実感として変わらない、「どちらともいえない」という人は、要するに判断材料がないので、自分自身に、あるいは自分の周りに。取りあえず「どちらともいえない」とつけて、14 番の要因のほうに丸をつけると。でも、そこでもう既に「わからない」、つまり評価できない、判断できないというところにいってしまえば、下はもうないのですよね。該当しないというところに、ゼロ番につけてくれたら下行かないので。一応評価した人だけを対象に要因を聞いている。ただ、その人……

○若菜千穂副部会長　すみません、それで資料の１―９の１ページ目ありますよね、１ページ目で②番の３つ目のポツ、令和４年までに過去２回以上実感が低い要因として推察されたものは「わからない」が一番効いていると……

○吉野英岐部会長　なるほど。

○若菜千穂副部会長　ここの意味がちょっと私が聞いても分からないから、初めてこれを読んだ人はもっと分からないかなと思って、もうちょっと言葉を足してもいいのかなと思った。これ分からないです。

○吉野英岐部会長　これ数字だけ見たら多いからと、前に来るのが、これを挙げている人が。

○若菜千穂副部会長　どこの数字を見たらいいのかな。

○吉野英岐部会長　それは、７ページではないのかな。

○ティー・キャンヘーン委員　これは多分説明してもらったほういいのではないですか。この連続２回はどこから来ているのですか。

○松舘政策企画課特命課長　こちらは、第１回の資料になりまして、資料の７の５ページ目で整理をしている内容なのですけれども。

○吉野英岐部会長　５枚目のね。

○松舘政策企画課特命課長　はい。その２段目が子育ての整理をしている内容ということで、右から２列目が補足調査結果からの推測（過去２回以上要因となったもの）ということで見せておりまして、６枚目のほうですね、それに続いて。一貫して低値で推移している要因（経年）ということでの表がございまして、こちらにＲ２年からＲ４年までの子育てで、子どもはいないといった属性の方々の上位を拾っていくと、こうなっていたということになります。

○吉野英岐部会長　これは、子どもがいないという属性の人だけの。

○松舘政策企画課特命課長　そうですね。こちらは、先ほどの今日の資料の資料１―９の②のところ、一貫して高値または低値で推移している属性のところの話が来ていますので、そういった値ということになっていると。

○吉野英岐部会長　今日の資料１―９の１ページ目の記載は、一貫して高値または低値でいいのだけれども、子どもがいないというグループだけについてというのが見えにくい、その前の３つ、丸ポツの３つ目、令和４年までに過去２回以上実感が低い要因として推測されたものは「わからない」からとなっていることで、これは子どもがいないグループの人たちについてはということで見ないと、これ全体でもこうなのですかと読めてしまう。

○松舘政策企画課特命課長　承知しました。では、そこは追加して。

○吉野英岐部会長　さらに、そこを書くことが重要なのだろうかと、今度は。子どもがいないグループのことを特記して、確かにそこは一貫して低いから、形式上はそこのグループ低いのですよということで要因分析するのだけれども、そこを取り上げるべきなのか、子どもはいるのだけれども、実感が上がらないというグループにむしろ的を絞って、なぜ実感が上がらないかというのも新たに……。
　はい、ティー先生。

○ティー・キャンヘーン委員　今部会長そうおっしゃると、全部取り替えることになりますよ。ここだけこういうふうに特別にしてこう書いて、ほかのところの書きぶりと全く違ってくるので、それで大丈夫ですか。

○吉野英岐部会長　いや、だからそうしたら前段でここは子どもがいない属性の人たちと入れておかないと……

○ティー・キャンペーン委員　まあ、それはそうですけれども、後半でほかの書きぶりを変えるというふうにおっしゃっていたので。

○吉野英岐部会長　それは、子どもがいるといないというのは、人の属性なのだけれども、それが直接ここ聞いてしまうわけですよね、子育てと、分野としては。

例えば自然が豊かであるとか、例えば心身健康であるというのは、子どもがいるいないということが直接効くというよりも、それは効く可能性はあるけれども、まさに直接ではないですよね。ただ、子育ての実感とか子育ての教育環境というのは、ある意味子育て中の人、これから子育てする人、子育てが既に終わった方というところで実はかなりもう状況が、意識をする状況が違うのではないかなという意味で、書くのはこれでいいから、要するに読み手に、これ全般的なこと言っているのではなくて、ここは一貫して低いのは子どもがいないというグループの実感でしたということ、もう書いてあるのだけれどもね、確かに。書いてあるのだけれども、そこを読み飛ばすと、全体的にそうなのですかと見られてしまうのかなというので、これがトップに来ると、ああ、「わからない」がトップなのだと。うーんというふうに読めるということ……。

はい。

○山田佳奈委員　全体のレポートの作り方にもちょっと関わってくるところかなと思うので、この機会に申し上げます。だんだんデータが増えてきて、いま結構難しいことになってきているということはあるので、今回これ御苦労くださっていると思います。それで整理の仕方、書き方として本文全体に通じるのですけれども、ディレクトリが分かるような書き方というのでしょうか、全部変更になると、どうしても今みたいなちょっと混乱が起こってしまうという気がするので、例えば今の子育てのところでいくと、県の補足、１番上のポツはあくまでも一貫して高値、低値の話をしていて、「そのうちの」ということでディレクトリが１つ下がるといいますか、これを細かく見ていくと、あるいは「その次の段階」というように、分けた方が分かりやすくなるのではないかというのが１つありました。実際に行を下げるかどうかはともあれ、ですが。これは、この子育て以外のところも含めてです。

それと、全体とのバランスということでいくと、確かに内容によっては少し変わらざるを得ないのかなというふうには個人的には思っていて、表記の仕方といいますか、整理の仕方は多少変わっても、ちょっとやむを得ないかなという気がしています。今部会長がおっしゃったように、言わば一時的には、データ的には子どもがいないという属性の場合が低値で、これは１つ整理としてあり得るとしても、では一方で子どもがいる回答者の場合はということで、そこは内容によって少し変えてもいいのではないかなと思っています。全部やると、それはちょっと大変なことになると思いますけれども。

○ティー・キャンペーン委員　そこなのですよ、何でここだけやるのということなのです。

○山田佳奈委員　そこが今おっしゃったように、子どもさんがいる方と現時点でいない方で実感の内容というのが、ここはちょっと違ってくるのではないかなと、これは私も思い

ます。
　ただ、やっぱりそれなりの理由づけがないと、何でここだけやるのだということにはなってしまうので、その説明は入れる必要はあるかなとは思うのですけれども、確かに先ほどおっしゃったように、分析として何を、というのは出してもいいのではないかなと思っています。
　特に今回は補足調査としてワンクール、つまり５年終わった時点ということを意識しなくていいのかなというのも少々ありまして。これはちょっと別な理由になりますけれども、これまでの作り方と少し変わることはあるかもしれないとも思いました。

○吉野英岐部会長　はい。

○若菜千穂副部会長　何かすみません、混乱させてしまってあれなのですけれども、山田委員の言っていただいたことに私も同意で、これ選択肢で分野別実感、補足調査の方の「わからない」というのは、外す意味も込めてこの選択肢つくらなかったかなというのがあるのです。ほかの例えば子育て、つながりとか所得とか見ても、「わからない」という選択肢はないですよね。ただ家族は家族いないという選択肢があるのですけれども、今回はこう書いたとしても、もし調査表から見直す可能性があるのであれば、県民調査のほうは「わからない」というのは外していて、分野別実感は「わからない」というのを外す意図で選択肢を入れたのだけれども、分析に入れてしまっていないかという気はします。なので、今後ということで御検討いただく場所かなとちょっと思いました。
　すみません、以上です。

○吉野英岐部会長　分かりました。そうですね、そもそも分析から外しているグループの人たちが、上で評価できないというところに丸をつけた人たちだと。その評価できない理由というのは特に聞いていないけれども、恐らく当事者ではない、当事者ではなかった、まだ当事者にはなっていないというような可能性が高くて、その人たちはあれだけれども、どちらでもないと答える可能性はあるし、その人が今度また下に下りてくると、いや、実は身近なところに子どもがいないので、現に子ども持っていないという答えで、それが一番多くなるとなると、確かにロジックとしてそこを入れているのか入れていないのかという話になるかなと。
　はい。

○和川央委員　今の要因の「わからない」についてですけれども、記憶が定かでないので、厳密には議事録とかを見なければならないのですけれども、各設問に例えば興味がないとか、そもそも自分は該当しないのだけれども、実感を答えた人を何らかの形で把握しなければいけないよねということで、各設問にそれらの人を補足できる選択肢を入れた記憶があります。
　では、ここ入ったときにどういう意味があるのだろうかなというところで、分析から外すという選択肢は１つあると思うので、私はその選択肢は否定はしないのですけれども、ネガティブに答えているのだけれども、それは明確な理由があってネガティブに答えてい

るのではなくて、印象で答えているのだということが分かることも非常に十分意味のある結果かなとは思います。ですので、分析から外すかどうかとは別ですが、この選択肢自体の意味はそれなりにあるのかなとは思っています。

○吉野英岐部会長　ありがとうございました。

ちょっと書き方ですね、今回はこの枠組みでやりますので、読んでいる人がこれは何の人たちのことを話しているのかを明示しておくことで、誤解のないようにということが１つです。

もう一つは……

谷藤委員さん、どうぞ。

○谷藤邦基委員　ちょっと結論に行く前に確認させてもらいたいのですけれども、今日は１―９ということで出ている子育ての実感ですけれども、仮に報告書にまとめるとしたら、どういう章立てに入るのかなというあたりは何かイメージありますか。要は、実感が低下した分野をまず分析すると、それから上昇した分野を分析すると、これどっちでもないわけですよね。であれば、別枠にしてしまうということは可能かもしれない、報告書の分析として。

○ティー・キャンヘーン委員　横ばいの分野も何か分析結果として載っているので。

○谷藤邦基委員　でも、全部やっているわけではないでしょう。

○松舘政策企画課特命課長　昨年までのレポートでは、実感が上昇した分野、低下した分野、横ばいの分野ということで全部記載しておりましたので、今回のところについても横ばいの分野に入れようかなと考えておりました。

○谷藤邦基委員　なるほど。では、そういう手は使えないか。

○吉野英岐部会長　いや、でもかなり詳しくやっているわけですよね、今回はここの分野については。だから、ほかの横ばいの分野とはちょっとページが違うぐらいになってしまいますよね、このペースでやると。

というのは、ではどうして横ばいの分野がいっぱいある中で子育ての分野、子育ての実感について少し突っ込んだ分析をかけているのかということは、何か……。

○谷藤邦基委員　いや、言いたいことはいっぱいあるのです。というか、そもそも論になってしまうので、後でまとめて言おうかなと思ったけれども、ちょっと今言わせていただくと、要は分析手順というのを最初に決めたではないですか。

○吉野英岐部会長　はい。

○谷藤邦基委員　県民意識調査の結果をまず出しますと、その変動要因については補足調査からの推測でやりますと。スタート時点ではそれでいいのだろうと思っていたし、その一定の手順に従ってやると、こういう書き方になる、そこまではもうしようがないと思っているのです。だから、報告書というのはそんなものだ、で割り切ってしまうか、あるいはもうちょっと内実に踏み込んで意味のある結果を出そうとするのかというあたりなのだと思うのです。

ただ、そうなったときに、そもそも方法論として、補足調査から理由分析するというやり方で本当にいいのかという疑問がどうもちらほら出てき始めているのではないかなと思っているのです。例えばですけれども、余暇の充実という、今日の資料の１―１にありますけれども、県民意識調査の実感の平均値と補足調査の平均値の乖離がかなり大きくなっているのです、実感の数値の乖離が。例えば資料１―１の７ページに、これは補足調査の方ですね、補足調査の方の実感の平均値、県計として出ている数値見ると、これは補足調査の数値なのですが、県民意識調査の方で見ると、平成 31 年の基準年は補足調査 3.10 に対して県民意識調査3.05でそんなに乖離ないのですけれども、今回県民意識調査が2.93なのです、令和５年。ところが、補足調査のほうは 3.41 になっているのです。こんなに差があるのに、理由づけにこの調査使えるのかなという素朴な疑問、私としては持っているのです。

だから、これ今の余暇のところで取り上げましたけれども、ほかも大体そんなものです。補足調査のほうが全般に高いです。その差がちょっと大きくなってきている印象があって、だからそもそもの方法論からの見直しが必要なところに来ているのではないかなと思っているのです。だから、そもそも論になってしまうというのはそういう意味です、方法論からの見直し。

ただ、今それやるわけにいかないので、来年度に向けての課題になってくると思うのですけれども。だから、ちょっとそこがこれから考えていかなければいけないかと。この報告書は従来どおりまとめるとして、来年度に向けてどうするかというのは、ちょっと一回きっちりやらなければいけないのではないかな。願わくばそれをやるのは、若い人たちにやっていただきたいと、メンバー替えて。メンバー替えてということの意味は、ティー委員や和川委員みたいに最近委員になられた方はともかくとして、ほかのコアなメンバーというのはかなり前からやっているので、多分発想がもう固定化されている。だから、そこを新しい観点で、かつ若い人たちの感性でやっていただくほうがいいのではないかな。ちょっとこの辺は今日の話題から外れてしまうので、ここでやめますけれども、いずれそういう問題は相当出てきているように思うのです。だから、今までパッチ当てて何とかやってきたけれども、もう限界来たのではないかなという感じです、私の感じとしては。

○吉野英岐部会長　それでは、小野部長、どうぞ。

○小野政策企画部長　２点ありまして、初めに先ほど吉野先生がおっしゃっていた今回子育てについて、特に注目してやっている理由といったことでございますけれども、基準年と比べてそんなに変化があるわけではないのですけれども、一方でこれはまさに政策の話になりますけれども、今年度から始まる第２期のアクションプラン、これについては人口

減少対策、これを集中的に行うといったことで取組をまさにスタートさせたところです。県とすると、人口減社会も含んではいるのですけれども、特に出生数ですね、ここのところがこれからどうなっていくのか、その背景にどういう様々な実感が伴っているのかということを継続的に見ていくことが重要と考えておりまして、必ずしも子育てだけなのかといったお話あるかもしれませんけれども、直接的に影響するこの子育て分野については、今回補足の追加資料も出てきたような形でしっかり見ていくことができればと考えております。

どういうふうに動いていくのか、あるいは動かないのか、先ほどもありましたそもそも子どもはいないという形で回答されている人たちにどのような意味があるのかといったところも含めて御意見を頂戴できればいいのかな、100％の答えはないと思うのですけれども、推計できるといったところも含めて。

あとそれから、谷藤委員からお話があった補足調査の限界といったことはおっしゃるとおりで、これは当初始めたときから当然イコールにはならないだろうといったところで、その差が開いてきているといったことも確かにあると思います。一方で、ポジティブに押さえている方々、あるいはネガティブな考え方をしている人たちの背景を、その理由をつかむことはできないかといったことで、限界は生じつつも、始めたのが今回のパネル調査、しかもこれは時系列で見ていくことができるといったことで出てきたのかなというふうに思っておりまして、まだ全体としての差は開いているのですけれども、例えばネガティブに考えている方々の理由といったものが何かということを部会として考える上での参考にはなるのかなというふうには思っております。ただ、100％ではないといったのもそのとおりでございまして、新たな手があるのかどうか、これはいろいろ様々な研究が進められている中で手があるのであれば、これはやってみる価値はあるのかなというふうに思っております。

○吉野英岐部会長　ありがとうございました。

ティー委員から。はい。

○ティー・キャンヘーン委員　すみません。最近起こっていることなのですけれども、男女平等、女性の社会進出、何かめちゃくちゃ押しつけていますよね。押しつけておきながら、生めと。すごいストレスを受けているのに、それで何となくあまり女性としては十分社会のストレスを感じながら、それ以上でも私たちが悪いのかという、ちょっと最近そうどんどん思うようになって、どんどん何かおかしい話になってきていて、もう一つは、あと何となく生理的に生みにくい体になってきている。結構不妊治療多いなと思っていて、それも関係しているのではないかなとちょっと最近思うようになって、だから生まないというか、生めないということで話もあるのではないかなというちょっと思いました。

○吉野英岐部会長　何か要因ね、ここに書いていない要因かもしれないと。

○ティー・キャンヘーン委員　いや、無理でしょう。何か社会進出にしろしろと。

○吉野英岐部会長　谷藤委員、さっき途中でしたけれども。

○谷藤邦基委員　いや、そろそろこの話収束させようと思っているので。いずれ補足調査の件に関しては、改めて検討の場を設けていただくというか、補足調査の使い方ですね。補足調査自体、私ずっと時系列で同じ手法、手段から取れるという意味では、母集団というか、サンプルからデータが取れるという意味では非常に意味があると思っているのです。

ただ、それを理由づけに使えるかどうかというあたりへの疑問を今言っているだけで、だからそこをどうするかというのは別途かなり時間かけて検討しなければいけないのかなとは思っています。

差し当たって、今ここの扱いをどうするかということについての私なりの提案ですが、例えば前回の報告書を見ると、実感が横ばいの分野というのはかなりあっさりしか書いていないので、だから子育てのところもあっさり書いて済ませて、改めて深掘りするか、ないしはそもそもここに載っけないで、深掘りした内容を書くか、いずれこなし方としては並列で並べて書くわけにはいかない、逆にこれだけ詳しく書こうと思うと今まで書いてきた横ばいの分野の書き方とはかなり違ってしまうので。だから、いずれにしてもそこ、基本は別枠にする、そういう中で横ばいの分野の中に項目としてあっさり書いておくか書かないかぐらいの判断でいいのではないかなと思うのです。

○吉野英岐部会長　何かございますか。

では、先に。

○山田佳奈委員　すみません。私は、先ほど若菜委員がおっしゃっていたことと近い印象を持っています。すみません、１つだけちょっともう一回だけ確認させてください。資料１―９の２ページ目の分野別実感のこの県計の表というのは、これは総計が 2,492 ですので、第１回資料の先ほど松舘さんにお話しいただきました参考資料３の下の問３―１の方と同じと考えてよろしいのですかね、内容的には。

「わからない」が 600 いらっしゃるのですが、これ入っての 2,492……

○吉野英岐部会長　いや、「わからない」は点がついていないから、計算していない。

○松舘政策企画課特命課長　そうですね、こちらの資料１―９の２ページの属性の数ということですか。

○山田佳奈委員　ええ、そうです。

○松舘政策企画課特命課長　ここは、あくまでも県民意識調査全体として回答があった方の数がここに書いてあるということで。

○吉野英岐部会長　例えば「わからない」がゼロだったら、ゼロで入れてはいないですよね。ゼロで入れたら、だって一番悪いという意味になってしまうから、入れるはずはない

よね。

○松舘政策企画課特命課長　はい。

○吉野英岐部会長　だから、ほかも多分全てそうで、「わからない」というゼロで、選択肢ゼロ番というところを回答してしまうと、数値の出しようがない。分かりますか、ただ600引いています。

○山田佳奈委員　そうすると、この点数というのは、分母は2,492ではなくて2,342が分母になるということ。

○吉野英岐部会長　「不明」も抜いているか。

○和川央委員　そうです、「不明」も抜いているので、もうちょっと小さくなりますが、そのとおりです。

○山田佳奈委員　なるほど。そうすると、「わからない」、「不明」の方は、該当しないという、項目としては該当しないという方でやっているので、要は2,200人くらいの方のということで……。だから、一回ここで今回の資料１―９で出ているこの数字というのは少なくても「わからない」と回答している方の分はもう既に除かれたものとして……

○吉野英岐部会長　全ての分野でそうなっているはずですね。

○山田佳奈委員　なるほどですね。

○吉野英岐部会長　はい。つまりゼロだから、はじかないと物すごく下がってしまうのです。

○山田佳奈委員　そうすると、もう既にここで該当しないという方は、ここでは入っていらっしゃらない可能性が高いと、つまり子育て終わった方ですとか、子どもさんがいらっしゃらない方ということで、そんな感じ……

○松舘政策企画課特命課長　選択肢として、県民意識調査で「わからない」あるいは何も選択しなかった方については、この平均点のほうには反映されていないということになります。

○山田佳奈委員　分かりました。分母が違うということで……

○吉野英岐部会長　分母が下がっているのです。

○山田佳奈委員　分かりました、それで。すみません。了解しました。

○吉野英岐部会長　「わからない」を３と入れるわけにもいかなかったからということですよね。ゼロと入れるわけにもいかないしね。

○山田佳奈委員　ありがとうございます。分母が違うということが分かれば、こちらのほうにやっぱり 2,492 と出ているので、「わからない」方もやっぱり含んでいるように確かに見えてしまうかなという感じはしましたので。

○ティー・キャンヘーン委員　標本サイズの書き方はちょっと変でしたね。

○和川央委員　そうですね。

○吉野英岐部会長　では、それはちょっとこれも誤解のないように。
　和川委員もあるんだっけ、何かいいですか。言い出しっぺにやってもらわなくなってきたから。
　どうぞ。

○和川央委員　この報告書をどうまとめるかというところにつきましては、私としてはやはり報告書のスタイルは常に一貫しておいたほうがいいのかなと思っています。従いまして、ここについては報告書としては通常の横ばいの表記でいいのではないかなと思います。
　ただ、こういった深掘りするというのはすごく意義のあることだと思うので、別立てで、言い方を変えると、毎年の報告書の内容が次第にルーチン化してきたので、毎回深掘りするところを決めながら、別立ての章がどんどんできたりできなかったりという形で議論が進むのはいいのではないかなと思っています。従いまして、これまでの報告書のスタイルを継続して別立て扱いとし、もしも時間が許すのであれば、深掘りをするというのがよろしいかなと考えています。

○吉野英岐部会長　報告書の中でもこれまでもコロナについては特別に、あれは補足資料という名前にしていたのでしたっけ。

○松舘政策企画課特命課長　追加分析としています。

○吉野英岐部会長　追加分析か。追加分析というのは実際やっているのですよね、イレギュラーだったけれども。ですので、それはコロナというのは全般にかかってしまうからやったわけですけれども、今の小野部長おっしゃったとおり、政策的なそういうステージに今来ているということと、非常に重点的な政策でデータを持っているのがここだということを責任もあって考えると、ある意味では現在県政の大きな課題であり、県民の非常に関心の高い分野については数値が横ばいであったとしても、そこは深掘りをするということは、そんなに違和感がないのかなと言っていましたし、一番分かりやすいのは諮問で……

例えば審議会なんかも諮問でやっているから、知事からそういう諮問が出たら、それはそのとおりやりますよということにはなるので、今のところ思いつきではなくて、この委員会設置の根拠というか、そこで書かれていれば、まず間違いなくやる必要があるということになるかなと思いますので、特に附属条例になって、全て何か諮問によってと何か書いてあるのですよね、委員会の立てつけが。もともと審議会の諮問によってつくるという立てつけになっているから、県からこのようなお題が出ているということで言えば、その発注者のほうからお題が出ている以上は、それは受注者の我々は当然やるし、それは別に消極的な意味ではなくて、やはりやる必然性が高いということで合意していただければ、別立てというか、追加分析という名前にするか、あるいはトピックなんていうかわかりませんけれども、そこは入れておいても、むしろ読んでいただく人が増えるのであれば、やってもいいかなと思っています。

若菜さんは何かないですか。

○若菜千穂副部会長　いや、大丈夫です。その方向性で、皆さんが言っていることもっともだと思います。

○吉野英岐部会長　では、構成についてはまだちゃんとした議論を進めていませんでしたけれども、今回ちょっと後先になりましたけれども、子育ての分野について、横ばいではあるけれども、今日のようにちょっと時間を割いて議論をしたところについては、やはり結果をきちんと報告書の後ろのほうに、前でもいいけれども、後ろのほうに一応入れるという方法で構成をまた事務局で考えていただいて、全体の大幅な変更というよりは特出し的な意味でやっていくということにしてよろしいですかね。

もちろんその中でも分析の課題点は残っていて、今言った子どもさんがいないというか分からないけれども、結局「わからない」というところは外しているということや、ほかの項目とちょっと違うというか、当事者になるということが非常に高い、あるいはならないということとか、非常に効くところでもあるかもしれないということですね。それも入れていきたいと思いますし、もし県のほうであれば、何かいろんな施策は打っていますよということがむしろ私は施策を打っているにもかかわらず、例えば出生率の向上や、あるいは人口の減少というのがなかなか歯止めがかからない、何も手を打っていないというわけでは私はないと思っています。

ただし、それが効果的に県民に届いていないのであれば、それはやはりやり方を工夫しなければいけないし、それを裏づけるデータがないと、県もやりにくいと思いますので、そこはきちんと分析をして、やはりなぜ届かないのかというようなスタンスでも私はいいかなと思っています。

家族はあんなに高いのに、家族の実感、すごく高いのですよ、この県は。でも、子育ての実感が 3. ちょっとぐらいしかないというのは、何でなのだろうという気もしないでもないです。

あとは部長、どうぞ。

○小野政策企画部長　先ほどお話しいたしましたように、第２期アクションプランで今年

度から少なくても４年間、結婚から出産、子育てに至るまで様々な取組を進めていくということで、これは今年の１月、２月調査ですので、取組を強める前、ある程度はもちろんやっているわけですから、ですので我々とすると、ここから来年以降どうなっていくのかなと、４年たった後も何も変わっていなかったというと、かなりこれは県のほうの責任が重大になってくるということなので、分析部会にはぜひちょっとここを、どうなっていくのだろうというところを厳しく見ていただければと思いますので、よろしくお願いいたします。

○吉野英岐部会長　そうですね、合計特殊出生率ばかり見ているから、数字だけで見てしまうけれども、やっぱり中身はどうなっているかということは、こういった意見の中から見えてくるかなと、ぜひそこは持っていければいいかなと思っています。

今日出していただいた資料は、この後また報告書の形でまとめ方を考えなければいけないのですけれども、属性によって要因もちょっと違いそうだしということと、書き方としてわからない、身近に子どもがいない、子育てに関わっていないというのがトップに来ると、ちょっと全体の伝わり方が弱いというか、ちょっとそこがうまく伝わらないのではないかということもあるので、ちょっと書き方を工夫していこうと。

ただ、こう通常の方のバージョンで載っける部分は多分残ると思うので、通常で横ばいの分野の一つとしてはもちろん残して、そこは要点だけ書いておくということにして、後ろの追加分析で少しちょっといろいろやってみましたと、ターゲット絞って見てみましたとかも含めて、これからちょっともう一つ工夫していきたいと思っています。

そうしていると、もう時間がどんどんたってきて、あとはまた資料１―１に戻りまして、まずこれまでどおり低下している分野について一回皆さんに審議していただきましたので、それをいろいろ踏まえて、事務局の方で再整理したものについて、この形でよろしいか、あるいは追加資料がこれですということもあると思いますので、まず余暇の充実のほうに移っていきたいと思います。

では、説明お願いします。

○松舘政策企画課特命課長　それでは、資料１―１、低下の分野の１つ目、余暇の充実となります。

１ページ目と２ページ目、こちらが例年の年次レポートの形式で整理したものとなります。①分野別実感の概況、アの分野別実感の推移といたしまして、実感平均値は 2.93 点、基準年調査より 0.11 点低下していること、それからイの属性別の状況ということで、こちらは第１回の資料６でお示ししました一元配置分散分析の結果を記載しているものとなります。

そして、中ほど、表１といたしまして、有意な変化があった属性を整理しております。

②分野別実感が低下した要因といたしまして、黒いポツで５つ記載しております。１点目には年代別、70 代以上と職業別 60 歳以上で低下幅が大きいこと、２点目ですけれども、後ほど追加の資料を御準備しておりますが、これらの属性ではほかの属性に比べて自由な時間が確保されている状況にあること、３点目には補足調査による分野別実感の回答理由と関連が強い要因で選択された上位３位の項目、それから４点目には実感が上昇した方と

低下した方の回答理由と関連が強い要因を比較した場合に運動や行動の制限の有無で差があったことを記載しております。５点目に、以上を踏まえまして要因として推測される上位３つの項目と、１つ前のポツで記載しておりました運動や行動の制限の有無を加えた計４項目を記載しております。そして、この４項目目の運動や行動の制限の有無について、こちらで要因として記載するか、あるいは別のポツを立てて、要因に何か影響があったものだと書くのか、御意見を伺えればと思っております。

また、ゴシック体で書いている部分で、それぞれの要因の後、括弧の中の記載は、補足調査における自由記載欄から関係のあるものを転記しております。こちら、この後の各分野にも共通する部分になるのですけれども、去年まで調査項目にはなかった部分ですので、レポートには記載していないものであったのですけれども、今年度からこういった形で記載に加えるか、あるいは昨年度までと同様に記載しないかということで、委員の皆様から御意見を伺えればと思っております。

それから、広域振興圏別に見ますと、沿岸広域振興圏の低下幅が少し大きいですので、そういったことについても１つ黒ポツを起こして記載する必要があるかどうか、御意見を伺えればと思っております。

続いて、③一貫して高値または低値で推移している属性とその要因ということで、表２のところで複数属性がありますので、その内容を整理しているものとなります。

すみません。またここでちょっと修正があったのですけれども、③の３つ目のポツで、「これらの属性のうち年代別「50～59 歳」を除く８属性」と記載しているのですけれども、「７属性」となります。申し訳ございませんが、修正をお願いいたします。

それから、資料の３ページ目と４ページ目、こちら前回までに委員の皆様からいただいた御意見を一覧としているものです。

続いて、５ページから６ページです。県民意識調査の生活実感調査結果について、70 歳以上の年齢層を無職と、あとは仕事をされている方と分けて集計したものになります。そうしますと、70 歳以上の無職の方については仕事をされている方に比べて、余暇時間と思われる時間が 500 分台ということで、仕事をされている方の 300 分台後半から 400 分台前半に比べて多くなっておりまして、自由な時間がある程度確保されている状況ではないかと推測されます。

７ページは、補足調査の実感の推移です。子育てでも御説明しましたが、補足調査では属性として可処分所得がございます。

続いて、８ページ、こちらは、補足調査の平成 31 年から令和５年の実感の変動の分布で、第２回でお示しした資料と同じ資料です。

９ページ目、補足調査の分野別実感の回答理由の毎年の上位３位をまとめたものです。上段は、平成 31 年を基準とした実感の変化別、下段は単年での単純集計となります。

この７ページから９ページ目までの３種類の資料については、この後の各分野にも共通して添付しております。

以上がこちらで御準備した資料となります。よろしく御審議をお願いいたします。

○吉野英岐部会長　ありがとうございます。

これもほぼレポートのイメージということでよろしいですか、割り付けなんかも。

○松舘政策企画課特命課長　はい。

○吉野英岐部会長　ほぼ完成形の第１稿みたいな形で示していただきました。表現、内容、構成について御質問、御意見いただければと思います。
　では、山田委員。

○山田佳奈委員　ありがとうございます。先ほどお話しいただきました今回どうするかという要因の具体的な内容のところなのですけれども、今回ので２ページ目に当たりましょうか、上から２つ目の「以上を踏まえ」のところに今回入れていただいているということですよね。

○松舘政策企画課特命課長　そうです。

○山田佳奈委員　ありがとうございます。ここですが、まず基本的には何らか入れたほうがいいのではないかというのが一つの意見ですし、あと皆さんが書いてくださったものだということが分かるように、例えばですけれども、ちょっと表といいましょうか、ちょっと表的に並べて、例えば左側に主たる例えば自由な時間が十分に確保できなかったこととして、それで右の方に例えば今回書いていただいた具体的な内容からということで、こうこうこういう要因というように、ちょっと２つに分けて、ここ多分ハイライトの部分ではないかなと思いますので、そう分けると見やすくなるかなと思った次第です。
　それが１つと、あと非常に細かい点で恐縮ですけれども、１ページ目の方、ここは文言だけです、これからにも関係するかもしれないので、一応申し上げますと、②の分野別実感が低下した要因の２つ目のポツの２行目に「他の属性に比べて、自由な時間が確保されている状況」、これ多分「余暇時間が確保されている状況」ですかね、統一していただいたほうがいいかなと思いました。
　まずは以上です。

○吉野英岐部会長　文言の修正も含めて御意見いただきましたけれども、事務局のほうに伝わっていますか、今の山田先生の御指摘内容。

○松舘政策企画課特命課長　一つが補足調査の自由記載欄のところは表として、要因とその具体的な内容という形で表で整理をするというのが１点でしょうか。

○山田佳奈委員　はい。

○松舘政策企画課特命課長　それからあと、２点目が「自由な時間」というところを「余暇時間」というふうに変えたほうがいいのではないかといって、こちらだったのですけれども、補足調査の方の選択肢として「自由な時間の確保」というような選択肢になっておったので、「自由な時間」と記載しておるのですが、「余暇時間」ということでもよろしい

でしょうか。

○山田佳奈委員　こちら２つ目のポツのほうは、「県民意識調査の生活行動時間の結果を見てみると」という、これ……

○松舘政策企画課特命課長　そうですね、県民意識調査の方では「余暇」という形の表現、「余暇時間」という形になっておりますので。

○ティー・キャンヘーン委員　県民意識調査というのは、余暇で調べていないんだっけ。引き算をしているの。

○松舘政策企画課特命課長　引き算ですね、はい。

○ティー・キャンヘーン委員　引き算なので、それはイコール余暇時間というのはならないですよね。参考となっている。

○山田佳奈委員　参考ということになっているので、すみません、前もここは私しつこく申し上げたので、もう言うのはやめようかなと思ったのですけれども、厳密に言えば、１次活動、２次活動、３次活動、１から３まで活動を引いた時間……ではないか、ごめんなさい、１から２です、１と２の活動を引いた時間としてはということで、すみません、60 歳以上の無職……

○ティー・キャンヘーン委員　というのもおかしいよね。

○吉野英岐部会長　はい、どうぞ。

○ティー・キャンヘーン委員　この２番目の表現は、５ページと６ページを見てもよろしいですかね。

○松舘政策企画課特命課長　はい。

○ティー・キャンヘーン委員　そこが 70 歳以上と書いてあって、でも１ページ目の２つ目のポツというのは「「60 歳以上の無職」について」と書いてあるのですけれども、どっちが正しいのですか。

○松舘政策企画課特命課長　すみません。５ページ目と６ページ目については、70 歳以上無職、それから６ページが 70 歳以上のお仕事している方になります。属性別で見た場合に、60 歳以上の無職の方は低下が大きいということで、そこも属性を持ってきて 60 歳以上の無職とここは書いていたのですけれども。

○ティー・キャンヘーン委員　この１ページ目の２つ目のポツのここに書いている内容というのは、５ページ、６ページは関係ないと考えていいですか。

○松舘政策企画課特命課長　５ページ、６ページ目の方で見て、70 歳以上無職のほうが余暇時間が多いというところから持ってきて、こちらに載せているという形になりますので、正確に書くと 70 歳以上無職と書いたほうがよろしいですか、そうしますと。

○ティー・キャンヘーン委員　何かちょっと違う話になっているので。
60 歳以上、どっちをメインにして書くかという話にもなるのですけれども。

○山田佳奈委員　そうですね。どちらか、あるいは 70 歳以上でくくって、この 70 歳以上という属性と 60 歳以上の無職という属性をそれぞれと、こちらの例えば５ページ、６ページのように、それでシンプルにいってもいいのかなとは、あるという意味では、文章ですね。とは思いましたが、ここに何か分析の内容があれば、また別だと思いますが。

○松舘政策企画課特命課長　すみません、こちらの書きぶりが悪くて。表１のところで、年代別でいうと 70 歳以上のところ、それから職業でいうと 60 歳以上の無職のところ、こちらが低下幅が大きかったということで、前回の議論で、そして補足調査の結果を全体で見た場合には、自由な時間の確保というところが全体では一番上に来るというところで、ただそうすると、ぐっと下がったところの属性については自由な時間の確保というのは少し合わないのではないかといった御議論をいただいておりましたので、改めて 70 歳以上のところについて仕事をしている方、していない方について県民意識調査の結果を集計したというのが５ページ、６ページということになります。
そうした場合に、そうしますとここ２つ目のポツなのですけれども、60 歳以上の無職と書くよりも、きちんと県民意識調査の集計し直した 70 歳以上の無職と書いたほうがいいのかなとも思うのですが。

○ティー・キャンヘーン委員　60 歳以上の無職の中で、70 歳以上の無職がどのぐらい含まれるか、もうほぼ 70 歳以上の無職であれば、そういうふうに 60 歳以上の無職のうちほぼ 70 歳以上の無職が多いと、もしそれが事実であれば、そのまま５ページ、６ページは使えると思うのですけれども、それは言えるのですか。

○吉野英岐部会長　和川委員、どうぞ。

○和川央委員　シンプルに 60 歳以上の無職、もしもやるのであれば、70 歳以上を２つ計算してみて、余暇時間が減っているのか上がっているのかだけを見れば、この問題は解決するかなと思います。多分今すぐ出せるのではないかなと思うのですが、厳しいですか。

○千葉調査統計課主任主査　厳しいです。

○和川央委員　そうですか。

○吉野英岐部会長　すぐは出ないけれども、技術的にはできる。別々に表を作ればいいのですよね。70 歳以上という年齢カテゴリーと、あとは 60 歳以上無職という年齢職業ミックスカテゴリーのそれぞれの表、だから４表作るということになるのかな。

これ合わせ技で 70 歳以上無職、有職でやってみたのですよね。でも、確かに記載のほうのカテゴリーで、特に低下というのは、70 歳以上という年齢のところと 60 歳以上の無職という職業のところで、一応それぞれ別々にはなっているので、別々に表を作っておいた方がつながりやすいという意見ではないですか。

○和川央委員　技術的に難しいですか。

○千葉調査統計課主任主査　できるはできるのですけれども、時間がちょっとかかるかなと。70 歳以上の無職は、前回の部会、去年のときも作成していたので、それを利用して結構すぐ出せたのですけれども、60 歳の同じくくりの集計はしていなかったので、ちょっとお時間が……

○吉野英岐部会長　ああ、そうか。H31 からやらなければいけないということになる。

○千葉調査統計課主任主査　そうなります。

○吉野英岐部会長　５年分やらなければいけない。新しい数字出さなければいけない。

○千葉調査統計課主任主査　はい。

○吉野英岐部会長　でも、出せるは出せますね。手間はかかるけれども。

○千葉調査統計課主任主査　そうですね。

○吉野英岐部会長　それで同じ結論になるかどうか。

どうぞ。

○ティー・キャンヘーン委員　すみません。唐突に５ページ、６ページは出ているので、記述なのですけれども、どこを見てこういうふうに判断したかというのは、表番号でも図番号でもいいのですけれども、ここを見ているのですよというのはした方が、唐突的にこういう５、６は何で出るのかなと、ちょっと多分一瞬思ってしまうので、そこを追加的に、この１ページ目で低下した要因の中でここを見ています、ここを見て話をしていますというのを入れてもらえれば助かります。

○吉野英岐部会長　つながりね。どこからこういうグラフが出てくるのかということです

ね。では、ちょっとそこは書き方の問題で、最後の５ページ、６ページの表は、もし作り直すと若干の数字の変更は出てくるかもしれないけれども。

○松舘政策企画課特命課長　では、次回の部会でレポートの素案を提出することになると思いますので、作業をして、引き続きデータを確認したいと思います。

○吉野英岐部会長　この主な意見というのは、このまま載せてよかったのでしたっけ、３ページ。

○松舘政策企画課特命課長　３ページのところは、こちらはまた御相談かなとは思っておったのですけれども、昨年のレポートの方にはある程度こういった生の御発言を載せている形ではあったのですけれども、内部でも議論しておりますが、少し箇条書的に整理して載せた方がいいのかなという話はしておりました。

○吉野英岐部会長　委員の皆さん責任持って発言しているから、大丈夫だと思いますけれども。
　はい、どうぞ。

○谷藤邦基委員　昨日もちょっと松舘さんとその件もお話ししたのですが、議事録ですと文脈分かるから、何でこの発言が出てきたのかなと分かるのですけれども、そこだけ取り出されると、私自身ここだけ見ると、あれ、何でこれしゃべったのということがあるのです。だから、多分何の予備知識もなしにこれだけ見ると、何しゃべっているのだ、この人となりかねない。だから、そういう文脈とか前後関係分からないという前提で、要点だけ抜き出していただくという方が多分誤解が少ないです。それがその意見に関するお話と。
　あともう一点、今話題になっていたことについてなのですけれども、結局そこ問題になったのは、多分去年私がいろいろ分析結果見ていて、60 歳以上の無職の人たちが自由な時間の確保に難儀していると、ちょっと直感的に理解できないというかおかしいのではないのという話をしたので､余暇時間の数値を出してもらったような経緯だったと思うのです。
　だから、ここはあまりこだわらなくてもいいのであれば、ばさっと削ってもいいというのはあり得るけれども、でもせっかくやってくださるようなので、やってみてください。結果を見て、どう書くかは考えたらいいのかな。というか、できればやりたくない、本音では。ということであれば、例えば、要は両端だけ見ているわけだから、平成 31 年と令和５年だけやってもらうでもいいとは思うのです。

○吉野英岐部会長　なるほどね、基準年。

○谷藤邦基委員　ええ。興味という観点からいうと、どう推移したのかなとは思うけれども、でも手間も考えればこの報告書に書くだけのためにやるのであれば、両端だけやっていただくでいいと思う。

○吉野英岐部会長　確認のためにという感じですね。本当に時間が減っているのか、いや、時間そのものは実は減っていないように見えるとすれば、時間はあるのだけれども、充実していないということかということですかね。そこがはっきりすれば、それでいいという。

分かりました。特に 0.37 ポイント下がっているのがこの２つだからということですよね、取り上げるのは。

○谷藤邦基委員　そうですね。

○吉野英岐部会長　どうぞ、和川委員。

○和川央委員　確認なのですけれども、今回のところで実際に報告書に載るのは、余暇時間のグラフまででしょうか。

○松舘政策企画課特命課長　昨年のレポートでは、余暇時間のグラフも一応載せておりましたので。

○和川央委員　なるほど。すると、これは一体として載るということなのですね。

○松舘政策企画課特命課長　そうですね。

○吉野英岐部会長　もうほぼほぼ本物。

○和川央委員　前回もこの意見は巻末にまとめて入れて、そしてたしか文脈が分からないという話があって、ひたすら文脈が分かるように私も苦労して修正をした記憶があるのですけれども、どこに載せるかということによって結構書きぶりが変わると思いますというのが感想の一つです。

あと、何件かありまして、細かいところなのですが、１ページ目、分野別実感が低下した要因の１ポツ目、「70 代以上」と書いてあるのですけれども、これ「70 歳以上」にしましょう。

あと、２ポツ目の２行目の「自由な時間」のことについて、先ほど山田委員から御指摘があったのですが、ここは「余暇時間」にするべきかと思います。なぜかというと、お話あったように元々の意識調査がそのような表現であるということと、我々は差分を「余暇時間」と定義しているので、ここは「余暇時間」とするべきかと思います。

あと、書きぶりなのですけれども、正直読んですっと頭に入ってこなくて、提案なのですが、順番とすれば、１ポツ目はそのまま、２ポツ目飛ばして、３ポツ目を次に記述し、まず補足調査ではこうでしたよと説明し、なお最も大きい属性の 70 歳代以上、60 歳以上については先ほど谷藤委員がおっしゃったように、自由な時間っておかしいよねと、だから調べたらば、ここは自由な時間ではありませんでしたという説明にして、そしてその次に「補足調査において」というところについても、上位の（ア）、（イ）、（ウ）には入っていなかったけれども、さらに分析をしたらば、こういったのが出ました、そしてそれをま

とめると、こうでしたという形にすると、上から下に読んで分かりやすいかなと私は感じましたので、よろしければそういう形ではいかがかなと思っています。

○吉野英岐部会長　何かゼミの指導しているみたいな感じですけれども、要するに読みやすく、つながりが分かるような書き方に少し工夫してみてはいかがでしょうかというアドバイスだったと思いますので、それは少しやってみて、先生に見てもらって。

○松舘政策企画課特命課長　はい、分かりました。

○吉野英岐部会長　若菜委員はこの分野ありますか。

○若菜千穂副部会長　大丈夫です。

○吉野英岐部会長　ありがとうございます。
　では、意見は今度こっちに載せるけれどもということでいいですね、巻末でなくて分野ごとに載せる、これ同じ人が何回か出てくるのですよね。別に……

○松舘政策企画課特命課長　すみません、意見というのは委員の意見。

○吉野英岐部会長　そう、生の。これ別に区切る必要ないんじゃない。

○松舘政策企画課特命課長　こちらは、昨年は巻末にという形にして。

○吉野英岐部会長　そう、いわゆる議事録から引っ張ってきたという感じなのだけれども、ここ報告書の中身になってしまっているから、ティー委員は、名前出して言うけれども、ティー委員はこの部分と、谷藤委員がこれとこれと下にも裏にもあるので、それを全部くっつけて、１回目に議論しても２回目に議論しても別に同じ谷藤委員だから、つなげては駄目ですか。

○ティー・キャンヘーン委員　もっとわけ分からなくなる。

○吉野英岐部会長　でも、だから見出しがあればいいのですよね、本当は。何についてしゃべっているのかということですよね。
　でも、委員が出たり飛んだりしているところ結構あるので、報告書として読みやすくするには、山田委員の発言はこのとおりというか、そういう書き方もあるかなと思いました。

○松舘政策企画課特命課長　すみません。ちょっと確認だったのですけれども、私としては、構成としては去年と同じように委員の先生方の……

○ティー・キャンヘーン委員　発言録。

○松舘政策企画課特命課長　ええ、発言録のような形で最後につけようかなと思っておったのですけれども、各分野の後につける形に……

○吉野英岐部会長　各分野の真ん中。

○松舘政策企画課特命課長　今日の資料の構成としてはそういうふうになってしまっているのですけれども、最後にレポートとして仕上げるときに、こういった発言というのは去年と同じように最後のほうに持ってこようかなとは思っておったのですけれども……

○吉野英岐部会長　では、今日は３ページ、４ページに入っていますけれども、最終的な構成としては９ページ以降ですね。後ろ、巻末、各分野の巻末。

○松舘政策企画課特命課長　各分野の巻末というか、一旦レポートとしては各分野の事項を記載してしまいまして、その後に参考というような……

○吉野英岐部会長　分かりました。では、この位置に置くのは、今日は見せ方だけで……

○松舘政策企画課特命課長　そうです。すみません。

○吉野英岐部会長　本番は、これ全部後ろにまとめて、分析結果だけを前に持ってくるということですね。

○松舘政策企画課特命課長　はい。

○吉野英岐部会長　もしそれでもよければ、例年のときそうしていますから。それであれば、あくまで資料ですよね。

○松舘政策企画課特命課長　はい。

○吉野英岐部会長　それでよろしいですか、資料扱いで。真ん中に入れると、本編になってしまうので。

○松舘政策企画課特命課長　はい。

○吉野英岐部会長　相当重みが変わってくるのですけれども、それはしないと。分かりました。

　では、すみません、ここは、さっき言った 70 歳以上と 60 歳以上の無職で分けてみて、谷藤委員からのアドバイスは 31 年と令和５年があればいいよということですので、そこで見て、大幅に減っているとか大幅に増えているとか出てしまうと、ちょっと分析そのもの

が狂うので、大きな変化がないか、むしろやっぱり増えているかな、増えていなくてもいいのか、一定程度あるということね。

○松舘政策企画課特命課長　そうですね。

○吉野英岐部会長　ということを確認するために一応やってみましょうということにしましょうか。では、そこをちょっとひとつお願いします。

○松舘政策企画課特命課長　あと、すみません、もう一点、確認したかった点だったのですけれども、２ページ目の一番上のところです。先ほど和川委員からの御発言ありました上位３位に入っていなくても､実感が低下した方と上昇した方で差があったものについて、こちらは最後５つ目のポツのところで、上位３位プラスこの下がった云々は、行動制限があったことということで、４点こちらの余暇の充実では挙げているのですけれども、こういった４点挙げる形でよいかどうか、あるいはこちらが要因とまではいかないけれども、何か影響を与えたものという書きぶりの方がいいのかどうかというあたりもちょっとお伺いしたいなと思っておりました。

○吉野英岐部会長　では、和川委員。

○和川央委員　機械的にやったのではなくて、部会で議論して、こうだよね、これも考えられるねという議論の結果として出てきたものですので、私は載せてもいいのかなと思っています。載せ方をどうするかというのは、先ほど申し上げたとおりではあるのですけれども、載せること自体は、私は問題ないのではないかなと感じています。

○吉野英岐部会長　いわゆる横で見るというやり方でしたっけ。

○松舘政策企画課特命課長　はい、そうです。

○吉野英岐部会長　感じている人、変わらない人、下がっている人で。

○松舘政策企画課特命課長　横で見たときに差があったと。

○吉野英岐部会長　差がついている、それをだから言えばいいのだよね。上位だけでなくて、項目別に回答率の差が大きいところに着目して見るととかと入れれば、問題ないのではないですか。

○松舘政策企画課特命課長　分かりました。

○吉野英岐部会長　では、それも入れておいてください。では、いいですかね。
　では、地域のつながり行きますか、地域社会。資料１―２。

○松舘政策企画課特命課長　それでは、資料１―２です。地域社会とのつながりとなります。

１ページと２ページ、こちらがレポートの形式でまとめたものとなります。１ページ目の①分野別実感の概況ということで、実感平均値 3.07 点で、基準年調査より 0.28 点低下していることを記載しております。

イの属性別の状況ということで、こちらは第１回の資料６でお示しした一元配置分散分析の結果を記載しているものです。

そして、表３で有意な変動を示した属性を整理しているということになります。

続いて、②分野別実感が低下した要因といたしまして５点記載をしております。１点目ですけれども、実感が有意に低下した属性が表３のとおり、多くの属性で低下幅が大きい傾向にあると。それから２点目、補足調査で把握している要因として、選択された上位の３項目。それから３点目で、先ほどの上位３項目に入らなくても、横で比べたときに見たもので、特に特徴的な要因はなかったということ、４ポツ目で以上を踏まえた要因として推測される３項目を記載しております。そして、５点目に前回の部会で若菜委員から地域社会とのつながりについては要因の多様性がかなりあるのではないかということを御発言いただいておりましたので、そういった多様性があるのではないかというようなことも記載をしております。

続いて、③一貫して高値または低値で推移している属性の要因ということで、こちらは１つの属性がこれに該当しましたので、こちらについて記載をしております。

３ページ目は過去２回の委員の御発言、それから４ページ目から６ページ目までは、先ほどの余暇の充実と同様に補足調査の結果の３種類の資料です。

以上がこちらで御準備をした資料となります。よろしく御審議をお願いいたします。

○吉野英岐部会長　地域社会とのつながり、だんだん下がっている感じなのですけれども、この書きぶりはこれでよろしいかどうか。構成は、この５ページの表が入っているのですね、さっきと違って。マトリクス。

○松舘政策企画課特命課長　５ページの表は全ての分野に入れております。

○吉野英岐部会長　余暇の充実にも入っているから同じ構成ですね。

○松舘政策企画課特命課長　ええ。第２回の資料でお示ししたものと同じになっております。

○吉野英岐部会長　この要因として挙げている太字の部分、これでよろしいかどうかが一番大きいかな。

若菜委員、この要因として挙げた太字の部分いかがですか。

○若菜千穂副部会長　配慮いただいてありがとうございます。加筆いただいたので、大丈

夫です。

○吉野英岐部会長　ありがとうございます。
　ここは、何か必ずしも下がっているから悪いとも言い難いところでもあるのです。
　和川委員。

○和川央委員　表現についてなのですけれども、２ページ目の分野別実感が低下した要因の一番最後のポツです。「なお、当該分野については」というところの一番最後、「実感が低下した要因が属性によって多様性がある」という表現があるのですが、要因が多様性があるという表現がいま一つ性質が違うかな。例えば「属性別では要因が異なる」とか、もうちょっと違った、分析から出てくる表現で書き換えたほうがより分かりやすいかなと感じました。

○吉野英岐部会長　どうぞ。

○松舘政策企画課特命課長　では、そういった書きぶりにこちらで修正をしたいと思います。

○吉野英岐部会長　では、ちょっとそこ工夫してみましょう。
　ほかに文言。
　私その同じ質問したのは③で、これ微妙に言葉を変えるのだけれども、「一貫して」というのはさっきの余暇の充実で使うのだけれども、こっちは「継続して」というふうに微妙に変わるのと、それから「一貫して低水準」という言い方と、「一貫して低値」あるいは「高値」という言い方あるのです。だから、低水準と低値は意味が違うかといったら、同じ……

○松舘政策企画課特命課長　すみません、こちらで記載の統一性がなかったので。

○吉野英岐部会長　そして、「低値」ということで大体ほか使っているから、「低水準」は「低値」でいいとして。

○松舘政策企画課特命課長　そうですね、はい。

○吉野英岐部会長　実はここ「一貫して低値」がないのですよね。つまり最初に断っているように、平成 28 年からずっと８年間分ぐらい見ていくと、「一貫して」というのはずっと低いまま３未満というのは実はないがまず一つの結論。ないのだから、はい、終わりと言いたいとことですけれども、それではちょっとということで、よくよく見ていくと、若い 20 代は基準年以降だけを見れば、低値のままであるということを言いたいのですよね。

○松舘政策企画課特命課長　そうですね、はい。

○吉野英岐部会長　だから、まず「一貫して低値で推移している属性はありませんでした。」で一旦切ってしまっていいのではないですか。それで、ただしとか、ただ基準年以降、一貫して低値な属性として 20 から 29 歳が挙げられるとか、ないのだけれども、ここだけちょっと期間短くすると出てきますという意味で、特に書いているわけですよね。だから、本当はこんなにたくさん書かなくてもいいのかもしれないのだけれども、やってみましたというのをちょっと出したほうがいいかなと。そうしないと基本はここ一貫して低値また高値のものを取り上げるはずなのだから、あえてやる必要ないではないかと言われても、そうだよねと、ちょっとそれは書き方かなと。

○松舘政策企画課特命課長　はい、分かりました。修正したいと思います。

○吉野英岐部会長　それから、あとは一貫してはいないのだけれども、丸ポツの３つ目、「２回以上実感が低い」というのはつまり３未満ということですよね、２点台以下。実感が低いと。

○松舘政策企画課特命課長　こちらは……

○吉野英岐部会長　あっ、こっちはいいのか、低値でなくてもいいのだ。

○松舘政策企画課特命課長　はい。補足調査の結果で上位３位で入ったものということになりますので。

○吉野英岐部会長　そうすると、丸ポツの１番と２番は関連している……あるいは丸ポツの１番は、その後どこに分析を行いましたというのはどこに続くのですか。

○松舘政策企画課特命課長　２つ目と３つ目に。

○吉野英岐部会長　丸ポツの２番目と丸ポツの３番目、つまりここは 20 歳から 29 歳のカテゴリーの人たちに対しての特別な追加的な分析をしていると。

○松舘政策企画課特命課長　そうです。

○吉野英岐部会長　丸ポツの３個目もそう。

○松舘政策企画課特命課長　そうです。

○吉野英岐部会長　分かりました。ちょっとそう書いておいたほうがいいのかな。
　丸ポツの４個目も「以上のことから」というのは、20 代に限っての解釈……

○松舘政策企画課特命課長　そうです。

○吉野英岐部会長　ということですよね。だから、表４は 20 代しか載せていないということになるのですよね。2.95 から、本当だったら一貫しているものはさっき言ったとおりないのだから、やらなくていいのですよねというところかもしれないですよね。
　山田委員、どうぞ。

○山田佳奈委員　すみません。今私、誤解していることに気がつきました。
　２ページ目の最後のポツの「以上のことから」というのは、これはあくまでも 20 から 29 歳だけの話……

○ティー・キャンヘーン委員　いや、違うような気がする。

○松舘政策企画課特命課長　ここは 20 代から 29 歳……

○ティー・キャンヘーン委員　補足調査で 20 代から 29 歳を抽出して、要因にしたのですね。

○松舘政策企画課特命課長　そうです。

○吉野英岐部会長　数が少ない。

○ティー・キャンヘーン委員　えっ、あり得るかな。

○吉野英岐部会長　できるのかなと。いや、書いてあるのだから、できるのだよ。

○ティー・キャンヘーン委員　できる。失礼いたしました。

○吉野英岐部会長　できるのだけれども、ここすごく少なくないですか、サンプル。

○松舘政策企画課特命課長　サンプルとしては少ないはずです。

○吉野英岐部会長　５人とか、そんなことはないか。だって、20 代の中でもちょっと低い人たちのだけ取ってきているのではないの。低値で推移している人たちだけ集めているわけですよね、ここ、20 代で限定で。それとも年齢限定はしていないの。

○松舘政策企画課特命課長　第１回の資料なのですけれども、資料７―２が補足調査の結果になりますけれども、そちらのちょっとページ番号大きいのですけれども、313 ページ、こちらが 20 から 29 歳の今年の結果ということで、母数としては確かに全体でも 22 人で、数は少ない形になります。ここから持ってきているという形になります。

○ティー・キャンヘーン委員　ありがとうございました。すみません。

○吉野英岐部会長　この中には、３以上つけた人が入っているということなの、20 代で。入っていないの。

○松舘政策企画課特命課長　こちらは、単年の単純集計で、「あまり感じない」、「感じない」なので、補足調査で１点、２点の方々となります。すみません、こちらの今年度の資料にはつけていないのですけれども、令和２年以降の 20 代のデータを見ていってという形になります。

○吉野英岐部会長　そうすると、８人ということ。

○松舘政策企画課特命課長　そうですね、８人ということです。

○吉野英岐部会長　８人だけなのだよね、使えるデータというのは。

○松舘政策企画課特命課長　はい。

○吉野英岐部会長　書いてくれた人はありがたいけれども、８人の答えからこれを導き出したということだから、全体的にはややサンプルが少ない。

○ティー・キャンヘーン委員　でも、それはほかのことも言えるので。

○吉野英岐部会長　しようがない。８人……

○ティー・キャンヘーン委員　ほかの分野も。

○吉野英岐部会長　少ないところでやっている。でも、20 代使ってしまうとこうなるのかな。

○ティー・キャンヘーン委員　でも、ほかの分野も多分そういうことは起き得るので。一つずつ見ていくので、

○吉野英岐部会長　低値で推移している要因とまで言っていいのかな、低下しているというのは、基準年と比べて低下しているということですよね。低下しているというか「あまり感じない」、「感じない」の割合というのは、令和５しか……

○松舘政策企画課特命課長　そうですね。

○吉野英岐部会長　この人たちは、令和４より前は、３以上だったかもしれないのです。

○松舘政策企画課特命課長　そうですね。

○吉野英岐部会長　だから、この人たちが一貫して低いとは実は言えない。

○松舘政策企画課特命課長　そうですね。

○吉野英岐部会長　調べてみれば誰だか分かっているから、ずっと８人追跡したら、みんな一貫して低かったというと、一貫して低い要因として書いても多分大丈夫そうな気もするけれども、この人たまたま令和５は２とかつけたけれども、令和４と３のときは３をつけていたとなると、実はこの人に聞いても一貫して低い要因が当てはまるか、ちょっと微妙ではないですか。

○松舘政策企画課特命課長　やり方としては、結局毎年の 20 から 29 歳のところで「感じない」、「あまり感じない」を選択した人たちの上位３項目を見ていくという……

○吉野英岐部会長　その各年ですよね。

○松舘政策企画課特命課長　そうですね。ですので、その人たちが同じ人たちがずっとそれをつけているかどうかという、そこはちょっと押さえていないと。

○吉野英岐部会長　ただ、補足調査のいいところは、その人たちが過去どうつけたかが分かっているのですよね、調べれば、ＩＤが分かっているから。そうすると、より確実に物を言うためには、この人たちが今年も低いけれども、去年までもやっぱり低かったというのがあれば、やっぱり一貫して低い人たちの集団ですよね。だから、そこでどういう要因が挙がっているかを見れば、サンプル数少ないけれども、その人たちの意見というのはやっぱり低い集団の意見として取り入れられるけれども、この人たちは一貫して低い人たちのグループでないとなると、そこはちょっと全く外れではないけれども、グループの取り方としてはちょっと大きく取り過ぎたなという感じにちょっと見えたのだけれども、それ大丈夫かな。少なくとも、これ補足だから４回分ぐらい。

○松舘政策企画課特命課長　そうですね。

○吉野英岐部会長　ここは平成 31 以降だから、４回分はあるということですね。基準年以降は補足も持っているから、そこがもし調べて該当していたら、このままで私は全然オーケーです。

　ただし、この人たちが実は前は４つけていたとか、前は３つけていたとなると、ここは取り上げるケースとしてはちょっとずれていますけれども、しかもそのずれが８人中に６人ぐらいいたら、変えてしまって大丈夫かなという気がちょっとした。８人中７人ぐらい

はずれていませんと、常に２以下でずっとつけている人たちだから、一貫して低いグループの人たち、しかも 20 代ですと。そうすれば、より確実に物を言っていいかなと思って、ちょっとそこ確認できませんか、８人ぐらい遡って。

○松舘政策企画課特命課長　確認はできます。

○吉野英岐部会長　問題なければ、それでいいと思います。
　ティー先生、何かありますか。
　和川さん。

○和川央委員　そうやって確認してみるというのは正統なやり方で、よろしいかなと思いますので、１つコメントです。
　こうやった経緯、僕も今反芻、思い起こしていたのですけれども、本来はそうすべきなのだけれども、ここはメインの分析ではないから、まず単年度こうやることで、それを掲載していこうよということで今までやってきた、積み重ねてきた経緯があったかなと思います。しかも、そのような手順で進めてもサンプルが１とか２とかとても小さくなりますし、サンプルあったとしても理由を回答していない、要因を書いていないということもあり得るので、まずはこうやっていこうということで今までやってきたと思います。

○吉野英岐部会長　これ、要するにサンプルがつながってしまうことなのですよ。

○和川央委員　そうですね。

○吉野英岐部会長　１年目というのは、１回、１個しかサンプルないわけですよね。でも、２年目やって、３年目やって、４年目やって、同じ人が４回答えてくれていることがもう積み重なってきたので、これはむしろ生かせるということですね。

○和川央委員　そういうことで、今年だけでなくて過去の結果も見ながら、いわゆるクロスセクションで分析した結果を毎年時系列につなげて見ていこうよというのがこれまでのやり方だったかなと思います。これらの分析を今からやる分量がどれくらいなのかなというのはちょっと心配で、これを一個一個チェック……

○吉野英岐部会長　ティー先生。

○ティー・キャンヘーン委員　部会長の指摘は、確かにそうだなと思うのですけれども、実は今の指摘というのは、今からやる全てグループ……

○吉野英岐部会長　10 個にみんなかかってしまうということね。

○ティー・キャンヘーン委員　はい。

○吉野英岐部会長　一貫しているものがなければいいのだけれども。

○ティー・キャンヘーン委員　もう既に多分……

○吉野英岐部会長　いっぱいある。

○ティー・キャンヘーン委員　この資料１―１の余暇の、ちょっと戻るのですけれども、一貫して高値、一貫して低値で要因を全部見ていかなければいけないということになるのです。

○吉野英岐部会長　だから、ちょっと心配なのは、ここサンプル数が少ないから、20 代は。だから、要するに８人で物を言って大丈夫というためには、この人たちは常にこういうグループの人たちですというふうに、集団としての一貫性というか、キャラがずっとあるということで担保するかなと思ったのです。８人でも全然問題なければ、そこまでは厳密にチェックすることもないかと思うので、あるけれども、ティー先生は何か意見ありますか。

○ティー・キャンヘーン委員　確かに担保できないですが、となると……

○吉野英岐部会長　全部やり直しになってしまうから、大変と。

○ティー・キャンヘーン委員　はい。ということになります。

○吉野英岐部会長　分かりました。

○ティー・キャンヘーン委員　部会長にお任せします。

○吉野英岐部会長　簡単なところだけやろうかな。それは駄目だよね。

○ティー・キャンヘーン委員　そうやるとぶれる。

○吉野英岐部会長　では、谷藤さん。

○谷藤邦基委員　ここはあまり吟味しても、大勢に影響あるかという問題もあるので、そこは現実的な処理でいいと思うのですが、ただここでちょっと１つ、さっきから言っている補足調査の問題というのが１つ出ていると思うのです。

　年代別に見ていったときに、県民意識調査はその都度無差別抽出しているから、20 代というか 20 から 29 歳というところでもいいのでしょうけれども、補足調査のほうは毎年１歳ずつ年取っていくのです。今回 20 代の回答者全部で 22 人ですけれども、前回には 37 人なのです。

○吉野英岐部会長　卒業してしまったの。

○谷藤邦基委員　ええ。だから、上の年代に上がっているわけです。だから、既に 10 代いなくなっているし、だから一番問題が出やすい場所がこの 20 代なのです。だから、補足調査の 20 代が県民意識調査の 20 代を代表しているかという話です。

だから、そういう問題が出てきているので、そこを含めて次回に向けて見直しをお願いしたいと。今回は、ある意味実益と労力との兼ね合いで現実的に処理しましょう。

○吉野英岐部会長　分かりました。そうすると、ここをもっと浅く書いてもいいかなと思います、逆に。要因分析まで行かないで、20 代については低かったというところでとどめておいて、メインではないからというぐらいで、表 4 出しておいて、こういう状況でしたと。要因まで書いてしまうと、それはそういうことだということを自信持って言っているとなってしまうので、そこまでちょっと……さっき言ったように卒業生がいっぱいいる世代だし、それからサンプル数自体が少ないとなると、こういう要因が出てきているのは確かなのだけれども、これがどれほど説明能力持っているかについては、20 代についてはちょっと厳しいかなと思って聞いていたので、より裏を取るか、逆にあまり踏み込まないで、こういう状況だったということを淡々と書くという、むしろ後者のほうがここに労力を使うよりはほかに能力を使ったほうがいいという多分谷藤先生の御意見なので、私はそれならそれで何でも構わないけれども、書いてしまうと責任あるので……

○谷藤邦基委員　そうですね。

○吉野英岐部会長　本当なのですかと言われたときに、根拠はというときに、根拠弱いですと言うと恥ずかしいので、書くならちゃんと書くし、ちょっとややデータ的に不十分なところはあまり踏み込まないでいいのではないですか。

以上です。

○松舘政策企画課特命課長　承知しました。そのように確認、変更したいと思います。

○山田佳奈委員　今委員の皆様がおっしゃったとおりで、私もおっしゃるとおりなのですけれども、これから多分変えていただくと思うので、変わるかとは思うのですが、見た人、見る人の印象からすると、太文字のところに目が行くというか、というのはあると思うのです。

○吉野英岐部会長　それはそうだよね。

○山田佳奈委員　それで、やっぱり先ほどもちょっと申し上げたことが関わるのですけれども、ポツポツがあると、全部独立して見えるというか、そうすると私であれば、「以上のことから」というのに目がまず行って、一体この「以上のことから」、これがどこを言って

いるのかなというのがちょっと分からなくなってしまうところがあるような気がするので、先ほど和川委員さんですか、おっしゃった見出しというか、あるいは何かここで言っているのは、ここからは全部これのことですよというのが分かるような、ここに限らずということだと思うのですが、あった方が読者が迷わなくて済むのではないかなと思います。

あとは、あっさりとどこまで書くかどうかというのは、またちょっと中身次第かなとは思っていました。

すみません、簡単なところです。

○吉野英岐部会長　では、書き方の工夫をちょっと考えてみましょう。

どうしよう。もう一個だけやりますか。地域の安全だけやって、休憩しますか。

では、地域の安全、１―３、説明お願いします。

○松舘政策企画課特命課長　それでは、資料１―３となります。

１ページ目と２ページ目、こちらが年次レポートの形式で整理したものとなります。①のアとしまして、実感平均値が 3.69 点、基準年調査より 0.13 点低下していることをお示ししております。

イの属性別の状況については、第１回の資料６でお示しした一元配置分散分析の結果となります。

そして、表５で有意な変動のあった属性を整理しているということになります。

②分野別実感が低下した要因といたしまして、４点記載をしております。１点目には、低下幅が大きい属性について記載をしております。２点目には、補足調査による分野別実感の回答理由と関連が強い要因で選択された上位３位の項目、３点目に実感が上昇した方と低下した方の回答理由で関連が強い要因を比較した場合に、上位３項目には入らないけれども、社会インフラの老朽化というのが挙がってきたということ、そして４点目で以上を踏まえて当該分野の実感が低下した要因として４項目を記載しているという形になります。また、こちらも広域振興圏別に見ますと、沿岸広域振興圏が 0.28 ポイントの低下というところもございますので、こういったところも新たに項目を起こして記載したほうがいいのかどうかというあたりもお伺いできればと思っております。

それから、こちらは継続して低値で推移している属性というのはございませんでした。

資料の３ページ目、こちらは委員の皆様のこれまでの御発言内容となります。

続いて、資料４ページ目から７ページ目となります。こちら地域の安全の実感の回答状況について、広域圏別、年代別に集計してグラフにしたものとなります。

４ページ目ですけれども、こちらは広域振興圏別の推移です。上段が「感じる」あるいは「やや感じる」と回答した方の推移、下段が「感じない」、「あまり感じない」と回答した方の推移となります。上段の「感じる」の方の回答割合の推移ですけれども、広域振興圏別となっておりまして、青の折れ線グラフが沿岸広域振興圏となります。平成 31 年が 60％ちょっとからＲ５年は 55％弱ぐらいまでの減少となっております。

５ページですけれども、こちらは年代別の推移です。同様に上段が「感じる」、「やや感じる」と回答した方の推移、下段が「感じない」、「あまり感じない」と回答した方の推移となります。

続いて、６ページ、７ページですけれども、こちらは広域圏別で、かつ年代別の推移となります。６ページの方が「感じる」、「やや感じる」と回答した方の推移、７ページのほうが「感じない」、「あまり感じない」と回答した方の推移です。

６ページ、上から３つ目、こちらが沿岸広域振興圏ということになります。ちょっとグラフが小さくて見づらいのですけれども、灰色で示している30代、それから黄色で示している40歳代、青で示している50歳代、この辺りの年代が平成31年の基準年から比べると、令和５年は減少しているといった形になります。

８ページ目から10ページ目までは、前の分野と同様に補足調査の結果をまとめた３つの資料となります。

以上がこちらで御準備した資料となります。よろしく御審議をお願いします。

○吉野英岐部会長　ありがとうございます。

地域の安全について、まず低下しているので、取り上げているということですね。それで、属性別に見ると、年齢とか職業、居住年数、これで違うか……。その要因については、年齢、職業、広域圏別で見ていただいたということですね。県央と沿岸が有意に低下しているから、それも含めて４広域圏で見てみましたと。職業で何で低下するかはよく分からないのだよね。どちらかといえば、広域圏別の方が多分しっくりときそうですね。ある特定の地域の安全性というものが実感度が高いということで、実感が低下、上昇というだけではなくて、沿岸の「感じる」、４ページの上の表だと、青い方が常に低いのですよね、ほかの３地域全体と比べても、沿岸地域の地域の安全性については全体より常に下回る。あるいは「感じない」人が多いということでいいのかな。これはちょっと課題ではあるなと思います。

では、谷藤先生。

○谷藤邦基委員　ちょっと事務局のほうからも話がありましたけれども、沿岸の問題は、やっぱり１項目書き込むべきだと思います。要因も私かなりはっきりしていると思います。やっぱり千島海溝沖地震の被害想定が出たと、これが非常に影響していると思う。これは、もう私間違いないと思っています、首をかけてもいいというぐらい。そうでなければ、沿岸広域振興圏だけがこれだけ顕著に変化しているはずはないのです。ほかの要因は、各広域圏それぞれに影響あるかもしれないけれども、千島海溝沖地震は、沿岸と、あと一部県北ですよね。それ以外にはほとんど関係がない。

そう思うと、やはり千島海溝沖地震の被害想定、これが出たということが非常に影響していると思いますので、それは１項目立てて書いていいと思います。というか、それを書かないと、やっぱり対外的に物を申すときに弱いと思うのです。せっかくこういうある種のエビデンスが出てきたのだから、これは書いておいたほうがいいと思います。書きぶりはお任せしますけれども。

○吉野英岐部会長　やっぱり地震津波のおそれというか……

○谷藤邦基委員　これ復興に関わる委員会に出ていると、物すごい議論になっていますよ。

ちょっと話すと長くなってしまいますけれども、今まで国交省主導で防潮堤の整備とか進めてきたわけです。これだけのものを整備すれば、今後百数十年にわたって大丈夫だろうという印象を与えるものを造ったと。それが本当に大丈夫かというと、それはまた別なのですが、少なくともそういう印象を与える内容のものを造ったと。

と思っていたら、これ実は千島海溝沖地震の被害想定出してきたのは国交省ではないのです。我々からしてみれば、どっちも霞が関ではないかと思うのですが、千島海溝沖地震に関しては内閣府の防災担当が出してきたのです、たしか。だから、せっかくそうやって整備進めてきたものがこの期に及んで何でそんな被害想定が出るのだと。せっかく整備した防潮堤が壊れるかもと、そんな被害想定あるかというのが復興に関わっているほうの人間たちの実感としてはあるのです。実際、だから本当に現場の人たちもっと大変です。特に久慈などは。

○吉野英岐部会長　久慈はね。

○谷藤邦基委員　もう久慈住むところないじゃないのと、平地全部駄目じゃないかと、それぐらいの状況ですよね。だから、あの被害想定が出たことが地域の安全に関する実感に相当ネガティブに影響しているのは間違いないと思います。

だから、私らとしてできることは、事実を書くことだけなのですが、ただ要因としては間違いなく被害想定の話、書いていいと思うので。

○吉野英岐部会長　では、ちょっとそこはせっかくグラフも作っていただきましたし、今の話、他の委員会等でもかなり議論している部分でもあると、要するに関心が高い部分だということで、地域別の要因としては今のようなことも考えられるということ。これはちょっと調査結果からではないけれども、全体の状況を見ると、やはり大きな被害想定の影響力を無視できないと。

○谷藤邦基委員　ほかの広域圏も同じような下がり方しているのであれば別ですけれども、これ沿岸だけ特に下がっているというのは、やっぱりそれ以外に考えられないです。調査時期からいってもそうです。

○吉野英岐部会長　そうですね。

○谷藤邦基委員　だから、被害想定が公表された日付等も入れていただくといいかもしれないです。あれ１月の末ぐらいでしたっけ。その前かな、いずれにしても調査時期とちゃんと重なるし、そもそもその前からかなりひどいことになりそうだというのは言われていたわけなので。

○吉野英岐部会長　そういったことも含めて、ちょっと書き込みましょう。せっかくこれだけグラフを入れるということについて言及しているほうがいいかなと思いました。

あと、何かほかの。

和川委員。

○和川央委員　確認です。１ページ目、①、イ、属性別の状況の令和５年県民意識調査の状況、これは単年での属性比較だと思うのですけれども、ここには広域振興圏は入ってこないのですか。前に頂いた資料、一元配置分散分析の結果を見ると、アスタリスク３つついているのですけれども、ここに入ってこないかどうかの確認です。

○松舘政策企画課特命課長　すみません、ちょっとお待ちください。
　そうですね、入っています。申し訳ありません。追記いたします。大変失礼いたしました。

○吉野英岐部会長　確かにその後いっぱい分析するのに、頭でなぜないのかということですね。では、１つポツ追加しますね。

○松舘政策企画課特命課長　はい、追記いたします。

○吉野英岐部会長　では、お願いします。
　居住年数も入っていたけれども、ここ 0.14 だから、まあまあというぐらいですかね、低下幅はね。では、ちょっと追加。
　広域振興圏別の分析をちょっとやってみましたよということで、全体が低下していて、主に２つの圏域で低下しているし、さらに沿岸では常に他の広域圏を下回っているということですね。その実感、要因もちょっと書いてもらっていて、太文字のところ、自然災害の発生が多く、被害も大きくなっている、実際にまだ発災していないものを含めてということですね。犯罪の発生状況に不安があると、地域の防犯体制に不安がある、これしょっちゅうサイレン鳴ると、怖くなるということも入るのかな、及び社会インフラの老朽化に不安がある、これはどこでも起こる、県内全域で起こっているからですね。特に沿岸広域振興圏に当てはまるような特定の理由というのはここには出てこないけれども、常に低いと、やっぱりなぜかということにはなりますね。では、どうしたらいいか。それは、全般的な社会状況からちょっと補足してもいいかなという御意見でした。首をかけてもいいとおっしゃるから、大丈夫ですね。
　何か小野部長さんは、沿岸の低さは何か御感想ありますか。

○小野政策企画部長　ちょっと今データ見つけられなかったけれども、復興意識調査とか復興ウオッチャーの安全のところを見ても、それまでとはちょっと動きが変わっているのではなかったかなと、ちょっとグラフが浮かばないのですけれども、恐らく同じような動きをしているのではないかなというふうに思いますが。

○吉野英岐部会長　でも、県政として何かこの不安解消のやり方はあるのですか、情報をちゃんと出すと。

○小野政策企画部長　今年度の当初は、ハードについては国の方が大きいのですけれども、ハード、ソフト併せて現在行っていくということで、ソフト分野については当初予算で市町村に補助金を出しますと。場合によっては、補助率を上げるような形でやっています。そこは今年度の当初で手を打っているという形です。

○吉野英岐部会長　分かりました。これでさらに不安感高まったらどうしましょう。手を打ちましたよと今お話があったので、来年……

○小野政策企画部長　始まったばかりですので。

○吉野英岐部会長　始まったばかりですか、すぐに効果は出ないと。でも、一貫してはないのだけれども、かなり他地域に比べて不安な人が多いというのはやっぱり住む人が減る要因にもなりかねないわけですから、やっぱり安全ですよということを実感してもらえるような施策は、特に沿岸と県北の沿岸ですよね。久慈は県北に入ってしまうのだけれども、その辺についてやっぱり必要かもしれませんね。人口減少は結構高い地域ですよね、たしか。それはいろいろ手を打ったって、不安感が高い中ではとても住めませんなんて言われてしまうと、せっかくやっても意味が無くなるので、１個１個上げるようにしたいと思います。

　では、ちょっと時間も超過していますので、ここで一旦午前中の議論止めまして、午後はやりがいから進めたいと思います。若菜さんも午前中ずっと御出席ありがとうございました。午後はいないですね。

○若菜千穂副部会長　すみません。

○吉野英岐部会長　それから、ティー先生も午後いない。

○ティー・キャンヘーン委員　すみません。

○吉野英岐部会長　では、一旦お返しします。

○八重樫政策企画課評価課長　午前の部、御苦労様でした。

　それでは、お昼の休憩に入りたいと思います。1時間取りたいと思っておりましたので、13時５分再開ということでお願いしたいと思います。

　若菜先生、ありがとうございました。

　それでは、午前の部終了いたします。

〔　休憩　〕

○吉野英岐部会長　では、資料１―４の説明をお願いします。

○松舘政策企画課特命課長　それでは、仕事のやりがいということで資料１―４を御覧ください。こちらも１ページ目と２ページ目、こちらが年次レポートの形式で整理したものとなります。

①分野別実感の概況のア、分野別実感の推移ですけれども、実感平均値は 3.39 点であり、基準年調査より 0.15 点低下していること、それからイの属性別の状況のところについては第１回の資料６の一元配置分散分析の結果を記載しているものとなります。

そして、表６で有意な変化があった属性を整理しております。

②分野別実感が低下した要因といたしまして、４点記載をしております。１点目には、低下幅が大きい属性について記載をしております。

２点目には、補足調査による分野別実感の回答理由と関連が強い要因、上位３項目を記載しております。

３点目には、実感が上昇した方と低下した方の回答理由の関連が強い要因を比較した場合に、現在の収入・給料の額、それから将来の収入・給料の額の見込みで差があることを記載しております。

４点目としまして、以上を踏まえた上で要因として推測される３項目を記載しております。こちらも先ほどの地域の安全と同様に、沿岸広域振興圏で 0.30 ポイントの低下というところもありますので、こちらも広域振興圏別で新たに記載をするかどうかということについて、また御意見をいただければと思っております。

また、③については、一貫して高値、低値はなかったということになります。

そして、３ページ目ですけれども、前回までの委員の主な御発言を整理したもの。

それから、４ページ目、こちらは県民意識調査の結果です。こちらは、前回までの部会の御議論で、分野別で 70 歳以上の方のところが実感が下がっているということで、お仕事されていない方も含まれているということで、お仕事している人だけのデータも見たほうがいいのではないかということで、年代にかかわらずお仕事をされている方で集計し直したものを出しております。そうしますと、平成 31 年 3.6 ポイントに対して令和５年 3.48 ポイントということで、0.12 ポイントの低下となっております。

続いて、５ページから９ページ、こちらは有効求人倍率の数値となります。特に沿岸部の方で厳しいのではないかというような御意見が、前回ございましたので、有効求人倍率のデータを持ってきております。

５ページ目ですけれども、平成 30 年１月から令和２年１月までの期間の有効求人倍率のデータとなります。平成 31 年の県民意識調査の調査時期が平成 31 年１月から２月ということになりますので、上のグラフでいいますと、沿岸部、緑の折れ線グラフとなりますけれども、沿岸部で 1.51、あるいは２月で 1.28 といったあたりの有効求人倍率となっております。

６ページ以降、１年ずつちょっと期間が重なってしまうのですけれども、６ページが平成 31 年１月から令和３年１月までのデータ、７ページが令和２年１月から令和４年１月までのデータ、８ページが令和３年１月から令和５年１月までのデータ、そして９ページが少し月のところがずれまして、令和３年４月から令和５年４月までのデータとなります。

そして、今年の令和５年の県民意識調査の実施時期であります１月、２月のところを９ページで見ますと、沿岸部、緑の折れ線グラフですけれども、有効求人倍率としては 1.11 あ

るいは0.97と、１を切る状況の中での調査になっているという形になります。
有効求人倍率のデータにつきましては、岩手労働局で出しているデータということになりまして、沿岸の計というのが下の表を見ていただきますと分かりますとおり、釜石、宮古、大船渡、久慈の計ということになりまして、県の広域振興圏でいうと、釜石、宮古、大船渡が沿岸、久慈は県北に含まれるということで、少しずれはあるという状況ではあります。
以上が９ページまでの有効求人倍率となります。
それから、10ページ目、11ページ目、12ページ目までは、これまでの分野でも同様に出しておりました補足調査におけるデータを３つつけています。
それから、13ページですけれども、こちらは補足調査における仕事のやりがいのところの理由別分析ですけれども、お仕事をしている方のみに関して集計をし直したものとなります。お仕事をしている方のみで集計をし直しているのですけれども、前回の集計結果とは回答の傾向としてはほぼ同様というところでございます。
以上がこちらで御準備した資料となります。御審議よろしくお願いいたします。

○吉野英岐部会長　ありがとうございます。
ここで低下しているところですね、基準年に比べて有意に低下しているものの一つの仕事のやりがい、１ページ目にどこが低下しているのかという属性を挙げてくれて、それに対して補足調査で関連性の強い要因を挙げていくとこんな感じです。
全般的に何か意見があれば、どうぞ。
この４ページで、要するに仕事をしている人だけのデータを出してみたのですよね。

○松舘政策企画課特命課長　はい。

○吉野英岐部会長　これについては、文章の中ではどういうふうに言及しているのですか。

○松舘政策企画課特命課長　文章の中では、特にこの資料については言及はしていないです。

○吉野英岐部会長　ああ、そうか。いずれもし表を載せるとしたら、何か書かなければいけないですね。

○松舘政策企画課特命課長　はい。

○吉野英岐部会長　今回はそういうリクエストがあったので、ここに載せてみましたというところにまず第１弾ということですね。

○松舘政策企画課特命課長　はい。

○吉野英岐部会長　青は何か低下ですか。

○松舘政策企画課特命課長　青は、実感の有意な低下ということになります。

○吉野英岐部会長　やっぱり仕事がある人で低下しているというのは言えるのですかね。

○松舘政策企画課特命課長　そうです。

○吉野英岐部会長　仕事のない人も実際よりもちょっと下がってはいるけれども、有意な低下ではないということか。

あと、さっき言った地域で見ていくと、沿岸が低いというか大幅に下がっている傾向、H31 と比べるとということで、折れ線グラフを引っ張ってくれて、これよく見ると折れ線グラフは重なってしまうので、時期が。1 個飛ばしたぐらいでも大丈夫ぐらいでした、よく見るとね。

例えば平成 31 の１月というのは最初のスタートか、折れ線グラフの。だけれども、補足調査の基準年というのは平成 31 だから、仮に平成 31 の有効求人倍率 1.49 とかに比べて、Ｒ５の有効求人倍率、１月は 1.11 ということで、1.49 よりも上回ることはもうないのですよね、常に。だから、やっぱり県全体でも有効求人倍率は上がったり下がったりしていますけれども、沿岸は、基準年の 31 年１月をほぼ常に下回るということと、もう一つは、これはちょっと沿岸だから振興圏とは違うのかな、エリアがですね。

だから、ちょっと直接的に説明は難しいけれども、沿岸というふうにカテゴライズされている地域は、内陸に比べれば有効求人倍率もいつも下。いつもということもないですけれども、ほぼほぼこの５年間は下になると。令和２だけちょっと違うのかなと。これは参考データですかね、直接ちょっとエリア重ならないから、これ以上は細かくできないということですかね。

あとは、要因の説明として「以上を踏まえ」のところから、２ページに戻って、実感が低下した要因は、現在の収入・給料の額が十分とは言えない、現在の職種・業務の内容に不満がある、将来の収入・給料の額の見込みに不安がある、この３つが上位に来ている、補足調査ではということでいいのかな。おおむね間違ってはいないと思いますけれども。

何かこれ足したほうがいいとかありますか。

では、和川先生。

○和川央委員　②の１つ目のポツなのですけれども、「表５のとおり」とあるのですけれども、これ「表６のとおり」でいいですかね。

○松舘政策企画課特命課長　いいです。大変失礼しました。

○和川央委員　コメントになるのですけれども、当初 70 歳以上の低下の寄与度が大きかったので、もしかしたら仕事していない人が引き下げていたのかなというのを懸念していたのですが、実際は有職者もやっぱり下がっているということが分かったので、記述自体は私も間違いはないかなと思います。

○吉野英岐部会長　沿岸の振興圏が低いというのは、やっぱりある程度せっかくデータをそろえてくれたのだから言いますか。言ったほうがいいですか。データはあると。
　では、谷藤委員。

○谷藤邦基委員　書き込んでいいと思います。というか、やはり有効求人倍率のグラフ見ていると思うのは、例えば平成31年の基準年のところだと、ほとんど沿岸と内陸の差、乖離がないのですけれども、ここ調査時点を基準にすると、その前1年ぐらいから乖離がどんどん大きくなっているという状況があって、かつ今回の調査時期に前後して沿岸のほうは1倍を切る状況に今なっているということがあるので、この状況を指摘するのはこのレポートの役目ではないとしても、それに触れつつ、ここでやっぱり沿岸の仕事のやりがいが下がっているというのは関連があると推測しても無理はないと思うので、書き方はちょっと工夫必要かもしれませんけれども、ここは書き込んでおいていいと思います。

○吉野英岐部会長　ありがとうございます。
　これ改善しないですかね、なかなか。

○谷藤邦基委員　要因としてはちょっと見当たらないです。内陸は下がっていますけれども、むしろ内陸が沿岸に追随して下がっていく、因果関係はないにしても、そんな感じにも見えますがね。

○吉野英岐部会長　何か上がる要素というのはあるのですかね、今後。

○谷藤邦基委員　経済的な意味でのイベントということだとあまりないですし、やっぱり物価高というのは、今消費者物価が高くなっていますけれども、もともと企業物価だけ、昔卸売物価と言っていたやつ、あの数値はもうかなり前から高くなっているので、企業物価指数が高くなっているにもかかわらず消費者物価指数がずっと低いままだったというのは、その差額というのは企業がいわゆる企業努力で吸収していたと考えられるのです。ということは、企業のほうにもそんなに今余裕はないはずなので、これから競争が激しくなっていく中で、むしろ雇用は減らす方向に走り始める可能性があるという懸念をします、私であれば。
　私は、物価高は問題だと思っているから、金利を上げるべきだと思っていますけれども、金利を上げたら上げたで、本当に通常は景気にはマイナス要因なので、それやこれやを見ていくと、これからしばらく冬の時代、厳しい時代になるという前提で多分企業経営者であれば対策を考え始める、余計雇用にはプラスにはならない、そんな悪いスパイラルに入らないことを祈っていますけれどもね。ちょっとこれは余計な話です。

○吉野英岐部会長　ここは総じて複雑なところではないので、これでいいのではないかなということと、せっかく表を足すわけですから、それについての言及を入れていったほうがいいかなという点ぐらいですかね、今回はそうすれば、出すとすればですね。

○谷藤邦基委員　はい。

○吉野英岐部会長　では、これでいいでしょうか。

では、次の１―５、ちょっと関連しますけれども、所得、収入でお願いします。

○松舘政策企画課特命課長　続いて、資料１―５、必要な収入や所得のところとなります。

１ページ目から３ページ目まで、こちらが年次レポートの形式で整理したものとなります。①分野別実感の概況というところで、アとして分野別実感の推移ですけれども、実感平均値は 2.53 点で、基準年調査よりも 0.11 点低下しているということを記載しております。

イの属性別の状況については、第１回の資料６でお示しした一元配置分散分析の結果を記載しているものです。

そして、表の７で有意な変化のあった属性を整理しているところでございます。

②分野別実感が低下した要因についてというところで４点記載をしております。１点目としまして、低下幅が大きい属性を記載しております。

２点目としまして、補足調査によって分野別実感の回答理由と関連が強い要因で選択された上位の３項目を記載しております。

３点目に、実感が上昇した方あるいは横ばい、上昇の方と比較した場合のところで家族の支出額で差があることを記載しております。

４点目としまして、以上を踏まえた要因ということで３点記載をしているということになります。こちらも広域振興圏別で見ますと、沿岸広域振興圏、低下幅が大きいですので、そういった分析を記載する必要があるかどうかというところで御意見をまた伺えればと思っております。

それから、③の一貫して高値または低値のところでございますけれども、こちらについては低値で推移している属性が多数ありますので、そちらについて記載をしているという形になります。

続いて、４ページ目、こちらは委員の皆様からの御意見となります。

それから、５ページ目、６ページ目、７ページ目、こちらはこれまでの分野と同様に補足調査の結果について添付しているものとなります。

それから、８ページ目は補足調査の理由別の分析の中で、こちらは勤労属性に限るということで仕事をしている方に限って集計をしたものになります。

それから、10 ページのほうですけれども、こちらは仕事をされていない方に限って集計をしたものとなります。こちらは、結果的に仕事をしているしていないにかかわらず、実感が低下した人の回答というのは同じとなっていたという結果になっております。

以上がこちらで御準備した資料となります。御審議よろしくお願いいたします。

○吉野英岐部会長　ここも先ほどと関連していますけれども、経済面ですかね。20 代で多いとか、下げ幅が大きいですよね。子どもが１人なのに結構下がったとか、沿岸は下がると。またこれ次も 0.3 とか下がったら、１になってしまうことはないですか、1.9 とか。

今まで１なんてないのですよね、平均値で。１.何とかというのは。ほとんど２と１しかつかない。３、２、１でついて、１のほうが上回れば、２より下がるけれども、４はつかないみたいなくらいちょっと下げ幅大きくて、このとおり下がっていくと、本当に１になるともう必要な収入、所得が実感としては全然足りないという意識が多いとなりますね。

だから、そもそも十分なお金がないと言われれば、それはそのとおりで、原因というよりも、こうだから確かに感じられないのだから、それが、ではどうして十分に必要な所得や収入が得られないのかと。仕事ですか、やっぱり仕事がない、あるいは給料が安い。さっきのやりがいだと、将来の不安とか今後のことも含めてちょっと先々心配とあるけれども、こっちは今の現実の話です。

どうぞ。

○谷藤邦基委員　仕事がないというのはないでしょうね。ただ、有効求人倍率でそれ説明つくかというと、それはまたちょっと違うかもしれないので、もうちょっと具体的に仕事がない状況を示せるのであればという気はしますけれども、何かあるのかな。

あとは、多分給料も水準が低いでしょうね。ただ、それも客観的に出せるデータがあればなのですけれども。だから、そういうものがあると、沿岸を特出しして書いてもいいのかなと思うけれども、ないのであると、あとは見てのとおりですと言うしかないので、だから具体的に客観的に出せるものが何かあるかということですよね、もし書くとすれば。ないのであれば、取りあえずは見てのとおりですと言うしかない。

○吉野英岐部会長　参考値だと、市町村別の１人当たりの所得というのは出せるのですけれども。

○谷藤邦基委員　あれは、でも懐に入っている話と違う。

○吉野英岐部会長　そうなのですよね。

○谷藤邦基委員　地域にある付加価値を１人当たりで割ったような、そんな話なので、だから意外といざやろうと思うとこれ面倒くさいのです。例えば県レベルでも給与所得者の収入どれぐらいかというのは多分つかめないと思うのです。全国のデータは国税庁から出ていますけれども、あれそんなに地域的に線が引かれてないのです。意外とこれは難しいところです。感覚的には分かるのだけれども、では何か証拠あるのと言われると、はて？という。

○吉野英岐部会長　最低賃金も県ですものね。県単位だから、沿岸だけ最低賃金低いとかと、そんなことはない。

○谷藤邦基委員　なので、ここはこれ以上実は書けないのかななんて思ったりもしながら見ているところではあります。

ただ、さっきの話の延長で、ちょっと私が心配していること言わせていただくと、今景

気がいいのか悪いのかというと、多分あんまりよくはないと思うのですけれども、これからよくなると思っている人も結構いたりはして、とにかくコロナが収まったと言っていいかどうかはともかく、５類移行したことで観光客も増えてきたし、夜の飲食店も徐々にもち直してきたというのはいいのですけれども、あくまでも経験則なのですが、景気がよくなるときほど実は企業倒産が増えるという経験則があるのですよね。

というのは、今まで苦しい中で何とか耐えてきたような会社が、さあ、これからだというので、売上げの増加に備えて何か始めると、支出が先行、経費が先行してしまうので、その負担に耐えかねて、回収できる前に破綻してしまうというケース結構あるのです。だから、これからちょっと心配しなければいけないのはそういうところかなと思っています。だから、今ここにいらっしゃる方々に言っても実はちょっとしようがないかもしれないですけれども、商工労働部でもいればだけれども。

いずれ経験則ですけれども、景気よくなるときは逆に企業倒産が増えますので、そこ乗り切って生き残ったところがドーンと伸びていくという、それが次のステージになるのです。だから、今実は非常に難しい局面です、金融でも一般の事業会社でも。

○吉野英岐部会長　和川委員は何か感想ありますか。

○和川央委員　沿岸につきましては、私も谷藤委員と同じように、これ以上取り得る分析あるいはデータがないという印象です。特に懐に入る所得データというのは実は県レベルでも取れるものはほとんどなくて、さらにそれを地域レベルでというのは存在しない状態ですし、先ほどお話のあった市町村民所得も２年後、３年後しか結果が出てこないし、それもあくまでもＧＤＰとしての所得ということも考えると、ここは淡々と事実を紹介するのでよろしいかなと私も思います。

○吉野英岐部会長　分かりました。

子どものところも下がっていて、子どものところのずっと流れを見ると、実は何か普通子どもが多いと大変なのではないかなという気はするのですけれども、それはこれですね、５ページ、補足調査のほうだけでもいいのかな。平成 31 からあるのですけれども、子ども４人以上というのが実感平均値が下がってほしいのに、子どもが多い人ほど必要な所得や収入を得られているというのはどういうことなのですかね。子どもが稼ぐ……

○和川央委員　サンプルが 17 しかありませんので、これをそのまま平均値として見るのはちょっと危険かなと……

○吉野英岐部会長　上、下があるかもしれない。

○和川央委員　はい。

○吉野英岐部会長　でも、高いよね。

○和川央委員　そうですね。

○谷藤邦基委員　だから、子どもは多いからではなくて、お金が十分あるから子どもをつくって育てようという判断になっている可能性もあります。

○吉野英岐部会長　なるほど。

○谷藤邦基委員　少なくともポジティブに効くかどうかは別にして、ネガティブには確実に効いていますからね。子どももう一人欲しいのだけれども、お金がちょっとめどがつかないよねと諦める、そういうネガティブなのは間違いなくあるので、その裏返しが常に正しいとは言えないにしても、ポジティブな可能性として効いている可能性がある。

○吉野英岐部会長　実は子どもが多い層は、可処分所得層で見ると、いいところにいるのかもしれないということでしょうかね。

○谷藤邦基委員　あるいはおじいちゃん、おばあちゃんの支援が期待できるとかですね。あと、いずれにしてもお金に関してはあまり気にしなくても大丈夫な層である可能性は高い。

○吉野英岐部会長　大昔にいた貧乏人の子だくさんというのはうそなのですね。

○谷藤邦基委員　うそとは言いませんけれども……

○吉野英岐部会長　今では当てはまりにくい。

○谷藤邦基委員　娯楽も多様化もしている中ではという話はちょっと微妙かな。

○吉野英岐部会長　はい。

○谷藤邦基委員　いずれそういうお金の問題が結果ではなくて、原因として作用している可能性はあるかなと思います。

○吉野英岐部会長　そうか。逆に子どもが１人というところが低いのは、もう１人で精いっぱいみたいな。
　いろんな支援もなく、所得もちょっと少ないぐらいだと、もう本当に１人育ててもう次なしと。

○谷藤邦基委員　だから、その類推でいくと、子どもがいないというのは、欲しいのだけれども持てないという可能性もありますよね。

○吉野英岐部会長　ここは低いのですよね。というかかなり低いのです、常に。128 もあるのに、子どもがいなかったらお金かからないではないかというのは違うのだよね。

○谷藤邦基委員　お金の問題が原因か結果かとなったときに、原因として作用している可能性のほうが大きいのではないかということなのです。

○吉野英岐部会長　むしろそっちのほうが自然だろうと。そもそも論、資金や様々なサポートが得にくい状況であれば、子どもの数というのはやっぱり増えづらいのではないかと、そういうところにやっぱり実感の低い方々がどうしても集まっているカテゴリーの平均値下がるということは、子どもたくさんいる人に例えば３人目生んだら 100 万とかないですか、今そういう政策。どこかの自治体。

だからどこかの自治体は、３人目、４人目になると、どんどんと、それから保育料も３人目今まですごくかかったのだけれども、３人でももう無料とか、結構多産の家族に対しては厚くなっているような気がするのです。だから、たくさんいたって大丈夫ですよみたいな、１人で諦めるなんてしないでくださいねみたいことは言っているけれども、そもそももうゼロ人か１人の人たちから見れば、そんなこと言われたってというか、今本当に２人とかとてもとてもというのを解消しないと、もっと下がりそうな気がするな。

特に家族サイズ小さくなって、支援が得られない。子ども４人いるというのは、もしかしたらおじいちゃん、おばあちゃんも４人いるとか、みんな４人いますけれども、当てになるおじいちゃん、おばあちゃんが４人いるからこそ子どもさんも安心して生み育てられるというのは、まあ予測としては立つ。ちょっとなかなか推測だから言い切れないけれども。子どもが少ないところに実感が低い人たちがいるのは考えなければいけない。

はい、どうぞ。

○和川央委員　１点だけ。子どもの数というのは現役の子どもの数ではなくて、成人した子どももいる可能性もありますので、例えば４人以上というのはもう 80 ぐらいのおじいちゃん、おばあちゃんで、子だくさんの時代で、今もう年金暮らしでという可能性もゼロではないということは念頭に入れておいたほうがいいかなとは思います。

○吉野英岐部会長　そうですね。３人だとうちの大学生もいっぱいいます。

○和川央委員　確かに。

○吉野英岐部会長　普通にいます、３人は。確かに４人となると、今の現役世代の人たちは減るかもしれないけれども、３人は珍しいねとあまり言えないのです、よくいるので。不思議と。不思議というか、それ当たり前ですみたいな感じで。

では、ちょっとここはなかなか経済データがないので、あんまり深くもう一つの何かの資料からとは言えませんけれども、こういった状況であるということで彼らが訴えているのは、物価高、所得不十分とか家族の支出額が多いこと。そうか、「家族の支出額が多いこと」と２ページに書いてあるけれども、こういう文言で書いてあるのですものね、もとも

とが。何かこう書くと、浪費している家族が１人いるからみたいに、うちの妻が何でも買ってきてしまうからとかと、そう見えないわけでもないけれども、家族というか、世帯支出がどうしてもかさむという意味でしょうね。生活必要経費だから、電気代とか、そういう意味、ガソリン代とか。

○和川央委員　物価高がこっちに来ると、しっくりくると思うのですけれどもね。

○吉野英岐部会長　ああ。

○和川央委員　物価高が収入のほうに入っていますものね。

○吉野英岐部会長　はい。４人いたら、家族の支出増えるでしょうとは思う。食べるでしょう、みんなと思うのだけれども、そういう話ではないのだよね、きっとこれ。でも、こう書いてあるのならしようがないので、このとおり書くしかないのですけれども。

　では、基本的なお金の量でほぼほぼ説明がつくということですね。分かりました。本当１になったらどうしましょうね。私がどうしようと言えないですけれども、ちょっとこの部分本当にこのペースで下がって、これから物価高が収まらないですよね、ここ１年。まだまだ上げると。

○谷藤邦基委員　上がりそうですね。

○吉野英岐部会長　言っていましたよね。それで、では給料がその分上がるのかと言われたら。

○谷藤邦基委員　まあ、上がらないですね。

○吉野英岐部会長　谷藤先生に聞いてもしようがないけれども。そんなに上がらないとなれば、状況が好転するのはもうちょっと時間かかると。

○谷藤邦基委員　そこまで議論するのがここの役目ではないと思いますが、でもよくなるめどはないですよね。

○吉野英岐部会長　そうなのですよ。

○谷藤邦基委員　いや、さっき言った企業物価指数が先行して上がっていっている、消費者物価指数が後追いで上がっているその差額、ギャップというのは企業が吸収してきたわけで､それを吸収し切れなくなって今消費者物価が上がり始めているという状況ですから。ということは、そこから給料に回す余裕があるかと言えばないですよ。今給料上げていると話題になっているような会社は、状況にかかわらず上げる力は前からあったのですよ、労働者に還元していなかっただけの話。

○吉野英岐部会長　なるほどね。

○谷藤邦基委員　だから、今から何とか上げろと言われても、もともと上げる余力のないところは一層苦しいですよ。そう思えば、給料は上がらないという前提で考えていないといけないでしょうね。上がってほしいとは思うし、給料が上がらないと年金も増えない仕組みなので、私らとしてはぜひ上げてほしいとは思うけれども、なかなか難しいだろうなと。

○吉野英岐部会長　では、使うなということですか。

○谷藤邦基委員　使うなというのも、それも必要なものは支出しなければならないですしね。だから、難しいのは、そうやって節約始めると、スパイラル的に経済が小さく縮んでしまうので。

○吉野英岐部会長　縮小していく。

○谷藤邦基委員　ええ。よく無駄な経費という言い方しますけれども、あれはあくまでも金を出す側の論理であって、マクロ経済的に見たら無駄な経費というのはないのです。支払われたお金はどういう名目であれ、受け取った側にとっては収入であったり売上げであったりするので、マクロ経済で見たら無駄な支出というのはない。

ところが、マクロ経済のことを考えて家計を運営している人は普通いないので、そこが困ったところなのです。だから、実は経済政策の気分に訴えかける政策というのは本当は必要なのです。

○吉野英岐部会長　景気と言うぐらいですからね。

○谷藤邦基委員　そうそう。まさに私らも幸福感を分析しているわけですけれども、これから景気がよくなると確信させるぐらいの政治家が出てくれば違うのでしょうけれども。これは余計なことですけど。

○吉野英岐部会長　書かなければいい。

分かりました。では、ちょっとここはいろいろ要因はあると思いますけれども、ちょっと分析し切れないところなので、大事なところとは思いますけれども、このぐらいでいいのではないかという話でした。

では、次行きますか。１―６で歴史・文化お願いします。

○松舘政策企画課特命課長　続いて資料１―６となります。歴史・文化への誇りとなります。

１ページ目、こちらは年次レポートの形式で整理したものとなります。

①分野別実感の概況、ア、分野別実感の推移といたしまして、実感平均値が 3.23 点、基準年の調査から 0.06 点低下していることを記載しております。

イの部分の属性別の状況については、第１回目の資料６でお示ししました一元配置分散分析の結果を記載しております。

そして、表の９で有意な変動のあった属性を整理しております。

②分野別実感が低下した要因といたしまして、４点記載をしております。１点目には低下幅が大きい属性について記載をしております。

２点目には、補足調査による分野別実感の回答理由と関連が強い要因で選択された上位３位の項目を記載しております。

３点目には、実感が上昇した人と低下した方の回答理由と関連が強い要因を比較した場合に、誇りを感じる歴史や文化が見当たらない、あるいはその地域で過ごした年数、こういったところで差が出ているということを記載しております。

４点目で、以上を踏まえまして要因として推測される３項目を記載しております。

それから、③の一貫して低値、高値というところはこの分野ではございませんでした。

２ページ目は、委員の皆様の御意見、それから３ページ目、４ページ目、５ページ目は、これまでの分野と同様に補足調査の結果を添付しているものとなります。

以上がこちらで御準備した資料となります。御審議よろしくお願いいたします。

○吉野英岐部会長　ここも前より低下しているところではあります。補足調査からの要因分析は、ここに書いてあるとおりということですね。

何で下がるかよく分からないのですよね。関心が無い……ここも非該当みたいな答え多いのでしたっけ、ゼロがつく「わからない」というやつでしたっけ。

○松舘政策企画課特命課長　こちらは、第１回の資料の参考資料３の最後のほうですけれども、問３―１の⑪、「地域の歴史や文化に誇りを感じますか」の集計表があるのですけれども、「わからない」が 245 人、「不明」が 82 となっています。合計で 300 人ちょっと。

○吉野英岐部会長　まあ、そこそこいるけれども、そんなに多数を占めるというわけでもないということですかね。300 ちょっと外してやっているということですよね。

結構高齢者でも「わからない」と……高齢者でもというのは失礼ですけれども、「わからない」は結構数あるのですね、111 とか、70 歳以上で。

でも、要因分析のほうは興味がないを入れているから、「興味がない」と「わからない」というのは意味が違うのか。「感じない」というのは、興味自体はあるのだけれども、感じられないと。「わからない」というのは、そもそも興味がないという意味に何か近いかもしれないですけれども。

年を取るほど感じるというものではないということですよね。深みが出てくるとか、そんなことで。

どうぞ。

○和川央委員　これ前回もお話ししたので繰り返しになるのでけれども、やっぱり今回見

ても 70 歳以上、60 歳以上の無職、そして 20 年以上いる人は低下していて、低下した理由は「見当たらない」と。見当たらないのだとすれば、ずっと「見当たらない」はずなので、今年になって急に見当たらないというわけはないよなというのがずっと引っかかっています。ただやっぱりどんな資料を見ても、その辺りが解明できるようなデータがそれこそ見当たらないというところで、ここについては、先ほどとは性質が違うのですが、手のつけようもないので、このままでもいいのかなと感じています。

○吉野英岐部会長　若い世代は有意な差にはないですよね、70 代以上だけ出てくるということね。

○松舘政策企画課特命課長　そうですね。資料が行ったり来たりで。第１回の資料５―２の 12 ページ、こちらが地域の歴史や文化に誇りを感じますかの集計表です。

○吉野英岐部会長　そうそう、今それ見ているのですけれども、若い人下がってはいるけれども、0.27 ポイント下がってはいるけれども、有意な差とは言い切れないということですよね。

○松舘政策企画課特命課長　そうですね。0.05 なので、ぎりぎり有意にならなかったというところですね。

○吉野英岐部会長　ああ、そうか。でも、年代別の中では、一番ポイント低いのですよね。

○松舘政策企画課特命課長　そうですね、20 代はそうなります。

○吉野英岐部会長　ほかの年代別に比べても、実感できる割合が低い。もともと低いわけでもない。もともとはそんなに低いわけではなかったのですよね。

○和川央委員　ああ、確かに。

○吉野英岐部会長　0.34 あったから、そこそこほかの年代に比べてもそんなに遜色ないぐらいの数字はあったみたいですね、基準年は。でも、令和５年だけ見ると、要するに同じ 20 代の比較では有意な差はぎりぎりないのだけれども、年齢の幅の中で見ると、むしろ一番下に落ちてしまっているみたいな状況で、ちょっと有意な差ではないから書きにくいけれども。書きにくいけれども、若い人たちに歴史や文化を誇りに感じるということがあまり見られなくなってきたとなると、何かあんまりよくないねと。
　山田委員、どうぞ。

○山田佳奈委員　前にもひょっとすると御指摘あったかなと思うのですけれども、１つとしては、少なくてもこの二、三年はやっぱりなかなか行事ができなかったり、それらに接する機会がなかったという、それがどうしても効いてきたところもあるように思わざるを

得ないといいましょうか。やっぱり３年やりにくい状況が続くと、接する機会もそれはなかなか感じにくいかなという気がしますし、でも、この間、久しぶりにチャグチャグ馬コがフルでといいますか、あって、随分にぎわっていましたので、ひょっとすると今年……

○吉野英岐部会長　が一番下で。

○山田佳奈委員　ええ。

○吉野英岐部会長　令和６になって回復するかも。

○山田佳奈委員　ひょっとすると皆さん復活で、これ希望的観測ということになりますけれども、少なくとも機会は増えるのではないかなと期待はしています。

○吉野英岐部会長　よくある甘めの予測というやつね。入場者数とか来年は増えるでしょうという。みんな戻ってきているからだけれども、ちょっと今年だけではなかなか判断しづらいので、来年確かにいろんなイベントが戻っているという状況で、来年の１月で調査して、なおかつ下がったら、やっぱりこれは構造的な要因だろうなと。

しかし、来年若い人も含めてプラマイゼロか増加になっていれば、コロナの影響がなくなってきたということで自然と歴史や文化に触れる機会が増えて、それは誇りという実感につながる。１度壊れたものは駄目だよとか、分からないですけれどもね。若い人が下がっているというのは、ちょっと私は心配ですけれども。サンプル数小さいから、ほかに比べると。特にまだ言い切れないけれどもね。

あとはいいですかね。だって、そもそも歴史や文化は総量が減ったというのは、さっきの話ね、和川さん言っていたけれども、急にわけ分からなくなったということはないわけですよね。みんな燃えてしまったとかないですものね。だから、多分対象物としては残っているけれども、それに接する機会や興味を持つ場が落ちている可能性はある。そもそも見当たらないと書かれてしまうと、ちょっとつらいね。

○山田佳奈委員　あと、では続けていいですか。

○吉野英岐部会長　はい。

○山田佳奈委員　これは多分岩手に限らないのではないかと思うのですけれども、長く住む､先ほどおっしゃったように 20 年以上例えばお住まいの方でしたか､長く住んでいると、なかなか自分が住んでいるところのいいところといいますか、というのがなかなか発見しにくいといいますか、あと当たり前になってしまうというようなところというのは……

○吉野英岐部会長　そっちなのかな。だんだん味わいが出てくるようなものだと思うけれども、そうでもないということですか。長く住んでいる皆さん、どうですか。

○和川央委員　慣れて感じなくなるというのは、幸福についてもよく言われます。それは僕もあるのだろうなと思うのです。実感が低い理由がそれなのは十分に理解できるのですが、下がった理由が「見当たらない」、今年その低下する節目が来たということが気になるところです。

変化を説明するときに、「見当たらない」というのがどういうことが起きているのかがちょっと分かりづらいなと。

○吉野英岐部会長　そうだよね。横ばいだったらまだね、いつも感じられないので横ばい、特に「感じる」とか「感じない」ではない、横ならいいけれども、下がった理由が「見当たらない」というのが、感じられなくなったというのは、鈍感になったということなのか、ちょっと何とも言えないですけれども、総量自体は下がっていない気もするのですよね、歴史、文化。

都会みたいにこういうのがない場合は、どんどん新しいアミューズメントパークだとか造って、今度はハリー・ポッターの館というか、またいいのできたなとか、そういう形で更新していく環境をつくっているのだけれども、岩手の場合そういった大型のテーマパークとかじゃんじゃん更新する県ではないので、そもそもあるものに対しての価値をもう一回皆さんで再認識するとか、あるいはそれを実感するというような新規、御新規ではなくて、既存のものに対する働きかけや受け取り方というものがやっぱり絶えず更新されないと、感じられなくなったというのはちょっとどうなのでしょうかね。

ちょっと深く分析できないので、ここはこのぐらいにしておきますか。「そもそも大事にしようという気持ちが人々にない」と書いてしまうと、このとおりなのですけれども、怖いなと。

どうぞ。

○谷藤邦基委員　ここもこの後もし補足調査の使い方を検討するのであれば、回答理由のところは工夫必要だなと思うのです。和川さんも何回も指摘されているけれども、今そう判断した根拠を尋ねているのだけれども、だから前回あなたはどういう評価して、今回どういう評価して、なぜそう変わったのですかという理由ではないのですよね。

だから、ここ県民意識調査のほうは回答者そもそも違うから、数字変わっても、数字自体は怪しむに足りないのだけれども、同じ人たちが回答していて、なぜこのように悪化するのだろうというのは非常に分からないですよね。

ただ、回答者も多分前回どう回答したか分かっていないというか覚えていない可能性は非常に高いので、だからいずれにしても逆に調査自体の工夫が必要なのかなと思うのです。

だから、状態の説明というか、静的な説明にはなるけれども、動的な説明要因ではないのですよね。

○吉野英岐部会長　そうですね、確かに。

○谷藤邦基委員　だから、そもそも回答者も自分の評価が変わったという認識があるかどうかも分からないし、だからちょっとここは次に工夫してやらないと、いつまでも同じ問

題が生じるのです。

○吉野英岐部会長　そうですね。では、ちょっと補足調査の項目、選択肢のところに……

○谷藤邦基委員　特に回答理由の設定の仕方、技術的にはそうなのだけれども、そこが難しいとなれば、そもそも全然別の方法を考えるしかないと思います。

○吉野英岐部会長　分かりました。変動しないものに対して意識が変動するというのもね。所得とかやりがいとかでは変動する可能性が高いので、それは上がった、下がったは出るけれども、誇りとか歴史、文化というのは変動しづらいですよね、普通は。

○谷藤邦基委員　だから、我々の暗黙の期待としては、上昇することはあっても下がることはないだろうなと、同じ人に聞いている限りはですね。よほど何か特殊な事情がない限りは、上がることはあっても下がることはないんじゃないのという前提で考えているわけです。そう思ったときに下がった、その理由はこれです、合わないよね。だから、その問題は、いつまでも残るのです。だから、ちょっとこれ調査の仕方自体を工夫しなければいけないと思う。

○吉野英岐部会長　では、レポートの書き方というより、ちょっと来年の調査に向けての課題で別整理しておいて、それからそれをまた議論しましょう。

　では、ここはこのぐらいしかちょっと書きようがないので、これを中心であとやりましょう。

　ここまでが落ちたところでしたっけね。次は上昇したところ、２項目ですか。

○松舘政策企画課特命課長　はい。

○吉野英岐部会長　では、心身の健康から行きますか。

○松舘政策企画課特命課長　今までのところが低下した分野となりまして、これから２つが上昇した分野となります。

　資料１―７、心身の健康です。１ページ、それから２ページが年次レポートの形式で整理したものとなります。①分野別実感の概況のア、分野別実感の推移といたしまして、実感平均値は 3.18 点、基準年よりも 0.17 点上昇していることを記載しております。

　イの属性別の状況といたしまして、第１回の資料６でお示ししました一元配置分散分析の結果を記載しております。

　それから、表 10 といたしまして、有意の変化があった属性を整理しているということになります。

　②分野別実感が上昇した要因といたしまして、４点記載をしております。１点目には、上昇幅が大きい属性を記載しております。

　２点目には、補足調査による分野別実感の回答理由と関連が強い要因として選択された

上位３項目を記載しております。こちら補足調査のほうでは、からだの健康とこころの健康と出ておりますので、それぞれ記載しておりまして、こころのほうは同率のものもありましたので、５項目という形になります。

続いて、３点目といたしまして、補足調査において実感が低下した方、上昇した方と回答理由と関連が強い要因を比較した場合に、からだの健康については食事の制限の有無、こころの健康については充実した余暇の有無と相談相手の有無、これらで差があることを記載しております。

４点目には、以上を踏まえまして要因として推測されるからだの健康については３項目、こころの健康については５項目を記載しております。

③の一貫して低値、高値というのはなかったというところになります。

続いて、３ページは、こちらは委員の先生の御意見、それから４ページから９ページまでが補足調査のこれまでの分野でも同様に出している資料ということになります。こころとからだと補足調査で２つに分けている関係で、幾つか資料が２つあるいは３つになっているものがございます。

以上がこちらで御準備した資料となります。御審議よろしくお願いします。

○吉野英岐部会長　ありがとうございました。

ここは上がっているほうなので、いいほうですね。しかも幅広い属性で上がっているので、特定のどこかが足引っ張ったり、すごく伸びているというわけでもなく、全般的に上がっている。しかも基準年との比較だから、去年のコロナと比較しているわけでないので、平時と比較しても高くなっている。なかなかいい話ではあるのですけれどもね。その理由が時間配分が良かったこと、健康診断の結果が良かったことというのは結果だよね、健康診断の結果がいいと実感できるというのは確かにそうだけれども、そもそも健康診断の結果がよくなるように、では何をしていたのかということですよね。自然によくなるのだったら、何もしなくていいではないかということで、自然にはよくならないから、何かちゃんと健康に留意していた、食事の制限がないことというのはストレスがないということ、好きなものを食べられるということが実感上昇の理由、前は食べられなかったといったことかもしれない。そういう人が多かったということ。それは何でも好きに食べられるほうがいいにはいいですよね、気分的にも。

こころの健康がやっぱり仕事の時間が良かったこと、良くなったことに近いのかな。余暇が充実していたこと、ストレスが少ない、相談相手がいる、ここはいっぱいあるということかな、要因が上位で並んでしまうみたいな。

○松舘政策企画課特命課長　はい。

○吉野英岐部会長　複数回答だから、あれこれ出てくると。

○松舘政策企画課特命課長　そうですね。

○吉野英岐部会長　分かりました。

どうぞ。

○和川央委員　細かいところなのですが、「以上を踏まえ」のゴシックの部分の最後、「相談相手がいること」、（連れ添いなど）と、これどういう意味なのですか。

○松舘政策企画課特命課長　自由記載の方に連れ添い……

○吉野英岐部会長　自由記載か。

○松舘政策企画課特命課長　はい、そうなのです。補足調査は、第１回の資料の資料４―２のところの自由記載のところで、「相談相手がいる」と選択した方が「連れ添い」というふうに……

○吉野英岐部会長　その人が「家族、連れ添い」。

○松舘政策企画課特命課長　はい。

○吉野英岐部会長　では、家族ではないということですか。

○松舘政策企画課特命課長　「家族、」というか、「連れ添いがいる」としか書いていなかったと思います。

○吉野英岐部会長　それは家族のことなのではないですか。

○谷藤邦基委員　普通は、だから配偶者という意味。

○吉野英岐部会長　はい。

○和川央委員　連れ合いというか、なるほど、なるほど。

○吉野英岐部会長　ペットとかでなくて。ペットも大事だと思うけれども。私は飼っていないけれども、ペットに相談している人いませんか。

誰にも言う人いないよりはペットいたほうが、「そうだよね、ミーちゃん」とか言って、「ニャー」とか言ってくれれば、いやあ、相談してよかったと。多少は気分よくなるのではないの。けんかするわけではないですものね、ペットと。やっぱりそういう親しみの持てる生き物が、連れ添いだって怒ってばかりではちょっとかえってストレスだから、相談というか、話しかける相手がいるということですか。

ひとり暮らしだとちょっと低いの、ここ。そんなことないの。分からないか。

独り暮らしでも十分大丈夫。それはどこだっけ。

○松舘政策企画課特命課長　第１回の資料５―２の２ページになります。こちらの県民意識調査の方は、こころやからだということで一括で聞いていますけれども。

○吉野英岐部会長　でも、やや低いぐらいですか。

○松舘政策企画課特命課長　そうですね。

○吉野英岐部会長　その他というのはどういうのかよく分からないけれども、ひとり暮らしだけ見ると、やっぱりちょっと低め、ちょっとだね。
　どうぞ。

○山田佳奈委員　資料４―２の自由記載のところなのですよね。４ページになるのですかね。ここで何でも相談できる話し相手がいることという方もいらっしゃるし、横ばいの方も何かしらあったとき踏み込んだ相談できる相手のことを書いていらっしゃるので、家族、あと夫への相談でしたか、ありますが、家族や、入れるとすると相談できる相手がいるという家族以外でも相談できる相手が想定されていると思うので、両方書いてもいいのかなという……

○吉野英岐部会長　ああ、相談できるという家族。

○山田佳奈委員　ええ、家族や家族などでもいいのかもしれませんが、どう書くかあれですけれども、相談相手がいることというのは、これできていますものね。
　できれば、何となくここでの自由記載のニュアンスですと、家族以外の方も含んでいるのかなという感じがするので、これというのはとても重要な点かなと私は見ていました。こころの健康という意味で、家族以外でも誰かそういう人がいるということなので。すみません、結論としてはあれですけれども。

○吉野英岐部会長　「家族、連れ添い」と書いていると、両方とも家族だから、そこは「家族、相談できる相手」。

○山田佳奈委員　例えば、そうしたところでしょうか。

○吉野英岐部会長　それが家族、同居の住人でなくても別にそれはそれでいいのかなと。あまりペット出ないのかな。

○和川央委員　こだわりますね。

○吉野英岐部会長　いや、何か都会だと思うのよ、ペットは家族だから。ひとり暮らしでないからとか。生き物いるからと。ということなのですけれども、それはちょっと岩手では無理なのですね。

○和川央委員　一応今回の総合計画では家族の分野にペットも位置づけています。

○吉野英岐部会長　そうですか。それはいい。パートナーシップに入るわけ、ペットもね。

○谷藤邦基委員　今はペットではなくてコンパニオンアニマルとか、仲間ですね。

○吉野英岐部会長　そうか、そうか、飼い主とかではないと。

でも、そういうコミュニケーションが取れる存在がどこかかしらにいると、身近なところにいるということは大きな要因ではないかということをうまく書けばいいということですね。全体的に高い、高くなってきたのか。

特にあとないですか。地域別に見ると、県南の人たちは、健康を感じる実感が高くなってきたということですか。全然何でだか分からないのですけれども。何か理由があるのかもしれないけれども、それを補足するデータはないですよね。

健康診断の結果が県南の人はすごくいいのです。よく３大疾病とか言うではないですか、成人の。脳卒中とか、がんと心疾患。そこで亡くなる人が県北に多いとか、沿岸に多いとかいいますか。

ちょっと行き過ぎてしまうかもしれませんが、自殺は分かるのですよね。自殺の統計見ると、やっぱり県北に多いのですよね、確かに。そこまで行く前に、いろいろ御病気とか心身の不調というのがもしあれば、ある程度補足データで出せるけれども、ないとなると、何で県南が健康状態よくなるわけというのはちょっときちんと言うのは難しいかなと。

ありますか。はい。

○和川央委員　可能性とすれば、県南とか県央という地域に帰属するものではなくて、若い人が多いとか何かそういった別な属性がたまたまの地域偏在で起きている可能性があるかなというのが１つ。

もう一つ、沿岸・県北も下がっているわけではなくて、上がってはいるのですけれども、サンプル数の関係で多分有意にならなかった可能性もあるかなと考えれば、全体的に上がっている、あと属性が若干偏在している、これで説明できる可能性はあるかなと思うのです。

○吉野英岐部会長　全般的にはよくなっていると。有意な差は出ないけれどもと。

○和川央委員　はい、そうですね。

○吉野英岐部会長　だから、どの地域も上がっているのですものね。

○山田佳奈委員　すみません、この資料５ですと、県南は平成 31 年までは３未満だったのですが、令和２年から何か３……

○吉野英岐部会長　どんどんよくなっている。

○山田佳奈委員　ええ、どんどんよくなっていて、これは何か施策なり体制変わったということでも、すみません、参考としてお伺いします。

○吉野英岐部会長　何か健康診断受診率がすごく県南はよくなってきたとかあるのですか。コロナにめげず高いですよねと。

○山田佳奈委員　何か秘訣というかあったら、１つ何か指標になるかなと思って。

○吉野英岐部会長　県南に属する自治体さんで様々な保健対策を十分にやって、それがいろんなところで効いているとか、健康診断を受けるだけでは駄目で、受けた結果がよくないといいと言わないだろうから、ちょっと受けるだけの人が増えましたというのはあんまり直接的には言えないけれども、全部上がっている中で県南の伸びはちょっとあるよねということですよね、山田先生。

○山田佳奈委員　そうですね。31 年までと何かその後がやっぱりちょっと傾向は違うかなという。

○吉野英岐部会長　ああ、上がりぎみがぴっとなっているということですか。

○山田佳奈委員　そうですね。全体にちょっとぴっと上がっているといいますか、境のですね、何かあるのかなと。

○吉野英岐部会長　コロナにめげずですよね。

○山田佳奈委員　めげずですね。

○吉野英岐部会長　コロナにめげずなのだよね、意外と。

○山田佳奈委員　ほかはちょっとこれ上がり下がりになっています。

○吉野英岐部会長　かかっていない、かからなくて済んだ人がたくさんいるとか。
　はい、どうぞ。

○谷藤邦基委員　もしコロナがポジティブにからだの健康のほうに効いているとすると、サラリーマンの発想だと飲み会が減って、体の数値がよくなった。

○吉野英岐部会長　ワークライフバランスですか。

○谷藤邦基委員　ワークライフバランスというよりも、そもそも飲み会行けなかったではないですか、コロナのさなかのときには。

○吉野英岐部会長　ないない、飲み会が。

○谷藤邦基委員　加えて、在宅勤務とかもやれば、ストレス減ったかもしれないですよね。嫌な上司と顔合わせなくてもいいとか。

○吉野英岐部会長　通勤時間ない。

○谷藤邦基委員　ないとか、いろいろな面でストレス減った可能性はあって、ただ在宅勤務やった結果として太ったという人もいるけれども、それ以上に飲み会がなくなって、肝臓の数値改善したとか、具体的にあったかもしれないですよね。

○吉野英岐部会長　それは、でも飲んべえのお父さんたちの話ですかね。

○谷藤邦基委員　いや、だから全てにわたってとは言いません。ただ、実は令和３年、４年の調査というのは、年度で言うと前の年度になるわけですけれども、結局その頃の、特に令和３年に関してだったかな、勤労者というか常用雇用者か、属性では。そこがたしか回答者増えていたのですよね。これは、多分在宅勤務とかいろんなことで家にいる時間が長くなっていて、腰を据えて回答してみようかと思う人がそれなりに増えたのではないかと私思っているのです。県民意識調査のほうですね。

だから、その面で言うと、多分そういった人たちの影響というのは割と強く出ていて、そうすると意外と、身も蓋もない話だけれども、飲み会減ったからでないかと思って、私は直感的にそう思ったのです、正直。

だから、これ来年の調査でその辺は明らかになると思います。ここがどう変わるか。

○吉野英岐部会長　飲み会が増えたから、また健康状態悪くなる人が……

○谷藤邦基委員　これまでの分を取り返すがごとく。

○吉野英岐部会長　確かに規則正しい生活もやるようになったかもしれませんね、ここ二、三年は。夜遅くまでどこかに行ってしまうとか、無理して遠くまで旅行に行ってしまうとかということは相当減ったはずですよね。

○谷藤邦基委員　だから、これもうちょっと長い目で見てどうなるかで考えたほうがいいかもしれないです。

○吉野英岐部会長　分かりました。では、ちょっと今後の課題、楽しみで取っておきますかね。

普通コロナがあれば、健康不安が増えて、何となく不安感がというので下がるというのだったらまだ分かるけれども、ほぼ全般的に上がっているということで、必ずしもコロナによって万人が健康状態が悪くなったという、ここまではちょっと言えないですね、確かにこの数値見るとね。むしろ実感した生活の規則正しい生活や夜の飲み会というか、飲食の機会が減ったために、ワークライフバランスといえばそういうかもしれないけれども。生活ができるようになって、それがむしろ心身の健康にプラスに働いている可能性はあるくらいは書いてもいいのかなと。つまり暮らしの時間配分が良かったことというその背景ですよね、規則正しい生活を送っているという背景としてはコロナの時期に当たるものですよね。

どうぞ。

○山田佳奈委員　吉野部会長がおっしゃったように、私も同じように想像したところではあったので、実は少々驚いていたことがある反面、これは第１回の資料でしょうか、資料４の補足調査のコロナの影響というのが資料４の４ページが分かりやすいですかね。これを見ますと心身の健康、からだの健康、こころの健康というのが「良くない影響」という方がやっぱり断然多いといいますか、「どちらともいえない」という層の方も一定数はいらっしゃるのですが、やはりどちらかといえば「良くない影響を感じる」という方が半分前後いらっしゃることは、これも確かかなという気はするので、注記のようなものは必要ではないかなという気はします。

ここは、もちろんあくまでも県民意識調査の項目についての分析でありますけれども、「ただし後に述べるように新型コロナウイルスの影響については云々…」というような１文はあった方がバランスとしてはいいかなという印象はあります。

○吉野英岐部会長　分かりました。ちょっとそこは考えましょうかね。

コロナの影響というのは、直接聞くと悪いということになるのだけれども、コロナが蔓延したことによってライフスタイルが変化したことで規則正しい生活というのはコロナの影響の２次影響みたいな感じなので、そこだけ見ればよくなっているのですよね。

ただし、やっぱりコロナというのは大変厳しい病気だったので、それはちょっとおっかないので、それだけ見れば、コロナだけでいい影響あるねというのは確かに言えないでしょうね。言っていないですよ、実際に。いいというのは確かに少ない。でも、間接的な二次的な生活パターンに及ぼした結果として健康は実感できるというのは、それはまた別な話として実際起こっているかもしれない。その辺書き分けなければいけないですね、コロナが即オーケーとは言えないと。分かりました。コロナの分析は、また後ろでやるので、ちょっとそこのときにもまた話ししたいと思います。

では、次は家族関係の分野お願いします。

○松舘政策企画課特命課長　それでは、資料の１―８、家族関係、上昇分の２分野目となります。

１ページ及び２ページは、年次レポートの形式で整理したものとなります。①分野別実感の概況、ア、分野別実感の推移ということで、実感の平均値は 3.91 点、基準年の調査よ

り 0.07 点上昇していることを記載しております。

イの属性別の状況のところは、一元配置分散分析の結果を記載しているものです。

そして、表の 11 に有意な変化のあった属性を整理しております。

②分野別実感が上昇した要因といたしまして、４点記載をしております。１点目には上昇幅が大きい属性について記載をしております。

２点目には、補足調査による分野別実感の回答理由と関連が強い要因で選択された上位３項目を記載しております。

３点目には、実感が上昇した方と低下した方とで回答理由と関連が強い要因の比較した場合に、同居の有無等の５項目で差があることを記載しております。

４点目に、以上を踏まえまして要因として推測される３項目を記載しておりますが、こちらで上のほうで差があるものとして出てきた項目もありますので、これまでと倣ってこれも付け加えようかなと考えているところです。

それから、②になっていますが③ですね、一貫して高値または低値というところです。２ページ目の表の 12 のところでお示ししておりますが、夫婦のみという属性が一貫して高値ということになっております。こちらも先ほどのところで御議論があったところではありますけれども、２ページ目の最初のポツのところで令和５年の補足調査で把握している要因としましては上位３項目、会話の頻度、同居の有無、困った時に助け合えるかどうかというところ、それから令和４年までに過去２回以上実感が低い要因として推測されたもの、こちらは会話の頻度、同居、困った時に助け合えていること、家族がよい精神的影響をもたらしているというようなことで、以上のことから３つの上で言っていることで整理をしております。

３ページ目が委員の皆様の御意見、４ページから６ページは、これまでの分野と同様に補足調査のデータを整理したものとなります。

こちらで御準備した資料は以上となります。御審議よろしくお願いいたします。

○吉野英岐部会長　ありがとうございました。

最後ですけれども、家族関係というのは質問肢上は「家族と良い関係が取れている」ですね。ちょっとなかなか難しくて、家族関係実感しているというのは、それは家族だよと、具体的には良い関係が取れているということですか、これ。それ入れてもいいかなとちょっと思っていますけれども、良い関係を実感できる人が非常に高いし、なおかつ上昇しているでいいのかな。良い関係なのだから、いいですよねと。会話が頻度多い、同居、別居がうまくいっている、困った時に助け合えるという要因で一応整理すると。

どうぞ。

○和川央委員　１つは指摘なのですけれども、１ページの②番、上昇した要因の（ア）です。会話の頻度、これ多い少ないが多分設問だと思うのですけれども、ここは明らかに多いなので、少ないを取ってもいいのではないかなと。上昇したのに会話が少ないというのはないかなと思いますので、ここは会話が多いと（イ）にしてもいいのかなと思いました。

○吉野英岐部会長　（ア）のところね。

○和川央委員　そうですね。あと、ここの最後の４ポツ目の「以上を踏まえ」の中で２つ目の理由、「同居あるいは別居がうまくいっていること」というのがあるのですが、これがどこにあったかなという確認です。私は第１回の資料７―２の 101 ページ見ているのですけれども、家族が自分にもたらす精神的な影響というのは確認できたのですが、「同居（あるいは別居）がうまくいっていること」というのは今確認できなくて、どこからこの記述が出てきたのかを確認させてください。

○松舘政策企画課特命課長　すみません。ちょっとお待ちください。

○吉野英岐部会長　補足調査の調査表の調査項目では同居の有無だけなのですよね。１つ目の選択肢として挙がっている。会話の頻度（多い・少ない）はこのとおり選択肢の中に多い、少ないが入ってしまっている。確かにうまくいっているとまでは書いていないです。
　はい。

○和川央委員　補足調査の 101 ページの３段表を見ると、一番高いのは会話の頻度で、家族が自分にもたらす精神的影響が２番目に高くて、同居の有無というのは実はすごく低いのです。というのを踏まえて、ここはどこから出てきたかなと……

○吉野英岐部会長　何で２つ目として挙がっているのかな。

○松舘政策企画課特命課長　ここは実感が上昇した分野なので、見ている方が右側の方なので……

○吉野英岐部会長　実感が上昇している人の要因。

○松舘政策企画課特命課長　そうですね。ですので、選択肢の２番、１番、10 番の上位３位になるという形になります。

○和川央委員　失礼しました。すみません、いつも低い方しか見ていなかったので、そっちを調べていました。すみません。申し訳ないです。
　そうすると、同居の有無なのだけれども、ここがうまくいっている……あっ、ここ何か言い換えたのでしたっけか、前回。そうでしたっけか。

○松舘政策企画課特命課長　そうですね。ここ昨年のレポートと同じ表現で出ておりました。

○和川央委員　私の勘違いです。すみません、失礼しました。

○吉野英岐部会長　同居の有無。同居……難しいね、考えてみたら。家族といい関係が取

れている、同居だから、あるいは別居だから。

○和川央委員　別居はうまくいっていることが入るのかな、同居の部分の中で。

○吉野英岐部会長　いやあ、別居でうまくいっていますよというのはあるのではないですか。

○和川央委員　補足調査の設問は、「同居の有無」という設問なのですね。

○吉野英岐部会長　そうなのです。だから選択肢、選択肢。

○和川央委員　だから、同居がうまくいっているという言い換えはそれほど違和感のない意訳なのですけれども、そこから別居がうまくいっているという解釈が果たして適切な解釈なのかなというところですね。

○吉野英岐部会長　同居だけだったら、同居でいいのだよね。同居の有無なので、同居の無も入っているということ。

○和川央委員　無も入っているから……

○吉野英岐部会長　から別居と。

○和川央委員　別居も含んでいるというのもここに含まれるということなのですね。なるほど。

○吉野英岐部会長　同居していないがためにうまくいっているという可能性もないわけではない。現実的にはあるのではないかと。

○和川央委員　まあ、そうですね。実感としてはありますけれども。

○吉野英岐部会長　別居してうまくいくということはありますか。自分のことでなくていいですよ、周りの人を聞いてもとか。うまくいかなくなって別居したというのは、それはあるかもしれないけれども、別居しているがためによい関係ということはあり得ますか。

○山田佳奈委員　資料４―２の 11 ページ、家族関係の同居の有無のところで、この方は同居していないけれども、その月何日に何か遊びに来るのでというのを適度な距離という、多分そういう……ほかにも何人かちょっとそんな感じでいらっしゃいますね。
　実感上昇の方の中にもあります。

○吉野英岐部会長　岩手は結構３世代同居は高いのでしったけ、全国的に見ても。あんま

り聞いたことないですか。山形が高いというのは聞くけれども。

○和川央委員　高いです。

○吉野英岐部会長　岩手も高いですか。

○和川央委員　高いです。

○吉野英岐部会長　高いと、ストレス抱えて評価下がるということではないのだね。いや、私は当事者ではないから分からないですよ。当事者の方に伺いたいというか。

○和川央委員　幸福の議論をしたときに本県３世代同居は高いという話がありまして、そのときの議論で１つあったのが両者極端なケース、要は３世代同居が負のマイナスのパターンもあるし、子育てとか家計とかも含めたトータルでプラスのパターンもあると。だから、これ自体は事実としては３世代同居している人は幸福感が高いけれども、３世代同居をすることによって幸福感が高くなるかどうかは別問題だよねという議論をした記憶があります。

○吉野英岐部会長　参考値にしようと、これ目指すべき値ではないと。

○和川央委員　価値が人によって違うだろうということもあったかと思います。

○吉野英岐部会長　はい。多分全体の総合計画の中で取っている指標の中でも、要するに目標値と参考値分けていて、同居が高いからって目指すべきものではないのだけれども、一応実態としてはこういう実態だというのがありますよ。だから、同居していてもいいし、別居していてもいいということですね。場合によっては同居していることでいい面もあり得るしと、別居していてもいい面もあり得る。では、どっちなのだと言われると困ってしまうけれどもね。

　でも、高いのですね、ここは。同居と別居という項目はないのですものね。

○和川央委員　そうですね。

○吉野英岐部会長　だから、数値的な項目はないのですよね、カテゴリー的な項目は。ひとり暮らしか夫婦のみか、２世代というのは同居、２世代、３世代ということ。でも、そこは特に聞いていないということは、同居しようと別居しようと差がつかないということですか。というか、どっちにしても上昇の有意なものにはなっていない。カテゴリーとして聞いているけれども。

○松舘政策企画課特命課長　世帯構成のところは……

○吉野英岐部会長　どっちも上がっているの。
　何ページになりますか。

○松舘政策企画課特命課長　資料５―２の４ページが家族と良い関係が取れているかで、世帯構成のところは特に有意な変動にならないという結果です。

○吉野英岐部会長　ひとり、みんな高いですか。

○松舘政策企画課特命課長　ひとり暮らしと……夫婦のみというところが高いのですかね、４点台で。

○吉野英岐部会長　でも、３世代同居でそんなにがくんと下がるわけではないですよね。

○松舘政策企画課特命課長　そうですね。

○吉野英岐部会長　3.8ぐらいのポイント持っていますものね。どっちが高いでしょうね。夫婦のみというのはいろんな年齢層あるけれども、子どもが巣立てしまったとか、子どもができる前かということですかね。何で高いのだろう。家族と良い関係が取れているから、別居していても取れている。よく連絡し合っている。

○山田佳奈委員　別居しているからこそうまくいくとかですね。

○吉野英岐部会長　そういう人と、同居しているからこそうまくいくという人。

○山田佳奈委員　例えば、別居しているからこそうまくいく場合とかですね。

○吉野英岐部会長　はい、います。どっちも、どっちでもいいですけれどもと。だから、会話の頻度が多いことと同居あるいは別居がうまく、それはその居住形態でも、同居あるいは別居がうまくいっているということはどっちでもいいということですよね。要因としてはこういうこと挙げてもいいけれども、挙げたとしてもどういう居住形態であれみたいな話になってしまうのかな。工夫次第でみたいな話になってしまう。
　相談相手がいる、同居家族に相談できるというのは、これはいい、括弧の中に入ってしまっているから、別居ではうまくいっていることの何か理由はあるのですかね、括弧の中に。
　同居については、相談相手がいるので、同居してうまくいっているというのはいい点ですよねと、寂しくないとか、頼りになりますと。けれども、別居がうまくいっているというときに、何という説明するのですか。自由回答にはそういうのはないですか、顔見なくて済むとか、うるさくないとか、別居でうまくいくというのもそのぐらいしか考えられないのですけれども。
　何かありますか。はい、どうぞ。

○山田佳奈委員　別居であろう方、市内に息子家族さんが住んでいるということで、週一、二回いらっしゃったり泊まったりされたりで、困ったことは何でも相談しているというのがあるので、明確にこうだからということは難しいかもしれませんけれども、それでもあえて言えば、同居、別居にかかわらず家族に相談ができるという、そういうことですかね。

○吉野英岐部会長　そうなのです。どっちにしても相談する人が近くにいるということが非常に効くというのは、それは意味があることなのだけれども、では同居と別居で違うのかと言われても、いや、形態は確かに違うけれども、相談相手はいますよと、どっちにしたってというのだと、ちょっと理由として「同居あるいは別居がうまくいっていること（同居家族に相談できることなど）」というのは、何かちょっと何を説明しているのだかよく分からないというか、括弧の中だけなら分かるしというね。

○山田佳奈委員　そうですね。

○吉野英岐部会長　世帯別に見ても、３世代家族そんなに下がらないし、実感度合いがね。夫婦のみでは結構高いのですよね。ということは別居している可能性だってあるし、そこは高いのだから、でもそれはなぜかという理由が相談相手だったらどっちも同じではないですかと。

困ったときに助け合えるということも、これも居住形態の有無にかかわらず同居の場合でも、別居といっても近接別居なのかな、もしかしたら。近接別居の場合はこれができるのでと、別居といえども、500 キロも離れたところに住んでいるわけでなくて、ほんの車で５分、10 分のところにいるという安心感とかというのはあるけれども、でもなおかつそれでも別居は別居だということですよね。ちょっとそんなこと書き切れないけれども、何かあまり同居、別居にこだわり過ぎてしまうと、どっちも意見あるのでというので、うまく説明つかなければどっちも上がるよねと。

○山田佳奈委員　そうですね。難しいですね。

○吉野英岐部会長　どうぞ。

○谷藤邦基委員　前回もこういう書き方していたからというのはあるのですけれども、ただ資料４―２の家族関係のところの記載事項を見ると、圧倒的に同居についてポジティブな評価になっているというような印象なのです。であれば、ここは主な要因ということであれば、別居でうまくいっているケースがあるとしても、特出しして書くほどではないのではないかなという気がする。

ですから、ここは単に同居がうまくいっていることにしてしまっても、主な要因という意味では問題はないのではないですか。

○吉野英岐部会長　むしろ分かりやすいというか。

○谷藤邦基委員　そのほうが余計な心配しなくて済む。別居の場合は、ポジティブな面を否定するわけではないし、ただあえて書いてしまうと、では別居とはどういう意味なのというのは出てきてしまって、主な要因ということであれば同居だけ挙げるということでいいのではないかなと思いますけれども。

○吉野英岐部会長　みんながそうなるとは言っていないですけれどもねと。同居を挙げる人が多いということですね。

これは、どっちが答えているのですかね。お嫁さん層が答えているのかな。おばあさん層が答えているのですかね。俺はうまくいっていると思っているのだけれどもなと、旦那が答えているのかね。奥さんがそんなことないわよと答えているのか、人によって意外と違いますよね。しかも、これ個人に聞いているから、どっちも当たっているので、特定の要するに世帯主しか答えていないなんていう調査ではないので、どっちの意見も出てきているはずだと、文句の言い切れない人もここになら書いているかもしれないということですかね。いや、同居でうまくいっているのだったらなんていう話に持っていかないでくださいねというふうに、ちょっとくぎ刺さないといけない気もちょっとしますけれどもね。うまくいっている例もありますよと、いっぱいね。

あとはいいですかね。

「はい」の声

○吉野英岐部会長　今 3.91 ですか、平均値で。これは十何項目のうちの上から２番目ぐらいではなかったでしたっけ。自然を感じるの次ぐらいではないですか、多分。常々言っていて申し訳ないけれども、何でこんなに高いのだろうというか、家族と良い関係がある。私のうちが悪いとは言いませんけれども、非常に高いですね。だから、これ家族……家族というのは夫婦、親子、どっちも。

○谷藤邦基委員　どっちもではないですか。

○吉野英岐部会長　どっちも。

○和川央委員　ペットも含めておきます。

○吉野英岐部会長　ペットとうまくいっていると思いますけれども。あと、おばあちゃんとおじいちゃんと自分というか、上の世代と自分、いろんなパターンがきっとあるわけですよね。お父さんとはうまくいっているけれども、お母さんとはうまくいかないといったらどっちになるのですかね。

○和川央委員　家族をどう定義するかですね。

○吉野英岐部会長　家族とうまくいっていると、お父さん以外はうまくいっているよと、うちで言われそうなのだよな、危ないです。そういう場合は、お父さん以外でうまくいっているとなってそうな気もして、全方位でみんなと良好関係が全員が感じているというほど甘くはないような気はちょっとしていますけれども。

○谷藤邦基委員　「どちらともいえない」という選択肢もあるから。

○吉野英岐部会長　そこに行くわけね、なるほど。プラスの人、マイナスの人がいれば。家族全員がうまくいっているというのは本当にすごいではないですかね。普通反抗期とか娘に手を焼いているとか、その辺はありがちですよね。でも、お父さん自信満々に娘とうまくいっていると書くわけなのですかね。そう書きたい気持ちはある、なかなかちょっと奥が深いので、家族というのは。夫とうまくいっているか、配偶者とうまくいっているかという設問だったら絞りやすいではないですか。ああ、ちょっときついわ、ここはみたいになるけれども、そういう関係性だけでなくて、親子、３世代、さっき話したペットも含んでいるかもしれないとなると、同居人とうまくいっているということですかね。でも、別居の場合も家族に入るからね、非常に広い概念で、第１次集団というか近親者との関係が良好ぐらいですかね。

こっちは下がらないのですものね。さっき言った地域のつながりとかは下がったでしょう。下がったでしょうというか、下がりましたよね。ということは、地域のつながりというのは多分人間関係のことを指している場合も多いでしょうから、近親者ではないような地縁でつながっている人たちとの実感はむしろ下がっているのだけれども、家族の部分は下がるどころか上がっているというのが自分の守備範囲が狭くなっているのか、ちょっと何とも言えないですけれども、ちょっと関係性に区分をつけ出しているのかとか、分からないけれども、何かちょっと変化はあるのかもしれないです。

両方とも高いと、家も村もみたいな話で、どっちも良好だよと言いたいけれども、地域のほうはちょっと怪しくなってきていますから、どっちも煩わしいはずなのにねと思わないでもないですけれども、煩わしさがどんどん出てくるのは地域のほうなのかなという感じですかね。

これ両方下がっていると、最近の人間関係は難しいのだなとか言えるのですけれども、片方上がって片方下がっているというこの事実があると、やっぱりちょっと今風なのかなという気がします。

うまく補足調査から推測できないところも多いので、できる範囲で書いていくということで、これで行ってみましょうね。

子育ては、さっきやったでいいのかな。そうすると、一応は上がった、下がった、横ばいの子育ては一応やって、資料２も何とかやって終わらせましょうか。

コロナ。はい。

○松舘政策企画課特命課長　それでは、資料２となります。追加分析ということで、新型コロナウイルス感染症の各分野への影響と分野別実感の関連性の分析ということになります。

まず、２ページ目を御覧いただきたいのですけれども、グラフを載せております。岩手県の新型コロナウイルス感染症の感染状況ということで、令和２年７月以降、令和５年４月までの状況です。青い棒グラフが新規感染者数、左の軸になります。それから、赤い折れ線グラフが死亡者数、右の軸となります。

今年の県民意識調査を行いました令和５年１月、２月の頃というのは、12 月に第８波のピークを越えて、患者さんの数としては減少になってきていた頃、それから死亡者については少し遅れて報告が来ますので、死亡者の報告のピークが１月に来ていたと、そういった時期となります。

３ページ目、こちらは、第１回の部会のほうでも資料としてつけておりましたけれども、図Ａが県民意識調査における新型コロナウイルス感染症の影響に係る項目の回答状況となります。各分野ともおおむね令和５年については、令和４年調査と似たような傾向となっているのかなというふうに見ております。

続いて、４ページ目、図Ｂとなります。こちらは、県民意識調査の分野別実感の回答状況ということで、これまでデータで示してきたとおりとなります。

続いて、５ページ目です。こちらの新型コロナの影響の分析の手法について、こちらで記載をしております。今年度も昨年度と同様３つの分析を行っております。１点目、分野別実感の平均値の２時点の比較ということで、新型コロナウイルス感染症の流行前の令和２年と令和５年の実感平均値を比較しているというのが１点目です。

２点目は、新型コロナウイルス感染症の影響と分野別実感のクロス集計による分析ということで、後ほど結果の方を御説明いたします。

それから、３点目としまして、新型コロナウイルス感染症の影響別に見た分野別実感の平均値の差の検証ということで、こちらの３点の分析を行っております。

資料の方を少し飛ばしまして、それぞれの分析の結果ですけれども、まず８ページ目となります。表のＣというのがございますけれども、こちらが新型コロナウイルス感染症が流行する前の令和２年の調査と令和５年の実感平均値の差を比較したものとなります。結果としましては、令和２年と比較すると、上昇は（12）番、自然のゆたかさ１分野、それから低下といたしましては（７）番の地域社会とのつながり１分野ということで、上昇１分野、低下１分野という結果となりました。

続いて、２つ目の分析ですけれども、新型コロナウイルス感染症の影響と分野別実感のクロス集計のところになりますけれども、こちらの結果が９ページ目から 15 ページ目まで、各分野ごとにお示ししているという形になります。

例えばなのですけれども、9ページの上段の表Ｄ―１、こちらが心身の健康となります。一番左の列、こちらが新型コロナウイルス感染症の影響実感で「良い影響を感じる」と回答した方々がこちらの列になります。そして、横軸に見ますと、分野別の実感ということで「感じる」、「やや感じる」、「どちらともいえない」、「あまり感じない」、「感じない」ということで上下に並んでいるという形になります。

そうしますと、新型コロナウイルス感染症の影響実感で「良い影響を感じる」と回答した方で、分野別実感「感じる」あるいは「やや感じる」と回答した方々については、新型コロナで「良い影響を感じる」と回答した方々の中にはこの分野別実感「感じる」、「やや感じる」が最も多いという結果は各分野共通です。どの表を見ても、左上のますが左側の

列の中では一番多いというような結果となっております。

逆に、真ん中の辺りの列ですけれども、新型コロナウイルス感染症の影響実感というところで「良くない影響を感じる」という列がありますけれども、こちらは分野によって分野別実感「感じる」、「やや感じる」と答えた方が多い分野もありますし、「あまり感じない」あるいは「感じない」と回答した方が多い分野もあるといったことで、こちらのほうは少しばらけているということになります。

そして、こちらのクロス集計の分析の中では、14ページ下段の表のD―10、必要な収入や所得のところの分析となりますけれども、こちらで真ん中の辺りの列の新型コロナウイルス感染症の影響実感「良くない影響を感じる」の列で見たときに、分野別実感「あまり感じない」、「感じない」と回答している方々751 人ということで、ほかの分野に比べまして、必要な収入や所得の分野では、ここの枠に入る数が非常に多かったというような形になっております。

こちらが分野別実感と新型コロナウイルス感染症の影響実感という形になります。

それから、分析の３つ目ですけれども、資料の 16 ページ、表Ｅです。こちら新型コロナウイルス感染症の影響実感について、「どちらともいえない」あるいは「影響を感じない」と回答した方々の平均値をベースラインとしまして、新型コロナウイルス感染症の影響実感「良い影響を感じる」の実感の平均値、それから新型コロナウイルス感染症の「良くない影響を感じる」と回答した方々の分野別の実感の平均値、こちらをそれぞれ比較してみたものとなります。

そうしますと、新型コロナウイルス感染症の影響実感「どちらともいえない」プラス「影響を感じない」と回答した方々の実感の平均値はそちらの表の真ん中の列の数値のとおりになっているのですけれども、新型コロナウイルス感染症の影響実感「良い影響を感じる」と回答した方々の分野別の実感平均値は、その右隣の平均値の数となっておりまして、いずれの分野でも「どちらともいえない」プラス「影響を感じない」の平均値よりは上回っていたという結果になります。

逆に、新型コロナウイルス感染症の影響実感「良くない影響を感じる」と回答した方々の分野別実感の平均値は「どちらともいえない」プラス「影響を感じない」に比べまして、心身の健康、家族関係、子育て、住まいの快適さ、地域の安全、仕事のやりがい、必要な収入や所得、自然のゆたかさの８分野で有意に下回っているという結果になっております。

こちらの（10）番の必要な収入や所得のところですけれども、先ほどのクロス集計のところの分布等を反映しているのだと思うのですけれども、新型コロナウイルス感染症の影響実感で「良くない影響を感じる」と回答した方々の必要な収入や所得の実感平均値は 2.00 ということで、ほかの分野に比べても低くなっておりますし、「どちらともいえない」、「影響を感じない」と比較した場合においても 0.74 ポイントの低下ということで、差も少し大きいかなというのがこの分析結果から分かることかなと思います。

以上の３つの分析の結果について、資料戻っていただきまして、６ページ目から７ページ目に文章で記載しているということになります。６ページ目の下段から７ページにかけて、分析結果のまとめとしておりますが、７ページの最後の白丸の部分で 12 分野一律の傾向を確認できなかったこと、分野によっては一定の相互関係が確認できたことなど、それから必要な収入や所得においてクロス集計と実感平均値から留意が必要ではないかといっ

たようなことを記載しております。
　最後に、昨年のレポートと同様のまとめとしておりますが、一定程度の影響が新型コロナウイルス感染症によって与えられたと推測されるものの、明確な関連性を確認することができなかったとして結んでおります。
　新型コロナについては以上のようなまとめ方としております。以上、御審議のほどよろしくお願いいたします。

○吉野英岐部会長　ここは、去年の分析を踏まえて、ほぼほぼパターンを踏襲して、今年度の数値でもって説明をしているというところで、つくりは大体去年のつくりと同じということになっています。
　御質問があればお願いします。
　はい、お願いします。

○山田佳奈委員　一番最後の表Ｅなのですが、前にもちょっと松舘さんにお話しさせていただきましたが、今も（10）の必要な収入や所得で、ここやっぱり確かに「良くない影響を感じる」ということでマイナス 0.74 で平均に比べれば低いというのは、これは全体で今までの傾向からしてもそうなのですが、一方で「良い影響を感じる」というのが 3.80 ということで、平均から比べると最も高いというのは、これはどうにも読み方がよく分からなくて、これどういうふうに、必要な収入や所得としてやっぱりコロナがいい影響を及ぼしたということで感じていらっしゃる方が少なくても 172 人いらっしゃるということですよね。
　ちょっとここの何か解釈が難しいなと思って、すみません、ここどういうふうに読んだらいいのかなというので、お伺いできれば。

○吉野英岐部会長　これ、まず「どちらともいえない」、「影響を感じない」が基準値なのですよね。だから、平均値というか、コロナの影響がニュートラルな人をまず真ん中に置いて、真ん中というか基準値で置きましょうと、特にいいとも感じないし悪いとも感じないという人ですね、どちらとも言えないと。
　そこに比べて、「良い影響を感じる」というのは、この分野のことですよね、政策分野かな。ここの分野で「良い影響を感じる」と答える人は、収入、所得の実感のところでも実感できる、これはプラス、プラスだから、多分実はこうなるだろうということで、その幅が大きいと、非常に高いところまで行ってしまうということですかね。
　逆に、マイナス、マイナスで「良くない影響を感じる」という、この分野についてネガティブな影響を感じる人はやはり分野別実感も同じように低くなっていて、ただその幅もここは大きいということですよね。つまり影響力が大きそうなということですかね。
　プラスにしてもマイナスにしても、影響の及ぼす力が大きいのではないかなと、どっちが原因、結果と難しいけれども、一応コロナのほうを原因と考えれば、その振れ幅が増えるということですから、マイナスにもプラスにも。それぞれのパワーが強くて、ドーンと実感のほうに影響力が出てきてしまうと。どこもプラスはプラスに振れるし、マイナスはマイナスに振れているので、矛盾はあまりないけれども、実感への影響力の大きさの違い

は分野ごとにあるのではないかなという見方でどうでしょうか、事務局としては。

○松舘政策企画課特命課長　そのとおりだと思います。

○吉野英岐部会長　実感のほうにあまり影響を出さないのもあるのですよね。だから、プラマイがあんまり出てこないというやつね。ニュートラルな人と比べても、あんまり数値変わらないという人。そこは影響力が分野によって違う、一律に言えないというよりも分野によって違うという方が多分いいのではないですかね、影響力の大きさが違うと。

何でプラスなのと、例えばさっきの話、必要な収入や所得、この分野についてコロナのいい影響を感じる人がいるということですから、一定程度だと思いますけれども。何か給付金入ったとか、コロナで仕事増えたとかもいないわけではないという。

○谷藤邦基委員　コロナ特需はありますよ、一部に限られますが。

○吉野英岐部会長　その人たちからのところを見れば、その分野については、いや、むしろ仕事増えてよくなったと言うかもしれないね。そうすると、それは実感に反映されて、実感のほうがニュートラルの人よりもかなり高めに出ると。

○山田佳奈委員　何か絶対数というよりは高めにどう出るか。

○吉野英岐部会長　そう、どう出るか。

○山田佳奈委員　どう出るかということですね。

○吉野英岐部会長　はい。3.8 は高いと思います、確かに。さっき収入 2.幾つなのだから。

谷藤委員。

○谷藤邦基委員　この 3.8 というのは、14 ページの表Ｄ―10 で言うと「良い影響を感じる」というのを縦に見たときに、242 人から「不明」の９人を引いたのが分母になっているのですよね。

○松舘政策企画課特命課長　そのとおりです。

○谷藤邦基委員　その中で「感じる」、「やや感じる」というのは、５とか４をつけた人が 172 人もいるということだから、むしろ 3.8 より高くならないのとかと私も一瞬思ったりしますけれども、ほとんどが４なのかな、そうすると。

○吉野英岐部会長　なるほど、５ではないということね。

○谷藤邦基委員　ええ。「どちらともいえない」が３で、「あまり感じない」、「感じない」

が２とか１なわけですから、そう思えば、3.8 より高くても別に私は不思議がないぐらいの数字だとは思っています。

ただ、問題はこの 172 人はどんな人たちなのでしょうねというのが、多分そっちのほうが大きな疑問だと思うのですよ、山田先生の。

でも実際に、例えば薬局とかドラッグストアみたいなところは結構忙しかったですし、あとマスク作るようなところ、いずれ少なからずコロナ特需というのはあったわけで、あと医療関係者とかいろいろ貯金が増えたような人たちもいたはずです。

○吉野英岐部会長　まあ、ストレスも増えているけれども、貯金も増えている。

○谷藤邦基委員　ええ。ここはストレスの問題は聞いていないので、肉体的、精神的に大変でしたかという話は一応別な話になっていますから、

○吉野英岐部会長　収入、所得の面はそれなりに入ってきているのではないのと。

○谷藤邦基委員　ええ。だから、ポジティブな影響を受けている方々というのは一定数いたというのは、これは間違いなくあります。

ただ、それが圧倒的多数かというと、そんなことはなくて、やっぱり圧倒的多数、1,000 人以上の人たちが良くない影響を感じていると言っていて、特に分野別実感でも感じないという人が 750 人以上いたというところが実は一番問題であって、だからこれがコロナ収まったときどう動くかですよね、ここがね。

例えばここの典型的な人物像というか、属性のありようが例えば飲食店みたいなところで働いていた従業員のような人たちをイメージするとすれば、飲食店も営業を再開したりしていますから、仕事は出てきているのかなとは思うけれども、ちょっとそこは分からないです。やっぱり一旦変わったものが元に戻るかどうか、これは去年も言ったような気がするけれども、変化したものが元に戻るかどうかというのはちょっと分からないところがあるので、既にほかの仕事をやっていると戻らないかもしれないし、あるいは飲食店自体も相当数減ったというのもありますから。

○吉野英岐部会長　有効求人倍率が下がっているのを見ると、戻っていないのではないかという気もしますね。

○谷藤邦基委員　だから、ここの 751 人、７割の人たちがどうなるのかというところ、ここが今後の注目点なのでしょうね。

○山田佳奈委員　ありがとうございます。

○吉野英岐部会長　はい。

○和川央委員　それでは、感想とコメントを少しさせてもらえればと思います。

16ページ、今話題出ているところなのですけれども、ここも「良くない影響を感じる」というところの色のついているところ、これが減れば減るほど、良くないと言っているけれども、そんなにもう変わらないよね、なのでコロナの影響は軽減されてきたのかなと読めるのかなと思っていたのですけれども、去年に比べてここあまり変わっていなくて、それなりにコロナの影響というのは残っているのだなと考えれば、多分この分析は来年もやらなければいけないのかなと……

○吉野英岐部会長　まあ、１月だから、まだ影響あったという……

○和川央委員　ということなのですね。なので、来年もやらなければいけないかなと思いますというのが１つ感想になります。

２つ目は、ちょっとコメントというかレポートの書き方なのですけれども、１年目、２年前は明らかにコロナがひどくて、けれどもなかなかその影響を具体的に言い切れないねというところで、ちょっと煙に巻く表現で「一律の傾向を確認することができません」と表現したと思います。

昨年度は、大分軽減したねと、けれどもまだ残っているねというところで、そうはいいつつも収入や所得がまだひどいですよとか、大きな変化はあったけれども、まだ元には戻っていないですねということで表現はそのまま残ったのですが、今年このトーンで書くのかどうか。何が言いたいかというと、今年書くとすれば、例えばなのですけれども、昨年度とあまり変わりませんねというトーンで書く方法が１つあるかなと思います。

例えば６ページ、（３）、②、なお書き以下で収入や所得の実感が非常に低くなっていますと書いているのですが、ここを例えば「昨年度に引き続いて」ということで、変わっていないですという表現、あるいは最後の結びについても、昨年度に引き続いてこういう状態なのですと、今年１年間だけ切り取った表現ではなくて、実は５類にはなったけれども、まだまだ昨年度と意識調査結果からは変わっていないのですよというメッセージを与えるという書き方が１つあるかなと思います。

○吉野英岐部会長　これは、あくまで調査時点は１月ということを常に意識させないと、要は今はこうではないでしょうと言われても、いや、あくまで調査時点での結果の分析だから、昨年の調査と実はそんなに状況が劇的によくなったときの調査ではないということですものね。

○和川央委員　はい。例えば、では調査結果は一言で何なのと言われたときに、今年についても、いや、一律の傾向を確認することができませんでしたと答えるのかというと、今年答えるのはそうではなくて、昨年度と実は変わっていないですというのが多分今年一言で答えるコメントなのかなと思うと、それがにじみ出るようなトーンで書いたほうが一言でも説明しやすくなるかなと思うし、あと来年の切り口もそこからどういう分析をするかという切り口につなげられるかなと思います。

○吉野英岐部会長　ありがとうございます。

はい、谷藤委員。

○谷藤邦基委員　今の和川さんのお話に触発されてですけれども、去年との比較で言うと、例えば表Ｅの今見ていた必要な収入や所得のところの「良くない影響を感じる」2.0 というのがあるのですけれども、去年実はここ 1.95 なのですよね。2 を下回っていたわけです。「良い影響を感じる」のほうも去年 3.81 で、そういった意味ではここほとんど変わりがないと言ってもいいような状況です。だから、引き続き重圧がかかっているようなイメージですよね。どう表現するかというのはあれなのですけれども、だからそういう意味ではコロナの影響というのはじわっと、少なくとも経済的なことに関しては重圧感としてあるのかなと。

○吉野英岐部会長　この最初の表で、令和１の４月と令和５の１月、調査時点で比べたら、令和５のほうがよっぽど悪くないですか、状況。

○和川央委員　そうですよね。

○吉野英岐部会長　この青い棒でも赤い亡くなった方でも、亡くなった方なんかかなり多かった時期ですよね。だから、むしろ令和４より結果的に言うとひどくなっている中での調査したし、ただコロナというものの正体が分かってきたので、むやみにとんでもなく恐れるということはなくなってはいるけれども、やっぱり感染者数の数なんかとピークではないけれども、やっぱり令和４、ちょっと比べたこともちょっと入れていってもいいと思うのです、事実だから。むやみな恐れというものは確かに軽減されているものの、感染者数、死亡者数とも令和４の時点と比べれば、かなり数は増えているという状況でしたね。
　ですから、結果が変わらないか、もしかしたらもっと悪い影響があるなんて思う人も出てこないとも限らない時期での調査ですと。だから、むしろ変わらないというのはそれはそうだよなと思いますね、この最初の感染状況の表なんか見てしまうと。それを言えば、大体あとはいいかな。

○松舘政策企画課特命課長　そうしましたら、最初の２ページ目にコロナの感染状況を解説しているところがあるのですけれども、そこに県民意識調査を実施した時期がこの時期になっているというようなコメントを少し付け加えたいと思います。

○吉野英岐部会長　はい。

○松舘政策企画課特命課長　あと、最後の部分は昨年に引き続きというような表現等も入れながら、少し修正を試みたいと思います。

○吉野英岐部会長　これ何か家族にはい影響なのだけれども、子育てには悪いのだよね、不思議なもので。確かに保育所が閉まってしまうとかということですかね、子どもの遊び場がなくなってしまったとか、いろいろなリクリエーションがほぼ駄目とかというところ、

子育てには影響があったけれども、家族関係にはむしろワークライフバランスで家にいるようになってとか、話し相手になってくれたとか、そういう面でちょっと子育てと家族は微妙にずれているかなというところですかね、影響は。

でも、大体は令和４の流れを受け継いでしまっているというところですかね。

分かりました。でも、これだけ感染者数が増えて、死亡者数増えたら、もっと悪くなってもおかしくない、今思えば。どうですか。

どうぞ。

○和川央委員　正直私の実感とすれば、もっとよくなっているかなと思いました。５類にもなっていたので、以前より大分改善したかなと……

○吉野英岐部会長　いや、５類は５月です。

○和川央委員　そうなのですけれども、その頃から５類に向けてという動きがあったので、16ページのＥ表を見て、ああ、来年度も分析しなければならないなという思いをしたところです。

○吉野英岐部会長　コロナ明けとまでは言えないけれども、一定程度政策的な対応が少し緩和されているので、もう一年やってもいいぐらいかな。どうでしょうね。来年これやりますか。

○谷藤邦基委員　やったほうがいいと思います。というのは、この後どう変わるのか、要するにコロナの影響がなくなった結果としてどう変わるのかというのはちゃんと見ておかないと、まさにさっき言った元に戻るか戻らないか、戻るところ、戻らないところ、多分それぞれにあるので、それが幸福実感との関わりでどういう見解になっていくのかというのは、一度はフォローしておかなければいけないと思います。

○吉野英岐部会長　では、５類になった以降で少なくとも１回はやろうと。また２類に戻るということないですよね。感染状況によるけれども、よっぽど恐ろしい株が出なければ、大丈夫。誰も医者でないから何も言えないですよね。

○松舘政策企画課特命課長　厚労省では、今と同じような病原性とか感染性のウイルスが続く限りはこのまま。ただし、先ほど先生もおっしゃったように病原性とかちょっと違うようなウイルスが出てきたときは、また検討するというような言い方をしております。

○吉野英岐部会長　まあ、国としては経済を止めたくないからね。あんまりきつくはしたくはないだろうなとは思いますけれども。

分かりました。一番深刻な時期の調査であるということは、ちょっとやっぱりなるべく強く言ったほうがいいと、何か頭は明けたのではないのと思って聞いてしまうから、見てしまうから、あれ、こんな感じなの、いや、明ける前の調査ですと、何度もね。

これがどれだけ回復するかについても引き続き、だから今度はちょっと回復の分析になるかもしれないですね。こういういろんな規制や条件が緩和された中で人々の意識というのがどっちに振れるのかとかですかね。

では、少しその辺を書き加えてもらって、分析の流れとしては昨年度のトーンで行きましょうと。昨年度の比較をできるだけ入れるようにしていきましょうと。

一応はこんなもの、これでいいのですかね、用意されている資料は。

はい、お願いします。

○松舘政策企画課特命課長　あと、すみません。事務局から１点だけ委員の皆様に御確認をしておきたかったのが、第１回の部会の資料でお示ししました資料４の、今日も何度か出ておりましたけれども、補足調査の自由記載欄のところでございます。今年の補足調査から、実感の要因の具体的な事例として自由記載欄を設けて、回答者に記載していただいたのですけれども、その内容を基本的にはそのまま転記したものが第１回部会資料の４―２ということになります。

現在までのところ、こちらの部会は非公開ということで、資料もまだ公開していないのですけれども、今後資料の公開等に向けて手続きを予定しているのですけれども、その際資料４―２につきまして回答者の個人的な事情等もかなり記載している内容もありますので、回答者のプライバシーにも配慮した形で、そのまま全部ではなくて、抜粋した形で公表してはどうかとこちらでは考えております。

委員の皆様方の御了承が得られるようであれば、そのような形を取らせていただきたいと考えておりますが、御意見等伺えればなと思っております。よろしくお願いいたします。

○吉野英岐部会長　自由回答の記載の中身ですね。生をそのまま載せるのではなく、一応プライバシーに配慮をするという条件で、記載を考えて……

どうぞ。

○和川央委員　抜粋の考え方なのですけれども、原則全部出しますよと、ただこれはちょっと個人特定できそうなところを黒塗りするという趣旨でしょうか。それとも 107 あるのだけれども、その中から限定的に 50 個とかを抽出するという意味でしょうか。

○松舘政策企画課特命課長　どちらかというと後者のほうのイメージを考えております。

○和川央委員　ここは様々な考え方があると思いますが、私は基本的には全部出してよいのではないかと思います。多分委員の皆様の意見、考え方は異なるところかと思います。私としては、せっかく書いてもらったから、出してもいいのかなと。調査票には絶対に公表しませんなどの文言は入っていないですよね。

○松舘政策企画課特命課長　はい。

○吉野英岐部会長　去年まではどうでしたっけ。

○松舘政策企画課特命課長　去年までは、自由記載がなかったので。
今年から始めたものになりますので。

○吉野英岐部会長　そうかそうか。
はい、どうぞ。

○山田佳奈委員　第１回の資料です。資料４の補足調査のところで、６ページから、これは新型コロナのところではかなり具体的な記述で、これはここで公表しているのでしたっけ。ごめんなさい、ちょっと忘れてしまって。

○松舘政策企画課特命課長　そうですね。去年はここもそのまま公表しておりました。

○山田佳奈委員　第１回資料の資料４、補足調査のカラー版、資料４の６ページからのところで、6ページから 10 ページですね、結構具体的に残してくださっていることは確かですね。
これは、レポートの中に入れているのでしたかね。

○松舘政策企画課特命課長　こちらは、新型コロナに関しての自由記載なのですけれども、ここ昨年のレポートでも参考資料として入っていますね。

○山田佳奈委員　いろいろ考えてみると、これかなり詳しく出してくださっていることを考えると、まとめてということもあり得るかなと思ったのですけれども、確かに和川委員がおっしゃったように同じような形式といいますか、なるべく残すという方向でもいいかなという、確かに気もしてきました。

○吉野英岐部会長　調査の原則としては、個人が特定されるところは消す、それから誹謗中傷と思われるような特定の誰かを攻撃しているとか、非難しているというものは消す。何か一定の基準をつくって、そういうもの以外は、いただいた意見なので、しかも匿名性が確保できているという条件で載せるという方が普通ではあるよね。セレクトしてしまうと、何らかの意図をこちら行使したということになると、ではそれは何ですかと言われると、ちょっと説明が難しくないですかね。スペースの問題ですと、では重要な意見と重要でない意見というのを分けてしまうのですかと言われると、ちょっとつらいかなというので、他者とか本人に様々な悪い影響が出ないということが担保できる範囲で載せたほういいかなと、それは資料編でということですよ。本編は別に、そんな全部使う必要がないので、資料編で報告書なのか、ホームページなのか分からないけれども。ホームページに出すのだっけ、報告書というのは。

○松舘政策企画課特命課長　報告書はホームページに載せますし、あとこの部会資料も後ほど上げますので。

○吉野英岐部会長　どちらかというと和川さんに近い意見ですかね。
はい。

○和川央委員　繰り返しになります。今回の分析のスタンスがきちっと分析手法にのっとって成果物を出すというものであれば様々な形、秘匿という選択肢も１つ出てくると思うのですが､試行錯誤しながら我々が処理できなかったものも含めて皆さんに見てもらって、そして皆さんにも考えてもらって、何かあれば、皆さんにも提案してもらってという形でやるべきものなのかなと、いわゆる素材なのかなと考えれば、できるだけ積極的に公表すべきものかなと思っています。
一方で、出すことによるデメリットがあるのであれば、そこは当然考えなければいけないのですけれども、個人の特定とかであれば、そこを潰せば、解決できると思って先ほどの提案をしたのですが、事務局として何かしら懸念があるのであれば、その懸念を踏まえて判断すればいいと思います。

○吉野英岐部会長　はい。

○松舘政策企画課特命課長　こちらで考えていたのは、やはり生データということで、それをそのままホームページに公表するというのはちょっとどうなのかなというところでしたので、先生方の御意見を伺って、できるだけ出すとして、部会長先生おっしゃったようなある程度の基準で削除するのは削除してという形で整理していくという形で、少し作業を進める形でやっていこうかなと思っています。

○八重樫政策企画課評価課長　中身見ると重複意見、言葉や単語が違うのですけれども、ニュアンスとしては同じものというのを別に整理しているわけではなく書いていたので、ちょっと見やすさという面からはどうかなというところがあったところです。

○吉野英岐部会長　でも、考えてもみると、重複意見が多いということ自体が既に一つのデータなので、みんな同じことやっぱり言うのだねということ自体分析の根拠にしていると。平仮名を漢字に直すとか、それはやってもいいと思いますよ、明らかな誤字はこちらで修正したということで。重複だからといって一個にまとめるということもないかな。スペースが全然ないというのならちょっと話は別ですけれども。

○松舘政策企画課特命課長　では、そういった形で少し整理して。

○吉野英岐部会長　生々しさというのは、だからプライバシーのところで引っかかるものはやめましょうと。

○松舘政策企画課特命課長　承知しました。

○吉野英岐部会長　個人が特定されてしまうと、ちょっとかわいそうですから。

○松舘政策企画課特命課長　事務局からお伺いしたかったのは、以上１点でございました。

（２）その他

○吉野英岐部会長　もう一つ、今後の予定について、ちょっともし決まっていれば。

○松舘政策企画課特命課長　それでは、今後の予定ですけれども、次回第４回の部会、こちらが７月 27 日木曜日を予定しております。こちらでは今日までの御議論を踏まえまして、年次レポートの素案という形でまとめたものを御提示したいと思っております。

それから、幸福ワークショップの方も順次やっておりましたので、途中経過ではありますが、結果について御報告できればと思っております。

それから、第５回が９月 12 日火曜日になっております。こちらで年次レポートを確定していただきたいなと思っておりますし、あと今日は委員の皆様から補足調査の来年以降のところ、いろいろ御意見を伺いましたので、補足調査の内容といいますか、そういったあたりについても第５回で委員の皆様から御意見を伺うような形にしたいなと思っております。

○吉野英岐部会長　７月 27 日木曜日の午前中と聞きましたが。

○松舘政策企画課特命課長　そうです。午前中です。

○吉野英岐部会長　それから、９月 12 日は午後ということで。

○松舘政策企画課特命課長　午後でしたね、はい。

○吉野英岐部会長　ちょっと時間帯変わりますけれども、予定どおりやりましょうということで。

では、今日いただいた意見は、事務局で取捨選択をして、取り入れられるところはどんどん取り入れて、次回の７月 27 日は報告書の原案。

○松舘政策企画課特命課長　素案という形で。

○吉野英岐部会長　素案で、そのときはもう公開でいくの。どこからどこまででしたっけ。

○八重樫政策企画課評価課長　県民意識調査の公表のタイミングを見てという形になります。今まだちょっと流動的でしたので、そこはちょっと調査統計課のスケジュールに合わせた形で、やはり基データのほうが公表になってからという形になりますので。

○吉野英岐部会長　分かりました。去年はいつでしたか。

○千葉調査統計課主任主査　去年は６月末だったのですけれども、今年は３月末までの分を含めて集計しましたので、ちょっと報告書が完成前……

○吉野英岐部会長　遅れているの。

○千葉調査統計課主任主査　はい。

○八重樫政策企画課評価課長　回収率が低かったので、ちょっと時間を待ったというところがありまして、後ろにスケジュールがちょっと倒れていっています。

○吉野英岐部会長　そういうことね。分かりました。では、それちょっと見ながらやりましょうか。

では、一応次回に向けてブラッシュアップしていただけるということで、それをまた見せてもらって、御意見を言うということにしましょうか。

では、一応私の整理するのは以上で終わりますので、事務局の方にお戻ししたいと思います。

○八重樫政策企画課評価課長　本日は午前、午後と、長時間にわたり御審議いただきまして、誠にありがとうございました。

先ほどお話ありましたとおり、次回は年次レポートの素案ということで、本日いただいた意見を踏まえてブラッシュアップして完成形に近いものをお出しできるように準備をしていきたいと思っております。

次回の部会は、７月 27 日木曜日ということで、１か月ほどありますけれども、また引き続きよろしくお願いいたします。

３　閉　会

○八重樫政策企画課評価課長　本日は、これで終了いたします。ありがとうございました。